早稲田大學四十三年度

文學科第一學年講義錄

經子選釋

牧野謙次郎

62
409

62-409
1200701687593

始

牧野謙次郎 述

經子選釋

明治
44. 6. 3
製本

早稲田大學出版部藏版

經子選釋

論語……三
孟子……七五
大學……一三四
中庸……一六二
小學……一八九
近思錄……二二六

經子選釋目次 終

經史選釋

牧野謙次郎述

名作を選て解釋するは、通常詩文に於てするも、尙且難しとす、況や古代の經傳諸子に於てをや、蓋甲の是、乙の非、人各肺腸あれは、選擇の見、固より悉く同きを望むべからす、韓非云く、孔子墨子、共に同く堯舜を說くも、堯舜をして再生せしめは、吾未た其の果して誰に從ふを知らさるなり、嗚呼今や經傳の箋註紛羅として固く、所見を執るも、作者をして再ひ生せしめは、吾亦未た其の果して誰に從ふを知らさるなり、然らは則ち後の經傳百子を選釋すると、竟に得て望むべからさるか、曰く、曷そ其れ然らん、精金美玉、筐に盈ち櫝に溢る、固より至寶たり、分て藏蓄するに及ふや、隻金片玉、亦寶物たるを失はす、況や一班を見て、全豹を窺ふべしとは、古人已に之を言へり但、今人輕薄偸惰の習然るのみにあらす、頃者我か大學編輯部、經子選釋と名つけ、予をして四書小學近思錄及老莊韓非等の書若干篇を抄錄解釋せしむ、且つ曰く其の選や、寧ろ平かなるも、高きに失することなかれ、其の解や、寧ろ俗なるも、深きに過くる

と勿れ、平俗にして世に近くは、是れ講義錄の本旨なりと、予諾して之を爲す、然れとも其の筆を執り紙に臨むに及んては、選擇の決自から意に滿たさるあり、加ふるに平生の痼疾、隨て抑ゆれは隨て發し、勃窣たる理窟、竟に自制すへからす、想ふに其の讀者の病をなすや少きにあらさるべし、但經義を解釋するに至りては、大概朱子の說に依據して、其の歸趣を明示し、敢て徒に博引旁證すれとも終に何等裁決することなく、人をして適從するに惑はしむるが如きは、務めて之を避くることとなせり、此れ朱註の流行、尤も海內に廣くして、其の說亦較平正に近き故を以てなり、之を彼の上國觀光の客に譬ふるに、必らす先つ坦たる大道に由りて通邑名都の繁華富庶を一次視察し而して後に往復出入し山川田野を遍歷旁搜して可なり、然らすして初より好んで岐路に入り旁徑に迷ひて悟らす、自から以て計を得たりとなすは、吾未た其の智たるを知らさるなり、彼の經學を講する者、遽かに朱註を舍て、直に漢唐の註疏に溯り、或は妄に淸人考證の學に溺沒して、復た聖賢道義の學の何物たるを知らざるは、何を以てか此に異ならん、城闕市廛一閱已に畢り、而して後故墟を憑弔し、勝景を游賞するは、吾固より公等の爲を禁せさるなり、

論語

此の書、作者未た詳かならす、漢書藝文志に據れは、孔子が其の弟子時人に應答し、及、弟子が相與に談論し、又夫子より聞きし語を筆記せしを、孔子の卒後、與に論撰せしを以て、論語と名つくとなせり、東漢の王充の論衡に據れは、論語もと單に論と稱し又傳と稱す、西漢時代には、古論齊論魯論河間論の各種ありて、篇數も同しからす、其の論語と呼ひしは、孔子の後裔、孔安國が、武帝の時、魯人扶卿に敎授し、始めて名けて論語と曰ふとあり、(論衡正說篇)以上の如く各種の論語ありしを、西漢の末、張禹齊論中の問王知道の二篇を削り、魯論に合せて、今の論語二十篇となせり、而して他の論語は次第に散佚して傳らす、論語の編者に就ては、鄭玄は仲弓子游子夏等とし、朱子は有子曾子の門人となす、其の他衆說紛々たり、佐藤一齋翁は、孟子荀子の書中に、詩書の語を引きしに拘らす、共に一言の論語に及ふなきを以て、戰國の季憂道の學者が、孔門一派の私かに傳へし筆記を裒輯して一書となせり、故に均く孔子の弟子なるも或は尊んて曾子有子の如く敬稱を書し、或は顏淵子貢の如く字を書し、或は琴牢を單に名を書して牢と曰ひ、原憲を憲と曰へるが如く、其の稱呼一ならさ

るは、乃ち其の證なりと云へり、此の書注解、東漢に包咸周氏(名佚す)馬融鄭玄等の著あれとも、今は皆傳はらす、魏の何晏に及んで、諸說を輯めて、集解の編あり、即ち今存する所の古註なり、然れとも其の解專ら訓詁に止り未た義理の精微を研鑽尋繹するに遑あらす、宋に至りて周濂溪程明道伊川の兄弟張橫渠等出て、道學大に興る、朱子(名は熹字は元晦世に晦庵先生と稱す卒して文公と謚す)乃ち程氏の學に基つき、漢唐の注疏より現代諸儒の說を通考し、間斷するに己か見を以てし、註釋をつくり、論語集註と名つく、世之を新註と云ふ、此より以後學者、論語を講するに、或は古註を用ふるあり、或は新註を用ふるあり、其の所見により、各異同ありて一定せす、要するに論語は、孔門師弟の言行錄にして、文辭の妙絕なるや、溫潤含蓄あること寶玉の如く、至聖群賢の動靜語默を記するや、玩味の久き、益々親く警欬に接して、敎を机席に承くる概あるを覺へしむ、故に支那は論するなく、我か邦にても、夙に應仁帝の朝に傳はり、爾來上下の間に尊崇せられ、足利時代に叢林の間には、圓珠經の稱あり江戸時代に及んては、伊藤仁齋の如きは推して最上至極宇宙第一の書となせり、註解の書甚た衆し、今尤も簡便なる者を擧くれは、新註にありては、安部井裴の著はせる論語輯疏と、古學にありては安井息軒の論語集說あり、解釋共に其の概略に止まれ

とも、專家以外の人は、其の大體大義を知るを得べし、講義錄としては、中村惕齋の論語示蒙句解、毛利貞齋の論語俚諺鈔、溪百年の論語經典餘師等あり、示蒙句解比較的に尤も善し、今予は新註に據り、時に參するに他說を以て、之を講述することゝせん、

子曰、學而時習之、不亦說乎、

(總旨) 此の章、論語第一篇の首にあり、同篇を學而と名けしは、本節の學而時習之より取りしなり、章の主意は、爲學の全功を以て、人に示すにあり、己を善くし人を善くし、共に天道を樂むを、孔子の根本主義なる仁の極致となす、故に先つ學習して說ぶを以て始め、次に朋來りて樂むを以て繼く、然れとも其歸宿は、己か德を成し、以て天職を完ふするにあり、彼の世に遇ふと遇はさるは、天命の存する所にして、吾に於て何そ關せんや、故に人の知らさるも慍ますして君子たるを以て、終結となせり、通章俱に學の字を以て、直貫到底す、次節の有朋と、三節の人不知との上、宜く俱に學而の二字を添へて看るべし、而して第一節學習を說き、己の本領を立て、第二節朋來を說き、己より推し人に及ほすを述ふ、是れ順境、第三節人不知を說き、內に蘊蓄して外に發展の機を得さるを述ふ、是れ逆境たり、三箇の不亦乎の字、學中の境界を、一一指點し、人をして

默々自から思ひ、鼓舞向上して已まざらしむ、亦絶妙の筆墨たり、

（解義）子　男子の通稱、一般の男子に附して云ふ、又一說に男子の敬稱にて、後世の先生と云ふ如し、人の姓に附して稱す、本書にある有子曾子の類是れなり但、本書孔子に限り、單に子と云ふて、姓を稱せず、是れ論語は孔氏一流の私書なれは、內辭として尊親の意なり、春秋に魯は侯爵なれとも、魯侯を書して單に公と云へるも、亦同例たり、學　效の字の意にして、まねならふの義なれは、門人となりて師より業を受くるを云ふ、而　上を承け下を起すの詞、學は初めて知り、習は重ねて修むることにて、上下各一義あるを連繫して云へる故に、而の字を用ゆ、時　時時のことにて、一時的にあらす、即ち屢次の意、習は既に受けし業を繰り廻して、幾度ともなく溫習するを云ふ、之　學ふ所の事理を指す、亦　語助、亦は上を承る詞、又旁及の亦として、上下相須の意、即ち或る外物に對して云ふ、又單被の亦として、上文を承けす、但語助とすることあり、孟子に亦不足弔乎とあるは、旁及なり、本文の不亦樂乎は、語助なり、疑詞なり、說　悅と同し、心嬉しく思ふなり、

（通釋）孔子の云はるゝには、凡そ人初め未知未熟であるに、先知先覺の者に就き、まねらひ、能く屢次に心掛け、溫習の工夫を積み累ねて、何時となく自然に己の身に會得して、初め未た知らざることを知り、未た熟せざることを熟するときは、その胸中の感じは、何を以て形容せん、何んと嬉しきことなきか、

有朋自遠方來不亦樂乎、

（解義）朋　包咸は同門を朋と云へとも、朱子は汎く同類と釋せり、即ち同志の人、樂は蒼頡篇に喜也、與悅同とあり、朱子は悅に比すれは、其の嬉しさが、外に發舒して溢れ出る氣味に解せり、即ち面白きこと、

（通釋）更に一段進みて、曩に未知未熟にして、稍くに先知先覺に、まねらひし我が、今は智德成就して、これを他人に傳ふる程の地位に立ち、近旁の地は問ふまでもなく、遠き四方の國國より、同志篤學の士ありて聚ひ來ることありて、自分を先知先覺の明師と仰きて、まねならはんとするに至る、此れ獨り、我か學びし道を以て、己を善くするのみならす、更に進んて廣く衆人に推し及ほし、物我共に進歩向上の途に就くことなれは、洵に順境に乘して何んと面白きことにあらざるか、

人不知而不慍不亦君子乎

（解釋）人　汎く世間一般の人を云ふて、國君宰相も、其の中に含蓄す、　不知　自分の道德才能あるを知らざるなり、　慍（ウン）　古說には、怒也怨也とあり、朱子は含怒之意と說けり、父執秋月韋軒翁は、其の義を敷衍して、面白く思はぬ位のこと忿怒するを云ふにあらず、譬へは一泓（オウ）の止水（ヒトタリ）の少しの波をも起さゞるが如しと釋せり、　君子　道德ある人、

（通釋）以上は順境に立てる人を批評せるが、更に逆境に處する者に就て云はんに、前節と同等なる學習の工夫を積みながら、不幸にして世間一般上下を通して、何人も之を知るなく、空く高德偉材を抱きて、草野貧賤の間に、一世埋もれ朽ち果（ハテ）んとするも、一毫の不平心なきは、何んと眞に學問の功已に熟し自信の篤くして富貴も淫せず貧賤も移さざる底道德の成就したる君子にあらざるか、

（餘論）古昔周代の盛なるや、敎學の則、選叙の制、頗る觀るべきあり、而して鄕擧里選の法は、尤も時王の留意せし所なり、今其の概略を云はんに、閭（二十五家）に塾あり、黨（五百家）に庠（シヤウ）あり、州（萬二千五百家）に序あり、此れ皆鄕學の名にして、即ち小學に屬す、國都に大學ありて、閭塾より遞次して、上り、王都の大學に達す、

人生れて八歲にして、小學に入り二十歲（或は十五歲とも云ふ）大學に入る、一定の學科（文武六藝の細目あれとも略す）を修め、九年にして大成と云ひ以て卒業の期とす、既に大學を出つれは、各々材德に隨ふて登庸し、賢才は上進し卿大夫となり國政を司るものとす、而して王太子より以下、上士の嫡子に至り及ひ庶人子弟の俊秀なる者、皆進んて大學に入ることを得、之を鄕擧里選の法と云ふ、周室既に衰へ、政柄貴族官僚に下移するに及て、先王の嚴禁たる世卿世官（閥族勢官、公職を子孫に私授するを云ふ）の弊滋々（ヌ〳〵）作（オコ）り、學校廢壞して、鄕擧里選の法復た行はれす、孔子是の時に生れ、起て匡濟を圖れとも、時勢の可ならさるや、終に奈何とも爲す能はす、從遊の士七十子、皆賢哲英偉の人を以て、胥共に斯の學を講習し、以て時運の回復して豪傑の出つるを俟てり、是に於て孔子之を皷舞勉勵して、本文の言を爲せり、蓋、大學人に敎ゆる根本義は今の世に傳ふる大學の書に揭けし如く明（ニシ）明德（テ）、新（ニシテ）民（ル）止（ル）於（ニ）至善（ニ）の謂ゆる三綱領に過きす、而して本文第一節に學而時習之と云へるは、乃ち己を修むることにて、彼の明明德の義なり、第二節に有朋遠來と云へるは、乃ち人に推及することにて、新民の義なり、人不知而不慍と云へるは、乃ち時により地に

より進退行止することにて、止於至善の義なり、斯の三者は、もと大學の根本義にして、今は世の衰亂に逢ふて、復た親く此の盛の典に接するを得さるも、幸に同志の群弟子ありて、能く卓然獨立して其の缺欲を補ふことを得、是れ其の不亦悅乎と云ひ、不亦樂乎と云ひ、不亦君子乎と云ふて、慰籍奬勵する所以なり、

有子曰、其爲人也、孝弟而好犯上者鮮矣、不好犯上而好作亂者、未之有也

（總旨）此章、人に孝弟を務むることを奬勵するを主とす、分て二節となす、上節は其の不好の邊より觀察して、孝弟的の人は、自から惡に向ふて去らさるを見す、下節は、其の好邊より觀察して、凡そ無數の好事都て孝弟より來るを見す、而して君子務本の二句を以て、跌宕拓開し、上下の過峽を作す、王觀濤は本立而道生の語を評して曰く、立の字、栽培して牢固にする意あり、生の字、活潑として洋溢する意ありと、

（解釋）有子　有は姓、名は若、有子と云へるは、本章はもと其の門人の記錄なれはなり、其爲人也　其は、代名詞にて、多くは上に承くる所あれども、此は虛設なれは、唯、下の爲人と云へるを起さんが爲めに用ひしなり、也は決定の辭と、下を起す辭とあり、此は後の方にして「や」と讀むへし、或る人の人柄はと云ふ意、孝弟　弟は悌と同し、善く父母に事ふるを孝と曰ひ、善く兄長に事ふるを悌と曰ふ、犯上　己れより上たる人、（同姓の尊長は上の悌に包含すれは除く）上官若くは同僚の先輩等を云ふ、鮮　少なり、矣　過去に係けて云ふ辭、鮮かりきの意、作亂　國憲國法に悖り、道理に逆ひ、又は人と爭鬪する類、未之有也　此の也は、決定の辭なれは「なり」と讀むへし、即ち斷言すの意、

（通釋）有子が云へるに、或る人その人柄はと尋ぬれは、內方に於ては、孝にして善く父母に事へ、弟にして善く兄長に事へ、性行溫良易直なるに、外方に向ふて粗暴の氣を振り舞はして、長官先輩等の上たる人を凌き犯さんことをすき好む者は、古來鮮かりき（其の實絕無とも云ふへきなれとも、己の臆斷なれはとて謙遜し鮮と云ふ）既に上たる人を凌き犯すこと好まさるに、更に一層の惡事を働きて、國憲國法に悖り、道理に逆らひ、又は人と爭鬪するが如き暴亂を引き作さんことを、すき好む者は、如何なる世と雖も、未た左樣なる矛盾的行動をなすことはあらざる也（也の字は斷言の意）

君子務本、本立而道生、孝弟也者、其爲仁之本歟、

（解釋）務　力一杯骨を折ること　本は木の根なり樹木の根より、幹生枝繁げる故に、又始と解す、　立　仆るの反對にて、永く確立して動かさるなり、　道　もと人の往來する路次を云ふ、　それを借りて人の由り行ふ事理を道と云ふ、乃ち天下萬人必す循行すへき者なれはなり、　也者　特に鄭重に抽き出して云ふ辭、孝弟と云ふ者はの意、　其　「それと」譯す、注意を與ふる辭、　爲仁之本　爲は行と同意、仁道を行ふ始なり、仁は朱子の解に、仁者愛之理、心之德也と云へり、愛之理は、愛の根源にして、心之德は心の持ち得、即ち兼ねて義禮智を心に有するを云ふ、仁字、場處によりて、單に愛之理を以て解釋するあり、朱子派にては、之を偏言之仁と云ふ、又心之德を以て解するあり、　之を專言之仁と云ふ、四書の中、單に仁のみを云へるは、多く專言之仁にして、仁義若くは仁智の如く對舉するは、多く偏言の仁と知るべし、本文は專言之仁を以て云へり、乃ち仁は譬へは水源の如く、百事の行は、水流の如し、而して水源の流は、先つ第一坎に盈つれは、第二坎に入り、又盈つれは第三坎に入るが如く、秩序的に逐ひ行くものなり、仁の發して百行となるも先つ第一手近なる父母兄弟の間に見はれ、而して後に廣く他に及ふ者なり、故に孝經にも、孝者百行之本也の語あり、又一說に爲を「たる」と譯し、「仁の本たる」と讀みて、孝弟より仁道が生す」と解すれとも、爲仁を行仁と解するは論語中に其爲仁矣不使不仁加乎其身と云ひ、子貢問爲仁、堂々乎張也、難與並爲仁矣と云ひ、爲仁由己、豈由人哉と云へるが如く、多く例證あり、　歟　疑詞「だらうか」の意、亦有子の謙辭なり、

（通釋）君子は本を務む本立て道生すと云へる聖語（君子務本云云、清の劉寶楠は漢の劉向の說苑後漢書延篤の傳、皆孔子の語となせり、今之に從ふ）あり、乃ち成德の君子は、凡そ事を爲すには、骨折りて力を根本の確立に用ゆ、何となれは、根本既に立ては、物事を處置するに、千變萬化の道は自然に生すへし、而して今吾が云ふ所の孝弟の如きは、乃ち仁道を推し行ふの本ならんか、蓋人に孝悌の行ある者は、必らす慈愛和順の心ありて、其の發現するや、秩叙的に近きよりして遠きに及ひ親きよりして疏に及ふものなれば、乃ち根柢ありて突飛的ならす、永續的に着實穩健に進むことを得て、一家より一國天下に及ひ、同族同類の人より、禽獸動植の諸物に至るまで、亦各仁德を被るに至れはな

り、

（餘論）孔門の敎、仁を根本義として、孝を百行の首とす、夫れ人の始めて生するや、生を天に稟け、男女ありて後に夫婦あり、夫婦ありて後に父子めり、子は孫を生み孫は曾孫を生み、曾孫は玄孫を生む、禮に於ては五世にして親絶ゆと稱するも、骨肉血族の實は、後胤の有ん限り依然として骨肉血族たり、蓋、上帝の生を人に授くるや、宇宙は移りて人身に寓す、故に宇宙は一大人身にして、人身は一小宇宙なり、一大人身たる宇宙を生するは、上帝にして、一小宇宙たる人身を生するは、父母なり、上帝邈々として、親く至り見るを獲す、父母は日夜眼前にありて、鞠育敎養の恩を蒙ること至大至厚なれば、本に報し恩を謝する禮を以て之に事かふること、他物の比すべきに非す、是れを反始報本の道と云ふ、之を聖人一本の敎と云ふ、是れ孔子の先王を祖述し萬世に傳ふる敎義となす、彼の君に忠を竭し友に信を守ると云ふも、亦皆此の孝心より推して、他に及ぼすものとす、孝經に曰く、夫孝德之本也、敎之所由生也（中畧）故以孝事君則忠、以敬事長則順と、彼の後世東漢の韋彪が求忠臣必於孝子之門と云へるも、亦實に此の義より胚胎して述ぶるなり、孝經又世の父母に不孝にして而も

位愛を說き敬愼を談する者を論して曰く、不愛其親而愛他人者、謂之悖德、不敬其親而敬他人者、謂之悖禮と、錢吉士は曰く、門內多忍心者、其人必不可近、親者疎、如何令疎者親也、家庭無愧行者、他事皆足相信、親者親亦可使疎者親也と、亦善く此間の消息を說く者と云ふべし、本章有子の言、孝弟を以て仁を行ふの本始となせるは、眞に孔敎の本意を獲たり、論語の編者、此を以て首章學而の次に置きしは、豈に亦偶然ならんや、去れとも、孝の道亦之を行ふべき人によりて、相同からさるあり、必らす一に拘泥すへからす、請ふ下に擧ぐる數章を參觀比見し、以て其の義を知るべし、

子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力則以學文

（總旨）此の章、幼學敎養の事を論す、易に蒙以養正、聖功也とあり、童蒙の時、正道を以て養成するは、敎育の大端にして、他日聖人に造る功も亦此に外ならす、孝經に親生之膝下、以養父母、聖人因嚴以敎敬、因親以敎愛とあり、子幼より父母の膝下に生長し、一方には威嚴の畏るべきを見て、一方には恩情の親むべきを見るなり、聖人善く斯心を捕捉し來りて、愛敬の道を立て、名けて孝弟と云へり、今此の章、先づ入孝出弟を言ふて、孝弟の須臾も離るべからさるを示し、然

る後言行交際閑居等に渉り、時となく處となく、天則の範圍中に在るべきを云へり、而して孝弟本と爲り、其の道生ずるなり、乃ち謹而信なるは、謂ゆる一舉足而不敢忘親一出言而不敢忘親より生ずるなり汎愛衆而親仁は、愛親者不敢惡於人敬親者不敢慢於人より生ずるなり、而して行有餘力則以學文は、立身行道、揚名於後世以顯父母と云へる孝經の敎、蓋此に賴りて益成緒に就くを得べし、昔人此章を論して、此都從孝弟二字串下、最爲親切と云へるは信なり、

（解義）

弟子　少年學生を言ふ、父兄に對しては子弟と云ひ、師長に對しては弟子と云ふ、管子に弟子職と云へる一篇あり、學生の先生に事ふる道を說きしを見ても、當時學生の通稱たるを知るべし、入則孝出則弟　入は內方に在り出は外方に在るを云ふ、禮記內則の篇に異爲孺子室於宮（古代上下通じて家屋を宮と云ふ）中とある如く、古昔は父子別居すれば、其室より父母の所に至るに就て入と云ふ、又十年（大戴禮には八歲に作る）出就外傅居宿於外とありて、十歲に至れば、外方へ出て學問をなすが古代の定則たれば、入に就ては孝を言ひ、出には弟を言へるなり、弟は善く長者に事ふるなり、謹而信　謹は動作起居等の事、皆常度ありて亂雜ならず、信は言語に實誠ありて無責任ならず、汎愛衆而親仁　汎はもと浮ふ貌、それより轉用して普遍の義となせり、衆は周語に人三爲衆とあり多き人數を云ふ、それより引申して、多人の中にありて、格別異なりたる行爲あらさる人、即ち平凡の者をも衆と云ふ、仁は仁德ある人、即ち衆人中の賢者、汎愛は一樣に擇はずして愛す、親は特別に昵懇にすれば、中間に而の字を加へて云ふ、行有餘力則以學文　餘力は餘暇なり、朱註に文は謂詩書六藝（禮樂射御書數）之文とあり、即ち汎く學問を云ふ、一事を行ふて餘暇ある每に、直ちに利用して文を學ふ、每日盡く孝弟以下の六事を、行ひ畢はりて、然る後に始めて文を學べしとにはあらず、一說に此の句は弟子學問の秩序的なるべきを示すなり、曲禮に人生十年曰幼學、又、內則二十年學書計朝夕學幼儀請肆簡諒十有三年學樂誦詩舞勺、成童（十五歲）舞象とあるが如く、古代幼學敎授の法、一定せり、然れとも弟子の精力尙ほ餘裕あれは、其の定法に拘らず、則ち文を學ふべし、文は道藝にて、謂はゆる六藝乃ち大人の學問なり、本文に行有餘力とあれは、餘力なき者は固より弟子の身を、以て妄に等を躐て、大人の學問を爲すを得さるは知るべきなりと云へり、姑

く錄して參考に備ふ、

（通釋）人生れて孰か父母兄弟なからん、而し其の外物に接觸するや、亦皆父母兄弟を以て始めとす、孔子乃ちその本性より發動せる善行に就て啓蒙の敎を論述して云はるゝには、弟子（先づ一語道破し、衆人を警醒す）入ては善く父母に事かへて孝道を竭くし、又出ては善く長上に事かへて弟道を守るは、天賦の良心、外物に應して動くの效を見るべし、善く此の心を推廣して、其の己を修むるや、一動一靜にも定則ありて謹み、一問一對にも誠實にして信なるべし、人に交るに至ては、衆人に對しては、汎愛して擇ふ所なく、而して殊に仁人に向ふては、更に親近すべし、さすれば他日一視同仁の量此に基き、師友切磋の資此に因りて益〻大なるべし、此皆弟子の當に力行すべき者なり、尙力行して餘暇あれば、決して油斷なく、宜く其の時間を利用し、勉强して文を學ふべし、さすれは、知識益〻發達し、道德隨ふて亦向上して有爲の人物となるべし、たとひ、然らざるも、亦謹厚にして過ち寡き良民たるを失はざるべし、

子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣

（總旨）此の章、學者の人倫上に向ふて、實踐の工夫を凝らすべきを言へり、學問を無用視して、勉むるに及はすと云ふにはあらす、又按ずるに子夏は謂ゆる孔門十哲中特に文學を以て著はる人なり決して學問を輕視する者にあらず本文に未學と云ひ學矣と云ふて、學の字を重出疊見せしを觀れば、通章の意、反て學問を本位として、標準として他を比較して論せしに似たり、蓋、人倫に於て、能く情文兼ね至り、經權悉く協ふこと、本文の如くなれば、未だ學ひすと曰ふと雖も、已に學びたりと云へるは、是れ學問せし者に比較して、其の行事遜色なしと論斷せしものにして其の裏面には苟も人人學問すれば、亦能く斯の如くなることを得との意あるを見るべし、是に於て學問の功愈益廢すべからず、是れ子夏本章言外の意なるが如し、孟子曰く、學者所以明人倫也と、苟も人倫を外にして、學を云ふは、孔門一派の謂ゆる學にあらず、平日書を讀み文を修むるも、躬行は則ち違ひ、平日道を考かへ德を勸むるも、事に臨みては忽ち喪ふが如きは、又俗儒曲士の學にして、子夏の謂ゆる學にはあらず、

（解義）子夏姓は卜、名は商、子夏は其の字、衛の人、孔子の弟子、孔子より少きこと四十四歲、賢々易色　上の賢は動詞にして下の賢は名詞、賢者なり、易は換易な

り、取り換ること、色は女色なり、易色とは女色を好む心を以て賢者を好む乃ち心底(シンソコ)より好むことなり大學に誠意(ニスルヲ)の誠を釋して、如惡惡臭(クムカヲ)如好好色(シムカヲ)とあり論語里仁の篇に吾未見好德(ムカヲ)如好色者(クナルムカヲ)とあり、女色を好む心を假りて意の誠實なるを譬へて說くこと、古多くあり、一說に易は變易なり、賢者を尊敬し、顏色を變し、肅然として敬を致すを云ふとあり、又易は輕易(イ)なり、賢者を尊信して女色を輕んじ易(アナ)どること、心を女色に傾けざるを云ふとあり、能竭其力　其は上の事父母者即ち子たる者の代名詞、子たる者有ん限りの力を竭くして餘さざるを云ふ、能致其身　其は、上の事君者即ち臣たる者の代名詞、臣の身命を私有せずして、君主に差(サ)し上(ア)ぐるを云ふ、此れ平生無事の時は、盡忠を先にして、食祿の多少を論せず、一旦緩急あらば、一身を殺して、國家に報ずるを云ふ、言而有信　此れ現在と將來とを兼ぬ、現時の言は人を欺かず、將來の約は必らず踐履するを云ふ、而有の二字を玩味すれば、言はざれば兎に角にもあれ、苟も言へる以上は、必らず信にして、一語も背負せざる意を含蓄せり、雖曰未學吾必謂之學矣　周代の制、君に事(ツカ)ふるを得るは、學校卒業の後にあれば、既に事君の身となれば、固より已に學問せし者ならざるべからず、然るに當時政柄貴族に歸し、世卿(セイケイ)世官の人多く、鄕舉里選の法廢して行はれず、學はざる者と雖も、亦君に出仕するを得、故に國家に未學(ミガクハ)の臣下あり、吾は子夏自から云ふ、乃ち以上に舉げしが如く、立派なる人は、人倫の大端に於て失違することなくして、已に學びし人と異なることなければ必らず之を已に學たりと謂ふとなり、必謂とは、深く信して疑はさる辭、一說に不學と云はずして、未學と云へば、終始學はさるにあらず乃ち子夏の意は、以上の如き云爲(ウンヰ)行動に就て、世の人或は彼れは未た學ひずして能くすと云ふとも、吾は必らず彼れは學問あり、研究を積みて後に能くすと云ふなりと、蓋し子夏は孔門にありて、文學を以て著はる、故に重きを學問に措きて云ふ、前章孔子の行有餘力則學文と相待ちて、各其一理を云へば、論語の編者、特に之を此に置きしなりと、亦以て參考とすべし

（通釋）子夏亦學行の次第を論して云へるには、茲に或る一人あり、其の人や賢德ある人を好(コノミ)みて宛も普通尋常人が女色を好むと一般に、心底(シンソコ)より戀ひ慕ふて忘れず、父母に事かへては、能く其の力のあらん限りを竭し、主君に事かへては、能く忠義の爲めに我が身命を差し出たして、私利勝手を顧みず、朋友と交

るには、苟も言語を以て應接するに誠實を吐きて虛言を弄ばず、踐履を果して約束に違はず、以上の如き立派なる云爲行動ある人は、世間の者が、彼れは如何にも立派は、立派なれとも、惜むらくは未た學問せされは修養に於て闕くるあり、根柢淺し杯と評することあるとも、吾れ子夏に於ては、彼れは已に學問熟達の人と云はんとす、何となれは學問の目的は、人倫を明にして踐履するにありて、彼れは已にその目的を達し得れはなり、

孟懿子問孝、子曰、無違、

（解義）孟懿子は魯の大夫、名は何忌、姓は孟孫氏、懿子は其の謚なり、左傳に孟僖子（懿子の父、懿子と敬叔（懿子の弟）をして、禮を孔子に學はしむとあり、無違　朱註に謂不背於理とあり道理に背き離れさるなり、一說に下文の孔子樊遲に告げし言に據りて、無違乎禮以事親也となす、其の實は歸着する所は一なり、故に禮記の樂記にも禮者、理也とあり、

（通釋）魯の執政大夫に、孟懿子と云へる人あり、嘗て禮を孔子に學ひし者なり、一日孔子に親に事かへて孝を盡くす道を問へり、孔子對へて云はれしに、孝は順ふを以て道となす、故に一念一事違ふべからす、徹頭徹尾違ふべからす、違はされは、順にして孝となると、

樊遲御、子告之曰、孟孫問孝於我、我對曰、無違、

（解義）樊遲は孔子の弟子、名は須、遲は其の字、魯の人、御　孔子の乘れる馬車の御者となるを云ふ、孟孫、即ち孟懿子なり孟は伯と共に長なり、長子を伯と爲し次子を仲となし、三子を叔となし、四子以下共に季となし、若し庶子なれは長子を孟となすは、古制なり、又禮に國君の子を公子と曰ひ、孫を公孫と曰ふ、（以上は諸侯の子なり天子なれは王子王孫と曰ふ懿子の祖先慶父は魯桓公の子にして莊公の弟なり、其の後嗣二弟叔牙季友の子孫と共に、世々魯の大夫たり因て仲孫氏と稱す、叔牙の後叔孫氏季友の後季孫氏と、竝ひ號して三桓と云ふ、後又仲孫を稱して孟孫と曰ふ、孟孫は孟公孫の略語、

（通釋）既に懿子に對へし後、孔子は單に無違の一語を、懿子が誤解して、たゞ一意に親の心に順ふを以て孝とさんことを恐れ、或る機會に因りて、懿子に本意を了解せしめんと思ひしに、或る日、外出の時、門人樊遲が孔子の車に御者となれり樊遲は孟氏のに接近の機會を有する人なれは、孔子之に告け云はれしには扨前日彼の孟孫は、孝行の致し方を、態々我に向ふて問はれたり、其の時

我は孟孫に對へて、但簡單に違ふことなしと云へり、彼れ果して我か言の意味を悟り得しや否と疑ふなりと、

樊遲曰、何謂也、子曰、生事之以禮、死葬之以禮、祭之以禮。

（解釋）生事之以禮　生は生存中を云ふ、禮は朱子解して即節文也と云へり、節とは其の餘あるを節抑す、文とは其の不足を補修するとにて、事物の程度に於て過きす又及はさることなき恰當の法則を云ふ、父母生存の時、子たる者は、之に事ふるに自分相當の禮を以てし、過不及の失なきを云ふ、下句の死せる時の葬祭、亦皆之に倣らへ、

（通釋）樊遲は未だ孔子の云はゝ意味を了解することを得されは、更に質問して云へるに、無違との亟ひしは、全體如何なる意義を謂ひ玉ひしことなるかと、孔子因りて詳に說ひて云はれけるは、無違とは道理に背くことなかれの意なり、道理の天則を事物の上に著はし儀表となせるが即ち禮なり、故に親の生存せらるゝ時は、身分相當なる禮を以て事かへ、親が死亡せる後は、葬儀祭事、皆共に相當の禮を以てし、凡そ進むも禮を踰ゆるなく、退くも亦禮を闕くことなきは是れ親に事ふる孝道たりと、故に親の不義に陷らんとするを救ふて、親の心に忤らひし小松內府は、孝子と謂ふべく、又徒に親の心に順ふて、其の叛逆を助けし北條泰時は、不孝と謂ふへきなり、

孟武伯問孝、子曰、父母唯其疾之憂、

（解釋）孟武伯は、懿子の子、名は彘　父母唯其疾之憂　朱註に據れは、父母の子を愛するや至らさるなし、惟子の疾病あらんことを恐れ、常に以て憂となせは、子たる者に於て、宜く平常に父母の心を酌み取り、凡そ其の身を守る事柄は、何に吳となく深く謹愼注意すへし、是れ父母の心を慰安して孝たるなりと、又一說に父母をして我か子に限りて、決して不義不道をなすを心配はせざれとも、唯萬一疾病に罹らさるやと、それのみを憂慮せしむ、是れ子たる者の平生の行爲、深く父母の信用を獲るにあらざれば、斯の如くなること能たはす、孝たる所以なりと、佐藤一齋翁は父母の二字にて逗住して讀み切りをなし、其の字は父母の代名詞とし、人子が父母に於けるは、唯其疾を憂ふへし、故に平時にありて、能く防護し、又能く自身の操行を謹み、父母に心配を掛けて、疾を致さめざるやうにすへし、是れ乃ち孝道なりと說けり、諸說皆理あれとも、姑く朱說に從はん、

（通釋）孟懿子の子武伯、他日又孝道を孔子に問へり、孔子答へて云はるるは、君よ、人子の道たる孝を知らんと欲し玉はゞ、當に先つ父母が子に對する慈愛の心を識るべし、蓋し父母の子を慈愛する心は、何に物をもさて置き、先つ第一に常に子が疾病あらんことを恐れられ、朝夕寢ても起ても、又樂に觸れ哀に觸れ、思ひ浮ぶは子の身體上に疾病あらんかとの一條なり乃ち子に疾病あれは固より憂へ、疾病なければ亦其の誤りて健康を害して疾を起さんことを憂ふるなり、故に人の子として兩親に孝をなさんと欲すれは、先つ父母の心を深く體認して、身の健康無病ならんことを圖るへきなり、

子游問レ孝、子曰、今之孝、是謂二能養一、至レ於二犬馬一、皆能有レ養、不レ敬何以別乎

（總旨）此の章、孝は愛と敬とを主とすれども、尤も敬を闕くへからさるを云へり、今之孝是謂二能養一と云へは、今の孝は然らざれども古の孝は能く愛し能く敬せしことを知るへし、至於犬馬至於の二字概括する階級甚た廣く、單に犬馬のみに就て言ふにあらす、即ち上は骨肉子弟奴僕より、下は犬馬に至るまでを云ふ、骨肉子弟奴僕を撇去して、直ちに至賤の犬馬を提出せしは、人をして纔かに不敬なれは、能く養ふと雖も、便ち、犬馬を養ふと同一なるへきを思ひて、覺へす惕然として警懼せしむる概あり

（解義）子游姓は言氏、名は偃、子游は其の字、吳の人、孔子の弟子、孔子より少きこと四十五歲、是謂能養　是は非の反對にて是れぞと決定する辭、王引之は曰く、祇と同義なり、養は物を供へ養ふこと、孝經に用二天之道一、分二地之利一、謹二身節一、用以養二父母一、此庶人之孝とあり、禮記坊記篇に、小人（庶人）皆能養二其親一、君子（士以上の通稱）不レ敬何以辨とあり、乃ち能く其の親を養ふことは、庶人の孝にして、士たる者の孝道は養の上に、更に敬を以て親に事ふへしとなせり、今本章孔子の子游に答ふるは即ち斯の義にして、正に士道を以て之に責むるなり、　至於犬馬皆能有養　能は力の堪え得るを謂ふ、俗に云へる出來得るなり、親しき家族使役せる奴僕は勿論、至て卑賤なる家蓄の犬馬に及ふまて、苟も生ける者は、皆各養ふことが出來得るとの意、一說に犬は能く人の爲めに守禦し、馬は能く人の爲めに重きを負ひ人を載す、是れ皆能く人を養ふ者なるを云ふなりと、又一說に、禮記內則篇に、父母之所レ愛亦愛レ之、父母之所レ敬亦敬レ之、至レ於二犬馬一盡然而況於レ人乎と云へるを援きて供養上より云へは微賤なる犬馬に至るまて苟も父母が愛し蓄へる者なれは、亦能く之を養ふことあるを云ふとあ

り、諸説區々として一ならず、今姑く朱註に從ひ第一説を用ゆ　不敬何以別乎敬は朱子は主一無適之謂と解せり乃ち能く身心相離れずして、專一に物事を爲すを云ふ鹽鐵論(漢桓寛の著)の孝養篇に善養者不必芻豢(牛羊豚の類)也、以己之所有盡事其親、孝之至也、故匹夫勤勞猶足以順禮、歠菽(マメ)飲水足以致敬、孔子曰今之孝是謂能養、不敬何以別乎とあり、亦以て參考とすへし、別とは親と、犬馬の區別あるを云ふ、孟子に食而不愛豕畜之、愛而不敬獸畜之とあり、乃ち愛せず敬せざれは、畜養するも豕獸と擇ふなきを云ふなり、

(通釋)　子游孝道を孔子に質問せり、孔子教えて曰く、孝はもと古今となく、同一の理義なるも、吾今の親に孝行と云へる者を觀るに、是れたゞ其の親を奉養するを能くすと云へきのみ、若し能く奉養するのみにてあれは、妻子兄弟婢僕の徒より、推して下は至て卑賤なる犬馬に至るまで、苟も一家に關繫ある者は何れも皆相當の養ひ方ありて養へり故に必らずや能く父母に對して一事一物に謹愼注意し、心を外に散せず寸刻の怠り油斷なくして、始めて能く敬の義に叶ふなり、若し或は此の敬に叶はずして、唯能く兩親を奉養するに止まらは、聊か極端なる喩へなれとも、犬馬を養ふと、何を以て區別をなすべきか、區別するを得さるなり、

子夏問孝、子曰色難有事、弟子服其勞有酒食先生饌、曾是以爲孝乎

(總旨)　此の章は、孝の獨り敬のみに偏すへからす、宜く愛を盡すへきを云ふ、讀者當さに上章と相待ちて、孝の大義を發明することあるべし、通章色難の二字を最も重となす有事弟子服其勞有酒食先生饌は人子の其の親を敬するに禮を以てすることを言ひ、曾以爲孝乎の一斷案を下たし、以て上の色難の語と緊く相應す、而して中間弟子先生を雙擧し、明に對説し、有事は先生事あるなり、有酒食は弟子酒食あるなり、亦先生弟子を言はずして暗に互説す、是れ又一種の文法、

(解釋)　子夏已に前に見ゆ　色難　子の親に事ふるに際し、惟顏色を柔らけ悅ばしくすることが、難事たるを云ふ、朱子は禮記の祭義篇に孝子之有深愛(ふかきなさけ)者必有和氣(おとなしげ)有和氣者必有愉色(にこやかなるいろ)有愉色者必有婉容(おだやかなたち)とあるを援きて、故に親に事ふる際、惟色を柔げ悅はすを難しとなすと釋せり、又一説に、善く父母の志趣を觀て、其の發言を待たず、先たちて其の好める事を爲すを、禮に於ては、父母の色を承順すと云

ふ、此の承順をなすが、難きを、色難と云ふとあり、朱註亦取りて一説となせり、

有事弟子服其勞　弟子は弟若くは子を云ふ服は事なり、仕事として引き受けること、勞は勤勞なり、骨折りのこと、先生用事あれは弟子助けて其の骨折りごとを、我が仕事として勵み行ふこと、　有酒食先生饌　先生は父兄を云ふ、酒食の食、名詞として食物なる時は、音「シ」と讀む、饌は供具すること、弟子に酒や食があれは、先生に供へ奉てまつるを云ふ、一説に一家の子弟中、年幼なる者を弟子と云ひ、論語憲問篇に見、其與先生並行也とあるを、包咸は解して先生は成人なりと云へるが如く、年長なる者を先生と云ふ、父母に事あれは、幼者其の勞に服し、酒食あれは長者之を供具するを云ふとあり、　曾是以爲孝乎　曾は朱註に猶嘗也とあり即ち嘗の字の心持なるを云ふのみ、直ちに訓して嘗となすにあらす一説に曾は乃也とありて「すなはち」と讀む是とは上の服勞奉養を指して云ふとあり、蓋服勞奉養は、もと孝道ならざるにあらす、然れとも單に奉養のみを以て孝となすは既に前章に述へし坊記の言の如く、庶人の事なり、又曾子大孝篇に小孝用力慈愛忘勞可謂用力矣とあり此れ服勞の事にして、亦庶人の孝を云へるなり、孔子子夏に望むに、士たる者の孝を以てすること其の子游に於けると同し、故に示すに色難の義を以てして、服勞奉養のみを以て未た孝となすに足らざるを云へり、

（通釋）子夏孝道を孔子に質問せり、孔子之に敎えて云はるゝに、親に事ふるに際しては、深愛の情、其の心中に存するあれは、和愉の色、自然に其の表面に著はるゝあり、此の事が、最も爲し難きなり、故に必らす愉色ありて、然る後始めて能く孝を行ふとなすなり、若し、彼の父兄に事あれは、弟子其の勤勞に服事し、弟子に酒食あれは、父兄に供具するが如きは、尊敬の力と禮とを盡さざるにはあらざれとも、是れ形迹上の儀式なる者にして、曾て是れ等を以て孝となすに足らんや、父母に事ふるに深愛の心より發するにあらざれば、未た以て眞の孝と爲すへからざるなり、

餘論

孔子の循々として善く人を誘くや、亦各其の人の地位性質に因りて、之が訓誡を施せしは、以上數子が問孝の各章に觀るも、亦知ることを得べし、均く是れ孝を問ふに答ふるなれとも、其の懿子に於けるや、無違を以てし、道理の秩然として紊るべからす、名分の儼然として犯すへからさるを諷す、是れ懿子が魯の大夫に位し、謂ゆる三

桓の一に居りて、動すれは權勢に誇り僭踰に陷り易きを以てなり、史記に據るに、其の後孔子魯君の爲めに、三桓の權勢を殺かんと謀るや、首として抵抗を試みて肯んせざりしは、孟氏の一派となす、蓋孔子の聖なるや、當時既已に其機を未萠の際に察して、本文の如き言あるか、孟武伯に於けるや、父母惟其疾之憂を以てす、先儒曰く武伯憂ふへき疾病あれは、故に孔子之に攝生を愼み、父母に憂を貽すことなきを勉めしむるなりと、又先儒の說に據るに、子游は性質簡易なる人なり、故に孔子親に事ふるに、敬を以てすへきを敎ゆ、子夏は天禀生れ付き謹直なる人なり、故に孔子親に事ふるに愛を以てすへきを敎ゆと、且能く親を養ふは愛なり、子游固より已に之を能くす、而も敬せざれは、庶人の孝のみ、能く親の爲めに勞に服し、酒食を饌するは禮なり、子夏固より已に之を能くす、而も其の愛足らざれは、亦士の孝にあらす、必らすや能く愛し能く敬して、然る後に始めて君子の孝と謂ふべし、禮記の內則篇に曰く嚴恭儼恪非事親之道と、呂氏春秋の孝行覽に曰く和顏色養志之道也と、徒に謹直儼恪にして、禮法に局促し、父母をして反て窮屈に堪えさる思ひを起さしむるは、眞の孝養の道にあらす、是れ孔子の子游子夏の二子に向ふて、特に注意して各其の敎を異にせし所以なり、我か邦諺に、人を觀て法を說けの語あり、蓋亦能く此間の消息を解する者なるか、大凡聖賢問答論述の意を觀察するに方りて能く此の旨を體認し、類に觸れて長すれは蓋思半に過くることあらん、

子貢曰、如有博施於民而能濟衆、何如、可謂仁乎、子曰、何事於仁、必也聖乎、堯舜其猶病諸、

（總旨）此の章仁を求むる者、當に遠きに求むへからすして、當さに近きに求むへきを言へり、通章博濟者の爲めに法を設く、近取の二字、全章の要を概括するに足れり、孔子立敎の根本思想は、一の仁の字にして、子貢は聖門中特に言語を以て著はる者、其の設問の巧なるや、亦以て夫子胸底の秘庫を開きて、神寶を窺ふことあるに足れり、朱晦庵は已欲立の一節を評して、於此觀之可以見天理之周流而無間矣、狀仁之體莫切於此と云へり、蓋、論語中、孔子が具體的に仁を論述すること、本章の如きは、殆と他に多く求むへからす、學者尤も宜く潛心研思すへし、

（解義）子貢姓は端木、名は賜、子貢は其の字、衛の人、孔子の弟子、博施於民　博は廣なり、施は恩澤を施すを云ふ、禮記の禮運篇に、大同の治を論して、選賢與能、講信修睦、故人不獨親其親、不獨子其子、使老有所終、壯有所用、幼有所長、矜寡

孤獨廢疾者、皆有所養、男有分、女有歸とあり、劉寶楠は此を引き以て博施の事となせり、　而能濟衆　濟は、爾雅に渡也、成也、益也とあり、何れにても通す、古來多く濟渡の義を以て解す、今之に從ふ、博施は恩澤を施さんとする、我より云ふ濟衆は恩澤を被るべき人より云ふ、博施すれとも、衆未た盡くは其恩澤を被らさる者もあり、故に濟衆は博施に較するに、更に難事たり、故に中間に而能の二字を挿み、もと事の兩層たるを串説せる義なるを明にす要するに濟衆は、是れ又一歩を進むる事なり、何事於仁　何ぞ仁を今更に仕事とすることがあらん、乃ち仁の既に熟達成就せし者なるを云ふ、　必也聖乎　屹度聖と云ふへきならん、聖とは通なり、凝滯なく阻礙なく、天地萬物の間、向ふ處として居る處として、其の德普遍に亘り、感化の神なるや、大自在ならさるなきを云ふ、仁と聖はもと殊異なるにあらす、但仁は道理を以て云ひ、聖は地位を以て云ふ、朱子云く聖只是行仁到那極處と、乎は疑ふて未た定めさる辭、堯舜其猶病諸　堯は唐堯、舜は虞舜、共に支那上古の天子、中庸に仲尼〔孔子〕祖述堯舜とあり、孟子に言必稱堯舜とありて、孔孟の理想的聖人なり、病は其の及ばさるを遺憾となすを云ふ、博施濟衆は、我か性情を、人に通すると共に、人をして通せさるなからしむ、乃ち世界の廣き、生類の衆きとに拘らす、一人として不平の心なく皆其の希望を滿足し得るは、如何に堯舜の如き聰明なる帝王と雖も、猶其心には己が政治の未た不十分不行屆の事あるを遺憾とするを免れさるを云ふ、

（通釋）子貢孔子に問ふて云ひけるは、仁とは愛せさるなきを云ふ、如し恩澤を人に施す者ありて、先づ一家より一國に推し、遂に博く天下世界に及ぼし、一夫も其の澤を被らさるなく、一物も其の所を得さるなくして、能く衆を濟ふときは、何如、此の如き者は愛せざるなき仁と謂ふべきか、孔子答えて云はるるには、此の如きは何たゞ仁と云ふに止まらんや、必らずや通せざるなき聖ならんか、即ち仁を行ひて極處に到れる者にして、古の堯舜の如きも、此の成功は、猶且其の心に十分なる滿足はせずして、遺憾を懷けり、

夫仁者、己欲立而立人、己欲達而達人、

（解義）己欲立而立人　己は仁者を指す、立は仆の反對にて、確乎として定り動かざるを云ふ、　己欲達而達人　達は朱子解して如在此而住得穩便是立、如行要到便是達と云へり即ち此より彼に赴き至るを云ふ、欲の字は、上句の欲と、皆、

心の希望を云ふ、而の字、上句の而と、亦皆、則の字と同義に用ゆ、即ち己れ立たんと欲すれば、同時に他人を立つ、己れ達せんと欲すれは同時に他人を達するなり、此れ仁者博愛の心、自然に流露し、人己の間、縦かに一念動けば、一時並に至り、漸次の後るなく、彼此の肉體を隔てずして、交通洽治するの篤きを見るべし、讀者漫然看過するなかれ、要するに子貢の仁を言ふや、事功上に就て云ふ、乃ち事功の至大なる者便ち仁と爲すべきかの疑問なるに、孔子は仁を敎ふるに、人の心上に就て其の本體を見るべきを以てせしなり、蓋事功の大小はもと仁と相關するが如くなれとも事功は時に詐術を以てなすべく又運命によりて意外に成る者あり、而して仁の本體は心術の正と不正と公と不公との如何にて直ちに仁不仁の岐る處其活動の有無を驗し得べし子貢は仁を視ること形迹に於てす、其の弊や徒に外に馳するの耀あり、乃ち必らず施すこと博く濟ふこと衆からされば、仁となすに足らず、是れ其の位は天子其の德は聖人なる堯舜も、猶且能せざるを病める所以なり、故に孔子は直ちに仁の性たるや、初めより己れに具有して、外物を假らず、唯た能く擧げて身に行へば、其人其位の如何を問はず、其事其功の如何を論せず、亦一切平等

に皆仁たるを得べきを指示し、以て其の自から內に察識して、能く外に擴張すべきを誡諭せられしなり、

（通釋）

汝ぢは亦未だ仁者の如何なる仕方を以て仁を行へるかを知らざるなり、夫れ仁は人心の上にありて事功の上にあらず、仁者の心は至公にして私なし、即ち純然たる天理にして、一毫の人欲あらず、其の形體は、人我の別あれども、心神は共に同化して、復、彼此の間なし、天下の人を看ること皆我と一般なるが如し、故に己れ立て自から我が身を植てんと欲するときは、同時に人を立て、皆以て自から植ることを得せしめんと欲す、己達して自から其の志を遂けんと欲するときは、同時に人を達して皆以て自から遂くることを得せしめんと欲す、以上の如く心の天理周行して、身表に流露し、寸毫の私欲其の間に雜はるなければ、是れ實に仁とすべし、乃ち是れに由りて、博く施して衆を濟ふこと固より仁たり、施すことは必しも博からず、濟ふこと必しも衆からざるも、亦仁たり、畢竟仁は公と不公とを論じて定むべし、業の廣きと廣からざるとは、必らずしも問ふべきにあらず、

能近取譬可謂仁之方也已、

（解義）能近取譬　能近取譬　譬は喩なり、物と物とを比較して、或る道理を發見すること能く手近く己が身に引き較らべて、他人の欲するを知りて、之を推し及ぼすなり、換言すれば己れか欲する所を人に施し、己れか欲せさる所は施すなきを云ふ、上節己欲立而立人云々は、但、仁者の樣子を說く乃ち別に取譬を待たず、推及を待たずして自から然るなり、然れども此の地位は未だ猝に到達するを得ず、故に本節に其の實際上手を下たす工夫を指出して云へるなり、近の字は、上節の己の字より生出し、博と衆の字と對針す、取譬の下、推其所欲以及於人の語を添へて看るべし、而して其の勉强用力の深を要するは、一の能の字に見て知るべし、乃ち能不能は我が力量の堪へ得ると堪へ得ざるとの義にて、能近取譬とあれは、近取譬の決して容易ならざるを見るべく、又是非共に爲さゞるべからざるを見るべし、孟子に彊恕而行（勉强して仁を行ふ）の語あり、本文の能は、乃ち彊字の意なり、仁之方　方は術なり仁の遣方を云ふ、彊恕は未だ直に仁と云ふべからず、彊恕の工夫成熟するに到りて、便ち是れ仁なり、故に朱子は本節を解して、恕之事而仁之術也於此勉焉則有以勝其人欲之私而全天理之公矣と云へり、

（通釋）上節の如く己を立て己を達すると同時に、人を立て人を達する事は、本心の流露して自然に爲する所なれども、此れは仁德ある者の行にして、通常の人並に學者は猝然として直ちに及ふべきにあらず、然らは其の仁を求むる工夫は、果して如何なる方法に據るべきか、即ち先づ己が心に反省して、己立たんと欲する念慮あれば、人も亦立つを欲する念慮あるを察識すべく、己達せんと欲する念慮あれば、人も亦達するを欲する念慮あるを察識すべし、乃ち己れが欲する所は、人も亦欲する所なるを思ふて、能く人己の間を通して、凝滯なく阻礙なからんことを務め、共に至善の域に向上進步することを圖るべし、

顏淵問仁、子曰、克己復禮爲仁、一日克己復禮、天下歸仁焉、爲仁由己、而由人乎哉、

（總旨）此の章、下論顏淵篇の首章にして夫子顏子に語るに、爲仁の全功を以てせり、只一個の克己復禮、都て之を包括す、而して克己復禮は又、非禮勿視聽言動の上に在て務むべし、但、非禮と禮との辨別は、何に據りて之を知るを得るか、世に固より非禮之禮なる者あり、乃ち禮に似て非なる事柄を云ふ、我に能く鑒

別選擇の明なければ、亦誤りて之に陷り易きなり、顏淵嘗て孔子を稱して、夫子循循然善誘人博我以文約我以禮と云へりと（上論子罕篇にあり）孔子亦嘗て敎を論じて曰、博之以文約之以禮亦可以弗畔也夫（顏淵篇）と、博文は、乃ち學問して智を研き、識を廣むるを云へば、克己復禮に先たち、博文の工夫亦忽にすべからずと知るべし、顏淵は孔門第一の弟子、世に亞聖と稱する大賢を以て、孔子の根本思想なる仁に就て此問あり、孔子の答、亦通常他人に對すると同からず、讀者最も宜く反覆玩味して、深意の存する所を體認すべし、

（解義）顏淵　顏は姓、名は回、字は淵、魯の人、孔子の弟子、　克己復禮　左氏の昭公十二年傳に據るに、楚の右尹子革が靈王を諷諫せし時、孔子の言として、古也有志克己復禮仁也の文あり、本文の語、亦孔子古言を擧げて答ふるなり、隋の劉炫左傳を解して、克訓勝也、己謂身也有嗜欲當以禮義齊之、嗜欲與禮義交戰使禮義勝嗜欲身爲歸復於禮如是乃爲仁也、復反也と云へり、朱子之に基きて、本文を克勝也己謂身之私欲也、復反也と解し、又、禮者天理之節文也と註せり、節文とは、其制限等級の立て、秩序正しきを節と云ひ物事の法則ありて燦然たる美觀あるを文と云ふ、即ち禮とは天理の恰當程良き處なり、故に禮は理也と訓し、（禮記仲尼燕居篇管子心術篇）理之不可易者也と云へり、（禮記樂記篇又禮は履也と訓し、（禮記祭儀篇白虎通禮樂篇）履道成文者也と云へり、（白虎通情性篇）西漢の賈誼は禮と法との別を論して、凡人之智能見已然不能見將然夫禮者禁於將然之前而法者禁於已然之後と云へり、此等の諸說を綜觀すれば、禮は近時の謂ゆる道德律なる者に近くして、更に文章美觀の加味せる者と知るべし、東漢の馬融は克己を解して、約身と云へり、約は約束の義にて、約身は修身と云ふが如し、此亦一說なれども、克を勝也と訓するを常義とす、揚子法言にも勝己之私之謂克とあり、古人克己復禮を論じて曰く、氣質の己は、變化を以て之に克つ、嗜慾の己は、省察を以て之に克つべし、無體の禮は、戒懼を以て復す、有體の禮は恭敬を以て復すべしと、　一日克己復禮　一日は一日の間にとて、極めて其の効の見ること迅速なるを云ふなり、馬融曰く、一日猶見歸況終身乎と、天下歸仁焉歸は朱註に猶與也とあり、許して承知する意なり、一說に歸は稱なり、褒め唱ふること、天下は上の一日と對して、又其效の至大なるを云ふ、一日克己復禮して、天下歸仁焉を見れば、衆人の共に推許するに就て、人の咸な同く然るを驗して、眞理の同きを知るべし、天性の公好す

る所に就て、己れの先つ得る所を聡し、人心の亦同く一なるを知なるを知るべし、爲仁由己云々　朱子は爲仁由己而非他人所能預又見其機之在我而無難也と釋せり、即ち仁を行ふことは、己の自主自由にありて、他人の干預すべきにあらず、故に論語述而篇にも仁遠乎哉吾欲仁斯仁至矣の語あり、蓋し既に仁は我の自主自由に存すとすれば、纔に己の一念動けば、直ちに身に實行すべくして、他を顧望し、人を依頼すべきにあらず、此の二句夫子が顏子に向ひて、其の性分の力を、十分に毅くして勵まんことを望まれしなり、古人が孟子の浩然の氣を養ふ工夫も、亦能く此間の消息を解せしより得來ると云へるは、亦一理あり、

（通釋）夫子の根本義なる仁は、果して如何にせば、會得すべきかは、當時從遊の諸子が、種々に肝膽を碎きて、各方面より質問を試みしことあり、（委細は論語の全書を看よ）或る日顏子は、此の仁を質問に及びたり、夫子之に告けて云れけるは、古語に克己復禮爲仁とあり、乃ち人は初め純善なる天理を、己れが持ち分として、斯の世に生れ來れども、已に各自形體の分れて我となり人となる以上は、自然に外物に對して自我なる觀念ありて、我に厚くして物に薄くせんとする利慾を生ず、此れ即ち前に云へる己なり、此の己と云ふ大敵に、吾が力量一杯骨折て打ち克ち、もとの天理の程良禮と云へる法則に立ち復れば、乃ち仁と爲るなり、寔に古人の言の如し、能く一日の間、此の克己復禮をなせば、其の效驗の著しく偉大なることは、天下の廣きも、億兆の衆きも、皆其の仁たることを許し、誰れ一人とし、反對の批點を打つ者なし、

顏淵曰、請問其目、子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動、顏淵曰、回雖不敏、請事斯語、

（解義）其目　目は條目、即ち條件なり、顏淵克己復禮爲仁を孔子より聞き、其の果して如何なるかを問はすして、直ちに之が條目を聞きしは、彼れが平生學問の功を以て已に之れを解決するに足ればなり、非禮勿視　勿は禁止の辭、視は自から目を常に注きてみること　非禮勿聽　聽は自から氣を留めてきくこと、視聽と見聞とは同からず、聲や色が近くに響き見ゆるによりて、耳にてきくを聞と云ひ目にみるを見と云ふ、我が心より進んで是非にきかんとして耳を傾けてきくを聽と云ひ是非にみんとて、目を注ひてみるを視と云ふ、故に勿視は一切目を掩ふて見るべからざるにあらず、但非

禮の色が、目の前を過ぐるも、宜く其の過ぐるに任すべし、我より進んで視るべからざるを云ふ、勿聽は、一切耳を塞ぎて聞くべからざるにあらず、但非禮の聲、耳邊を過ぐるも、宜く其の過ぐるに任すべし、我より進んで聽くべからざるを云ふ、非禮勿言　言は說文に直言を(自分より話しする)曰言論難曰語とあり、又周禮大司樂の注に、發端曰言答述曰語とあり、故に莊公十四年の左傳にも、楚子(楚の君子霄)滅息以息嬀(息君の夫人)歸、生堵敖及成王焉、未言の文あり、息の夫人が楚君の二子を生みしに拘らず、口を噤んで聲を出さざるにあらず、先方より問はるれば答をなすも、此の方よりは切り出だしては云はざるなり、本文の非禮勿言の言も此れと亦同じ、味根錄に云、言兼理欲利害說、躁妄則有禁在理欲、上講、樞機則有警在利害、上講　非禮勿動　動は活動の動にて、行爲を云ふ、禮は前に述べし如く、理也履也にして、もと天理が事物の上に著はれて則るべき象迹ある者を云ふ而して非禮は均しく象迹あれども、則るべからざる者を云ふ、禮記の樂記篇に、君子姦聲亂色、不留聰明、淫樂慝禮、不接心術、惰慢邪辟之氣、不設於身體とあるは、亦本章の義と、互に相發明すべし、

(通釋)　孔子克己復禮を以て仁を說かれしも、禮の範圍內容は千態萬狀にして、窮詰すべからず、顏淵乃ち直ちに其の條件を指示せられんことを請ひ問へり、孔子困りて云はるるに、人の私欲と天理とは本と兩立せず、私欲勝つ時は、物事を處するに方りて、多く天理の發現して法則たる禮に合はず、故に必らず私欲を未だ發せざる初めに於て制し、將に動かんとする始に於て謹むべし、乃ち視るに必らず禮を以てし、禮にあらざれば聽くことなかれ、言ふに必らず禮を以てし、禮にあらざれば言ふことなかれ、動くに必らず禮を以てし、禮にあらざれば動くことなかれ、要するに非禮なる視聽言動は、皆私欲にして、謂ゆる己なり、之を視る勿れ聽く勿れ言ふ勿れ動く勿れと自制禁止するは、私欲を防ぎて、克己なり、己れに克ち禮に復することを得ば、仁は自然に是に在らずや、此れ謂ゆる克己復禮爲仁なりと、顏淵一たび斯の言を聞きて、求仁の功實に據るべきあるを自覺するや、乃ち直ちに奮然として仁を以て自から任して曰く、回不敏なりと雖も、夫子の敎は、確として循ふべし、請ふ今より專ら斯の視聽言動の間に、非禮を戒めて爲せざるを、我が事業として、自から克ち、自から復し、誓ふて夫

子の高敎を曠くすることなけん、

餘論

孔子の顏淵に爲仁の道を敎ふるや克己復禮を說き非禮の四勿(非禮勿視云々)を述ふるを以て、今世論者或は、儒敎の徒に消極主義に安んじて、復、進取の氣に乏きは、其の弊の淵源、此の深刻なる禁止的戒律に存すとなし、甚きは孔子の敎義が果して今日進歩的道德と、一致をなすか否やを疑ふ者あり然れども此亦論者が未だ深く思はざる過ちたるを免れず、夫れ仁の道たるや、孔子は既に前章に於て、子貢に敎へて己欲立立人己欲達達人と云はれし如く、其の體段色相の如何に、公愛的にして私利的ならざるかを知るに足れり又其の行動の如何に活潑的にして進取を主とするを窺ふべし但其の仁を爲すに、中心より發作して成すと、外面を掩飾するに止まるとの異あり、前者は眞實にして恒久的なり、後者は虛僞にして、一時的なり、前者の行は、眞君子に屬し、後者は僞君子に屬す、孔子が嘗て惡紫之奪朱惡鄭聲(美にして邪なる音樂)之奪雅樂(純正なる音樂)と云はれし如く、凡そ世を惑はし民を害するは、似而非なる者より甚きはなし、故に眞者をして能く行はるゝを得せしめんと欲すれば、先づ僞者を撲滅せざるべからず、眞僞は兩立せず、正邪は竝行せず、且つ人の仁をなすも、不仁をなすも、皆、耳目口體の力を假らざるべからず、耳の聽や、目の視や、口の言や、體の動や、其爲すと爲さざると共に、又皆己の自由に在りて、他人の妄に干涉を得るものにあらず、而して其の仁に嚮て進行する徑路は、實に非禮を戒めて、有禮に就くにあり、是れ孔子が爲仁由己を云ひ、又非禮四勿の誡を述べし所以なり、劉寶楠は曰く、蓋視聽言動、古人皆有禮以制之若曲禮少儀內則(共に禮記にあり)諸篇及賈子容經(漢の賈氏が述べし禮書)所載皆是其禮惟克己復禮之事所接於吾者、自能有以制吾之目而勿視制吾之耳而勿聽制吾之口而勿言制吾之心而勿行所謂、克己復禮如此、春秋繁露(漢の董仲舒の著)天道施篇に夫禮體情而防亂者民之情不能制其欲使之度禮、目視正色口食正味身行正道非奪之情所以安其情也(中略)然則視聽言動古人皆致慎之所以勉成德行而不使不仁者加乎其身也と、蓋し視聽言動は、人身機關の靈動なれば、固より人として無かるべからず、唯、非禮なる視聽言動を、禁止すべきのみ、故に視聽言動を、一概に屏除せんとするは、此れ老佛の空寂にして、守ることあるも無用の心のみ、若し視聽言動の紛錯に任して、節制することなければ、俗學の淺薄にして、小を以て大を害する者なり、共に聖人大中至正の學にあらずと、先儒は云へり、以上の所說を綜合觀覽すれば、孔子の克己復禮を以て爲仁を說き、又非禮の四勿を以て、

克己復禮の條件となせるは、其の言徒に深刻なる禁止的戒律のみを施して消極主義を宗旨となすにあらず、孔子が克己復禮を說き、非禮の四勿を述ふるは、乃ち眞實なる中心より發作せる恒久的公愛を擴張して、彼虛僞なる外面を掩飾せるに止まる一時的私利を黜除するにあることは、蓋し自から思ひ半に過ぐる者あらん、近世の志士仁人と稱する徒、或は社會風俗の改良を論し、或は公德の尊重すべきを說くも、皆眞實中心より發作せる公愛を云はずして、徒に外面を掩飾して一時の虛美を衒はんとする者多し、是れ孔子の敎、世に容れられざる所以なるなからんや、

長沮桀溺、耦而耕、孔子過之、使子路問津焉

（總旨）此の章下論微子の篇にあり、孔子の道を以て天下を濟ふ本心を見す、一箇の易字、前には桀溺の口より出で、而誰以易之と云ひ、後には孔子の辭によりて、丘不與易也と云ふ、前後呼應の妙を見るべし、長沮の言は專ら孔子を譏る、桀溺は兼ねて子路を譏る、長沮の言や微にして、桀溺の言や顯なり、末節孔子の言は專ら桀溺の辭に就て反駁せしに似たれども、亦兼ねて長沮を反駁せられしなり、

（解義）長沮桀溺　二人共に隱者にして、其の姓名詳かならず、元の金履祥は、沮溺の

二字、皆水に從へるより推して、子路津に問へる時、其の物色により、假に名けし者にて、論語中に荷蕢晨門荷篠丈人の類の如し、蓋し此の田に耦耕せる二人其一人は身體長くして沮洳の地に居り、一人は桀然高大にし塗足せしより名となすと云へり、未だ是非を知らず、涵參に耕者自耕過者自過本是兩不相涉乃以問津開出許多問答使聖人不覺自吐胸懷、想見這二人直是別具心眼とあり　耦而耕　耦は並耕也と朱註にあり兩人相並びて耕作すること、周禮考工記に、匠人耜廣五寸、二耜爲耦一耦之伐（發と同じ）廣尺深尺謂之甽とあり、註に古耕者耜一金、兩人並發之とありて兩人各一耜を使用し耕作するを耦と云へり、耦耕の二字、二人の同心親和して優游自適の狀を想見すべし、子路姓は仲名は由卞の人、孔子の弟子、孔子より少きこと九歲、　問津　津は川の渡し場なり、朱註に據るに、時に孔子楚より蔡に反る途中なり、

（通釋）孔子楚國に赴き用ゐられずして蔡に反る途中にて、或る川を濟らんとせしに、渡し場を知らずして困却せり、時に長沮桀溺と云へる二人の男ありて、さも親密なる情態にて、一耜を執りて耦耕せるを見て、孔子も是れならばと思ひて、其の地に至りて、弟子の子路をして、彼れに就きて、川の渡し場は、何れに

在るかと問はしめり、

長沮曰、夫執輿者爲誰、子路曰、爲孔丘、曰、是魯孔丘與、曰、是也、曰、是知津矣、

（解義）夫執輿者爲誰　夫は彼と同義、輿は車なり、執輿は馬の轡を執りて、車上に在るを云ふ、あのたづなを執りて車上に居る男は、全體何に者ぞと問へるなり、爲孔丘　丘は、孔子の名、もと子路が御者となり轡を執りしも、今津を問はんが爲めに、車より下りてあらざれば、孔子代りて轡を執れるなり、曰是知津矣　是とは、上の子路の是也と答へしを、直ちに承けて云へるなり、「アヽ、それか、その男ならば、吾が教ふるまでもない、有名なる天下の流浪人なれば山川の地理には精しく、もとより津を知れる筈である」と、極めて冷淡なる語中に、極めて熱罵の意を含蓄して云へるなり、勸學錄に問津而告以津不過途人、相視已耳不告之意深于告沮溺固大有心人也勿淺看此兩人とあり

（通釋）子路二人の近くに至りて、渡し場を問ひしに、長沮は孔子の狀を望み見て、先づ子路に問へるには、とにかくも、一體彼の車上にありて轡を執れるものは、何れ名ある立派なる人ならんか果して誰と云へる人なるかと、子路答へて云へるには、彼れは魯國の孔丘と云へる我が先生たる方なりと、又長沮が云へるには、吾嘗て魯國に孔丘と云へる人ありて、生國の魯にも用ゐられず、天下を周く流れ渡りて、安せざる者なりと聞き及びしに、アヽ、今彼れに居る人が魯の孔丘なるかと、子路曰く、如何にも是れ魯の孔丘と云へる名高き大君子なり、請ふ君よ速かに爲に津を教られよと、是に於て長沮冷語一番孔子を罵倒して云へるには、アヽ、是の男ならば有名なる流れ渡り者にて天下の中、苟も國と云へる國は、皆周流して、殆ど上らざる山なく渉らざる水なければ、此の附近の川位は、疾に熟知あるべき筈なり、子よ津を吾に問はんよりは、寧ろ還りて子が主人の孔丘に問ふべきなりと、遂に津の在る處を告げず、

問於桀溺、桀溺曰、子爲誰、曰、爲仲由、曰、是魯孔丘之徒與、對曰、然、曰、滔滔者天下皆是也、而誰以易之、且而與其從辟人之士也、豈若從辟世之士哉、耰而不輟、

（解義）子爲誰　桀溺は耦耕の故を以て長沮と子路との問答を聞けり、故に孔子の誰たるを問はずして、子路の誰たるを問へり、滔滔者天下皆是也　滔滔は朱註に流而不反之意とあり水の日々流れ逝て復た反らざることにて、彼れ

が津を問へるに因りて、眼前の流水に就て、世道人心の日々に廢れ行く狀を指點して云へるなり、天下皆是とは、天下到る處、何れも皆、是の滔々たる水と同じと云へるなり、一說に後漢書の朱穆傳に、悠悠者皆是其可稱乎とあり、又文選の養生論にある李善の注に、論語の此文を引て、悠悠に作れるを證として、本文の滔々を悠々に改むべしと云へり、而誰以易之　誰の字は、當時列國の君臣を兼ね指して云ふ、天下皆亂るれば、要するに誰れを相手にして、之を變易して治世となすを得るか、得ざるなり、以の字は、天下を把りて自在に引き廻す意あり、即ち比較的に多くの人が亂るゝ位なれば、兎も角もあれ、今は滔々たる天下が亂れて、物事の正理に違ふも反て皆が之が尤なる義と心得居りて、一人として其の非を覺るとなき時代に、果して誰れを相手にして改革を爲すかと云へるなり、以上二句孔子が救世の難きを譏る、且而與其從辟人之士　而は汝なり、子路を指す、辟人之士は、孔子を謂ふ、孔子當時魯を去り衞を去り楚を去り陳を去り蔡を去れるを以て、人を辟る士と云ふ、即ち人嫌いして去る意なり、辟世之士　桀溺自から謂ふ、即ち世捨人なり、辟人と云へば、辟くるに窄し、乃ち辟くるともあり、辟けざるともあり先方の人に因りて差異あれは、未練箇間、敷振舞なり、辟世と云へば辟くること廣し、一人も辟けざるなく、乃ち思ひ切りて世を捨るなり以上の二句、子路が所從を誤れるを譏る、　耰而不輟　耰は「オホフ」と譯す、穀類の種子に土を覆ふこと、耰は說文に摩田器とあり、土塊を摩り平にする椎の類なるより、轉じて使用して田を摩するも亦耰と名く、江永が羣經補義に、北方農人播種之後、以土覆是摩而平之使種入土鳥不能啄也とあり、輟は止なり、記者復記耰而不輟一句最有味見得迷津問津何等忙迫耕耕情景何等優游

（通釋）長沮の答、要領を得ざれば、子路は更に轉じて桀溺に問へり、桀溺先づ子路の身を問ふて云へるは、彼の輿を執る者が、孔丘たることは、只今の談話により、承知したるが、一體君は誰れであるかと、子路答へて云へるやう、僕は仲由と申す者なりと、桀溺云ふやうに、さらば彼の孔丘の弟子即ち仲間の者なるか、子路云へるには然り、孔子の弟子なり、是に於て長沮又云へるには、扨も君の先生とする孔丘は、目先の利ぬにも程があるぞ、今の天下は、實に君が問へる渡し場のある川水の滔々として逝きて反らざると同く、亂れ極まりて居ることにて、何れの國も皆是の有樣なり、而るに君の先生は、果して誰れを相手

にして、此の天下を、思ふやうに變易改革せんとするか、到底爲すこと能はざるなり、それに全體君も亦分らぬ人なり、同じく從ひ遊ぶ以上は、彼の孔丘の僅に人を辟くるが如き、世に未練なる男に從はんよりは、豈に潔く斷然と思切て世を辟くるの士に若かんや、君の從ふべき士は、それ目前に居らざるかと、言ひ畢はりて播きし種子に其摩り柔かにせし土を、覆ひ被せて止まず、亦遂に津の在る處を告げざりき、

子路行以告夫子憮然曰鳥獸不可與同羣吾非斯人之徒與而誰與天下有道丘不與易也

（解義）憮然曰　失意の貌一說に憮は撫と通ず、安なり定なり安定は動かさるなり、人大失望の時は、貌寂然として動かず、宛も遺失物ありし當時の如し、夫子沮溺の言を子路より聞き、失望の餘、寂然として動かず、久ふして始めて口を開きしなり、鳥獸不可與同羣　羣は「ムラガル」と譯す、聚り居ることにて社會を云ふ、鳥獸は常に山林に居て社會をなせり、人は人と共に社會をなすべき者にして、鳥獸の社會に入るべからず、乃ち彼の謂ゆる世を辟くるとは、人道を沒却するものなれば、到底爲すべからざるを云ふ、吾非斯人云云　斯人

とは、眼前にある人と云へる意味にて、國の君民を通じて云ふ、吾は斯の人達を相手にして事をなさず、而も何人を相手とすべきか、即ち斯の人の外には、相手とすべき者なきなり、吾と云ひ斯人と云ふ、極めて彼我の關繫たるや、密接にして離るべからざる狀を見はせり、天下有道云云　天下が道ありて治り平かなれば、吾は何を苦みてか、此の周流苦勞を厭はず、今の世を變易改革することを圖らんや、獨り亂世なる故に、已むを得ざればなり、上の鳥獸云云の句は上文に桀溺が豈若從辟世之士哉と云へるに反して、其の從ふべからざるを言ふ、此の天下有道の二句は、桀溺が滔々者天下皆是云云と云へるに反し、亂を易て治となすの已むべからざるを言ふ、此れ又孔子が當日極力勇進して世道を擔當する期待を見るべし

（通釋）子路は其場處を去り孔子の前に至り長沮桀溺二人の言を以て告せしに孔子聞き了り憮然として、しばらくは靜かなりしが、やがて嘆息して云はれけるに、彼の人達は辟人不如辟世と云ふて、頻に世間を退隱することを勸告されども、人を辟け世を辟くるとは是れ人と與に往來交際を絕ちて山林に逃れ隱れ、鳥獸と與に羣を同くして遊ばんより外なきなり、去れども鳥獸はも

と人類にあらざれば、吾は與に羣を同ふすべからず左すれば吾が羣を同くするは斯の現在目前にある人を除きて、他にあらず即ち上は國君にあらざれば誰と與に朝廷に立ちて政をなさん下は國民にあらざれば誰と與に草野に居て、國に竭さん此れたとひ世を辟けんと欲するも我が仁愛の心よりして實に爲すに忍びざるなり彼れは吾が所行を譏りて滔々天下皆是而誰以易之と云へども、實は如何にも彼が云へるが如く、滔々皆是にして天下道なければこそ、吾出で變易して治平になさんと欲するなれ若し彼の願ふが如く天下道ありて治平ならば其の上に吾は又何を苦みて此の如く汲々として天下を周流し一身を苦勞して之が變易の事を圖らんや吾は實に彼の吾が本志を知らざるを遺憾となすなり

餘論

孔子の時、辟世隱居の士亦乏からず、姑く論語の所載によるも、長沮桀溺の外、四體不勤、五穀不分、孰爲夫子と譏れる荷蓧丈人あり、鳳兮鳳兮何德之衰往者不可諫來者猶可追而已(以上二件微子篇)と歌へる楚狂接輿あり、丘(孔子の名)何爲是栖栖者與、無乃爲佞乎(憲問篇)と嘲れる微生畝あり、是知其不可而爲之者與(微子)と毀れる晨門者あり、其の擊磬の聲を聞き、鄙哉硜硜乎莫己知斯已而已矣、深則厲淺則揭(以上二件憲問篇)と云へる荷蓧者あり、其の言各、殊なれども、其の旨皆孔子の亂世に居り、退て自から潔くするをなさずして、敢て天下を周流し、斯道を當世に行はんと期待するを譏刺するは、全く長沮桀溺本文の意と同きなり、而して孔子が斯輩に答ふるを觀るに、其の微生畝に於けるや、非敢爲佞也疾夫固也と云ひ、荷蓧者に於けるや、果哉未之難矣と云はれしを觀れば、亦豈に其の鳥獸不可與同羣云々を以て、長沮桀溺を論せられし意と相異ならんや、荷篠者晨門者は、子路に告げて、孔子に及ばず、楚狂接輿は孔子歌を聞て與に語らんと欲すれども、彼は趨り辟けて與に言ふことを得ず、されども子路が荷篠丈人を論じて、不仕無義、長幼之序不可廢也君臣之義、如之何其廢之欲潔其身而亂大倫、君子之仕也行其義也道之不行已知之矣と云へるを觀れば、孔子の意亦推して知るべきのみ、論語又孔子が古の逸民を論せしを記して曰く、不降其志不辱其身、伯夷叔齊與謂柳下惠少連降志辱身矣言中倫行中慮其斯而已矣謂虞仲夷逸隱居放言身中清廢中權矣と而して又自から其の行を語りて曰く我則異於此、無可無不可と(共に下論微子篇)朱子は孟子の孔子可以仕則仕可以止則止可以久則久可以速則速と云へるを引て、所謂無可無不可也と云へり)、此等の言に據りて見れ

ば、孔子の主旨、寔に救世濟度にありて、而も其進退久遠、皆我が自主自由なる仁道によりて決定し、亦敢て自から其の本心を枉げて、世利に殉ふ徒とは唯雲壤の隔あるのみならざるを知るべし、漢の鄭玄仁を解して相人偶と云へり、偶はもと雙對の謂なれば、人と人と相偶して離れざる義にして、即ち孔子の斥けて羣すべからざると爲せる鳥獸と與に居るにあらずして、人は人と羣居するを以て仁と解釋せるなり、故に又仁の文字たるや、二人を合して一字となせりとの說もあり、荀子人羣の道を述べて曰く、萬物同宇而異體、無宜而有用、于人數也、人倫並處同求而異道、同欲而異知性也と、是れ萬物同く宇內に生るも、形體の異あり、必らずしも人の定めたる都合通りにならざるも、亦皆それぞれに其の役に立つことあるは、自然の道にして、又人類が羣居並處して、希望嗜好の心は同くあれども、人物によりて、其の手段方法を殊にし、知識の淺深高下あるは、人類の天性なるを云へり、又曰く人之生不能無羣、羣而無分則爭、爭則亂、亂則窮矣、故無分者、人之大害也、有分者、天下之大利也、而人君者所以管分之樞要也、故美之者是美天下之本也、安之者是安天下之本也、貴之者是貴天下之本也と、是れ天下の人羣を善く理めて窮亂に及ばざらしむるは、秩序を正くするにありて、人君は其の秩序を管理する樞要なれば、人羣の道を講ずる者は尤も經世の意を君國に致さゞるへからざるを云へり、此に由て之を觀るも、孔子が大本領たる仁を人道として天下に實行せんと欲すれば、國家と相離るべからざるや、蓋亦已に彰明較著ならん、淸の劉阮が四書恒解に、常人縱情肆志、圖一己之安榮、至於妨害人羣而不顧、是以積之至深、私欲橫塞、雖至親有如路人者矣、況欲一世同仁也哉、故學聖人者、以充其義理之心、養其浩然之氣、爲要耳と云へるは、亦善く本章を解するものと謂ふべし

子夏之門人問交於子張、子張曰、子夏云何、對曰、子夏曰、可者與之、其不可者拒之

（總旨）本章は下論子張篇にあり、子夏子張兩賢の論を並ひ擧け以て交道の寬嚴相濟へきを見す、蓋子夏の嚴以て子張の失を救ふへく、子張の寬以て子夏の弊を矯むへし、然れとも二子の說亦皆孔子より出つ論語學而篇に、毋友不如己者と云ひ、季氏篇に益者三友、損者三友、友直友諒友多聞、益矣、友便辟、行儀習れても正直ならす、友善柔、媚ひへつらひて誠實ならす、友便佞、口先き利巧振りて實力なし、損矣と云へるは、子夏の可者與之不可者拒之と同義なり、學而篇に汎愛衆而親仁と云へるは子張の尊賢而容衆、嘉善而矜不能と同義なり、但

子夏の僻、褊狹にして、嚴酷に失し易し故に孔子告くるに取友を以てす、其人を拒く能はざるを恐るにあらすして其の可者も亦之を拒かんことを恐るゝなり子張の弊過高を好み大度を粧ふにあり故に孔子告くるに愼交を以てす其の衆を容れ不能を矜むこと能はざるを恐るゝにあらすして其の賢者善者に對して亦祗汎交に流るゝを恐るゝなり讀者先つ此の意を領取し而して後本文を覽觀し以て自から其身に反省して平生の僻弊を矯正して可なり

（解義）子夏孔子の弟子已に上文に見ゆ子張姓は顓孫名は師子張は字なり亦孔子の弟子孔子より少なきこと四十歳、陳の人、問交於子張　既に子夏に問ひ又子張に問ふは、彼此相質證する意より出つ必らしも其の師子夏の說を不十分なりとして問ふにはあらす交とは朋友相交る道なり、子夏云何　汝か師子夏の云ふことは如何と問へるなり朋友相呼ふには字を以てするは禮なり、對曰子夏曰　子夏の門人子張の問に對へて子夏が交際の道を論する言を述ふるなり子夏と字を呼へるは人に對して我が師を稱するに名を云はすして字を以てするは此亦禮なり故に論語に又子貢が孔子を叔孫武叔に對し稱して仲尼と云へる文あり蓋し名字の別は、支那にては古より甚嚴にして諸書に見ゆれは、今序に其の義を略說せん字はもと孳なり「マス」と譯して增加の義なり、既に本名ある上に又一名を增加するより字と云ふ儀禮に子生三月父名二十而冠字とあり、子が生れて三月目に父か其の名を定め、二十歳に至れは、加冠の禮を行ひ、賓を筮して賓より其子に字を命す、其の義多く名に緣故ある文字若くは美稱を取りて人より相呼ふ時の敬稱となせり故に子孫より父祖を稱するにも、時に字を用ゆることあり、聖孫子思が中庸に於て孔子を仲尼と稱するを觀て知るべし、孟荀の書中亦孔子を仲尼と稱する者あり、可者與之　交る可き者を擇ひて與に交るを云ふ　不可者拒之　交る可からさる者を察して拒絕するを云ふ

（通釋）子夏の門人ありて其師と同く孔子に學ひし當時の儒者子張に就て、人と交際の道は如何にせは可なるかと問へり子張は亦問ふて云へるには先つ汝か師たる子夏が云ふ所の交道は如何と子夏の門人對へて云へるには私か師子夏は交際は愼み擇て爲すへきなり即ち交りて可なる者は吾之と與に交り交りて不可なる者は吾之を拒きて棄絕すへし漫然として區別を立て

すして交ること勿れと云はれたりと

子張曰異乎吾所聞君子尊賢而容衆嘉善而矜不能我之大賢與於人何所不容我之不賢與人將拒我如之何其拒人也

（解釋）異乎吾所聞　子夏の云へる說は自分が兼て我が師孔子より聞きしことに異なれり此の句先つ一語を提撕し一面は子夏の說の謬れるを駁し、一面は君子尊賢の二句を領起す、此れ吾か所聞を槩述すとて其の己か臆說にあらす、孔子の敎なることを體貼して云へり、尊賢而容衆　賢德ある人は固り尊敬して尋常の人も亦汎く受け容れて交るを云ふ、嘉善而矜不能　善き人を褒め揚けて、働き乏き人を憫然に思ふを云ふ、上句の賢は成德の稱にて、德の具はる者を云ひ衆は賢に對して只是平常なる人を云ふ、此句の善は只一事一藝の人より長して用ゆへき者を云ひ、不能は善に對して短處ある者を云ふ、上句の尊は敬禮を加へ隆にすること、此句の嘉は、特に之を稱許するのみ、容は泛く包涵すること、矜は憐恤の意味あり、上句の者、此句の者と人格同からす、故に待遇も亦隨ふて自然の異なるなり、尊賢云々四件平說すれとも、子張の意は子夏が不可者拒之の言を駁するにあり、乃ち尊賢嘉善の邊は

輕くして、容衆矜不能の邊は重しと知るへし、我之大賢云々　與は歟と同し「だらう」の義にて疑詞なり、我は交る人自身を云ふ若し自身が他人よりは非常に賢れて居るだらうか、他人がたとひ不賢なるとも宜く我か賢德を以て感化すへし何そ包容して不可なるとかあらん、我之不賢云々　若し又我が他人より不賢なりとせんか、我より他人をば拒きて遠さくるを待たず即ち他人よりして我を鄙みて拒き絕て交はらさらんとす然るに之を如何ぞ我より人を拒き遠さけんや其の必要はなきなり我之大賢の二句は、正に己か必しも人を拒かさるを明にす我之不賢の二句は又是己の人を拒く能はさるを言ふ人將拒我の句、輕筆遞過して如之何其拒人也の句を跌起し來る

（通釋）子張は子夏が說なりとて、門人が語りしを聽き畢はりて云へるには、汝ちが師は左樣云へるかは知らざれとも、それは自分が往年我か孔夫子より承けたまはりし言とは異れり、吾が承けたまはりし夫子の御說は、君子たる者は、成德の賢者を尊敬して、一方には能く平常の人物をも見棄てなく、汎く受け容れ、又一技一藝にても善く達する者は、勿論褒め顯はして、一方には能く働

乏き人をも、憫然に思ふて目を掛け遣はすが其の人に交はる道なりとあり、洵に此の御說の如きであり、若し我れ自身が大賢なるか、他人に對して何そ受け容れさることあらん、宜く彼れが賢不賢を論せず、汎く受け容れて、賢なる者は益〻親み、不賢なる者は我が德を以て感化して善に誘くべし若し我れ自身が不幸にして不賢なるか、我より他人を拒き絕たざるも、他人よりして、我を侮り鄙みて拒き絕たんとす、左すれは之を如何にして、我より他人を拒き絕つへきか、拒き絕つる必要は固より無き筈なり、要するに子夏の可者與之と云へるは愼交的道理にして、間然することなけれども、不可者拒之と云へる一言は、余は取らさるなりと、

子游曰子夏之門人小子當洒掃應對進退則可矣抑末也本之則無如之何

（總旨）此の章、亦子張の篇にあり、人を敎ふるは順序ありて、妄に等を躐ゑ冒進すべからざるを見す、子夏の言を以て主となし、子游を以て客となす、子游學の本末偏廢すべからざるを云ひ、子夏は敎を施すに先後ありて混亂あるべからざるを云ふ、通章本末先後の字、是れ眼目たり、這四字を識り得て、方に子夏子游の意を會得すべし

（解義）子游　孔子の弟子已に前に見ゆ　小子年少くして未だ成人の中に入らざる者　小子の二字、舊讀上の門人に連ねて一句とすは非なり、宜く門人にて句となすべし、其門人中に幼者小子ありこれは當洒掃應對進退則可矣と云ひ、言外に子夏か敎授は、長幼を分たず、悉く此を以て務となすを見すなりと、經讀考異に見ゆ、當洒掃應對云云　當は其の事を勤むるを云ふ洒灑と同じ、水をそゝぐなり正義に盧文弨考證を引て凡糞除以水潑地使塵不揚而後掃之故洒先於掃と云へり、乃ち洒掃とは、水をそゝぎて塵を掃ふことにて堂室內の掃除を云ふ、應對はもと應は只人に向ふて唯諾するのみにて、對は答辭を述ふるを云ふことなれども、此にては汎く人に應接するを云ふ、進退は進み退くときの行儀作法なり子夏平生の敎、着實を主とし禮儀を重んずれば、其の門人、小子皆威儀容節の間に當りて相應なる宜きに叶へるを云ふ　抑末也云云　抑は意と古は互に通用す「オモウニ」と譯す又、扨はの意なり乃ち子游が考へには扨てと云ふ意味なり子游は平生禮樂に習へる人、論語に其の武城（魯國の邑）の宰となりて、民を治めし時、孔子過て絃歌の聲を聞き莞爾而

笑曰割鷄焉用牛刀子游曰昔者偃聞諸夫子曰君子學道則愛人小人學道則易使孔子曰二三子偃之言是也前言戲之耳とあるを見るも、亦其の人平日の思想を見るべし、故に子夏の教法即ち洒掃應對進退の節を以て禮儀の末となせり、本之則無如之何更に深く其の本を推原すれば、全く未だ有らず、人を教ふる者如何して此の如く末節に拘泥す可けんや朱子は解して於威儀容節之間則可矣然此小學之末耳推其本如大學正心誠意之事則無有とせり、即ち小學は子弟の父兄に事ふる教を學習する所にして、洒掃應對進退の禮節、亦其の中にあり、大學の教旨は、心を正ふし意を誠にする道を講究し、修身齊家の基礎を爲すにあり、是れ大學は根本にてし小學は末なるを以て、朱子は取りて此の解釋をなせり

（通釋）子夏の學問もと篤實を尊ぶ、故に人を教ふるや、秩序的に循ひ卑きより高に上る工夫を取れり、同門の友子游其の意を知らず、譏りて云へるには人を教ふるには必らず本末兼ね進みて然る後大成すべし、然るに今や吾子夏が門人を觀るに彼の小子、日用の禮儀作法に習れて、洒掃應對進退の節度が閑雅雍容なるは流石觀るべき者あり去れども此の如きは、但先王の定められたる曲禮童子の小學に於て修むべき者にして、抑、末節なり更に向上して其の根原たる正心、誠意の如き大學問を問へは、何等の研究もなく蘊蓄もなし、之を如何して可ならんや、甚不可と云へきなり此れ彼の門人知らざるのみならず、實は師たる子夏が平生教授せざるを以てなりと

子夏曰噫言游過矣君子之道焉可誣也有始有卒者其惟聖人乎

（解釋）噫言游過矣　噫は歎息の辭、言游は子游の姓名、過とは其本末兼ね進むの論の過まれるを云ふ　君子之道　君子が人を教ふる道と、君子の大道即ち子游が謂ゆる本之の本にて禮樂の大道を指すとの二說あり、今前說を取らん孰先傳焉云云學問もと一理にして、只高下淺深の別は、人によりあるのみ、故に先後を以て云ふべきも、本末を以て分つべからず、故に子夏始卒の二字を以て、子游が本末の字に換ふるなり、孰は「イヅレカ」と譯す二以上の事物を選擇して其の一に定むる辭、傳は傳へ授くること、倦は後廻にして急にせざると朱子解して論語にある誨人不倦の倦と同じとなせり、物をなすに億切―なる意、毛奇齡は倦は即ち古券字、傳與券皆古印契傳信之物、一如敎者之與學

者兩相印契故借其名曰傳曰契と云へり、此の說によれば、傳とし同く、敎授する義とす、亦一說に備ふべし、譬諸草木云云　譬は譬喩なり、諸は之於の二字を約して、一字となせるなり、故に初めには先づ「コレ」と讀みて、又下の文字より反りて「ニ」と讀むべし、漢字には此例往々あり、何不を約して、盍となし、不可を叵となし、奈何を那となすが如き、皆此例なり、區以別とは、區に因りて分別をなすなり、淸の潘維城が論語古註集箋に、樂記草木茂區萌達鄭注屈生曰區、とあるを證となし、區萌を以て學者の始に喩へ、初學未達の時、即ち別つべきを云ふとなせり、此又一說とすべし、　君子之道云云　誣とは力の足らざるを量らず押し付けてさするを云ふ、學問の大小は皆各、其の理由ありて、順序の分るゝなり、然るに其の順序に由らず、近きを舍て遠きを求め、下きに居りて高きを窺ふ時は、高遠なる者を理會せざるのみならず反りて近小なる者も先づ已に荒昧して成らず、是れ力を量らず押し付けてさする結果なり、故に君子の道は誣ゆるをなさず只其の本量に從ひて、近き者小なる者より敎ふるなり、一說に漢書薛宣傳に本文を引て誣を憮に作り、注に蘇林曰憮同也兼也、晉約曰憮音誣、師古曰論語載子夏之言謂行業不同所守各異、惟聖人爲能、

體備之とあるに據りて、君子の道は、行ふ人によりて、執り守ることも各殊異にして、兼同すべからざるを云ふとなせり、論語古義其の說を取り、淸朝近來の學者亦多く之を用ふ、　有始有卒云云　始は小學敎ふる所の禮儀作法、即ち洒掃應對進退の節の如きを云ふ、終は大學にて習へる己を修め人を治むる道即ち誠意正心修身齊家の如きを云ふ、有とは一齊に都て有るを云ふ、始めより漸次に積て終に至るを云ふにあらず、其惟聖人乎と惟の字は其の事柄が聖人に限りてあるを云ふ、此れ聖人を稱贊するを主とするにあらずして、正に小子の能くする所にあらざるを云ふのみ、朱子子夏の意を解して、非以洒掃應對爲先而傳之非以性命天道爲後而倦焉但道理自有先後之殊不可誣人以其所未至惟聖人然後有始有卒一以貫之無次第之可言耳と云へり、又、但學者所至自有淺深如草木之有大小其類固有別矣若不問其生熟而槩以高且遠者强而語之則是誣之而已と云へり

（通釋）

子夏は子游が己の敎法に對して本末云々の論あるを聞きて、嘆息して云へるには、噫言游の論は過れり、君子が人を敎ふる道、何ぞ故に心ありて孰れか淺き者近き者となして、先づ傳へ授けんや、孰れか高き者遠き者となして、後

に廻して敎ふるを急がすとなさんや、但學ぶ者の造詣の力に各、自から分量に淺深の差あり、之を草木の大小の殊あるに譬ふべし、其の區類判然として別あり、學者の造詣既に同からずとすれば、敎ふる者は、先後の順序を立て、各其材の高下によりて敎を施さゞるを得ず、然るに一槩にして初めより高き者遠き者を以て、淺學未熟の人に敎へて、力量の堪ふること能はざるを思はざるは、是れ誣ゆると云へる仕方にて徒に押し付けて爲さしむる者にして、本人の心底より合點會得して爲すにあらず、君子人を敎ふる道、焉ぞ誣ゆべけんや、若夫學行に於て灑掃應對進退等小學の敎を受くる時に方り、已に正心誠意修己治人の大學の實を行ひ、大と小と竝に擧り、始と卒と俱に有るは、他人の能くする所にあらず、其れ惟智德完備絕大卓偉なる聖人にして、始めて能くすべきか、今や果して言游の言の如くせば、是れ直ちに聖人の遣り方を以て、强ひて衆門人に望む者にして、固より言ふべくも行ふべからざる論たるを免れず、即ち學問を爲すには、卑より高きに升り、近きより遠きに行く次第順序あることを忘るべからざるなり、

餘論

孔子既に歿して、羣弟子各、其の性の近き所と、才の能くする所とを以て、門人に敎授し、韓退之が謂ゆる源遠而末益分者實に　ふべからず、即ち前章本章に揭げし者に就て觀るも、子夏子張の交を論ずるや、子游子夏の學を論ずるや、亦以て其の一斑を推知すべし、後世荀子此の三子を論して曰く、弟佗其冠神禪其辭禹行而舜趨是子張氏之賤儒也と此れ但た彼れか外間の虛儀を務め、聖人の態度を學ぶに止まるを譏れるなり、又曰く、正其衣冠齊其顏色嗛然(嗛は謙と近し抑退の貌)而終日不言是子夏氏之賤儒也と此れ彼れが徒に嚴恪窮屈に過ぎ褊狹に失し恢廓進取の氣象に乏きを譏れるなり、又曰く、偸儒憚事無廉耻而耆飲食必曰君子固不用力是子游氏之賤儒也(以上三件非十二子篇)と、此れ彼れが游惰佚樂に耽り、身に檢束なく、坐食放言して世の實用に立たざるを譏れるなり、唐の楊倞解して曰く、此皆言先儒性有所偏愚者效而慕之故有此弊也と乃ち三子の學行直に此の如きにあらずして、門人流弊の極此に至ると雖も、今や論語に載する言論、即ち前章本章三子の所說に徵すれば、子張の汎交を云へるは、好て過高の言をなして、聲譽を求むる弊あり、即ち荀子の謂ゆる弟佗其冠云々の情なり、子夏の交を擇ぶや、迫狹に失し、其の人を敎ふるや、秩叙的漸進を主とするは、即ち荀子の謂ゆる正其顏色云々の情なり、子游の等を躐え次を踐

まず、直ちに大本に志て、力量の如何を問はず、一槩に聖人を以つて擬せんとするは、即ち荀子の謂ゆる偸懦憚事云云の情なり、且や子張は姑く置き、往者子游の孝を問へるに答へて、孔子は不敬何以別乎と云ひ、子夏の孝を問へるに答へて、色難と云へるは、既に前章に論述するが如く各、其性の僻と、其の所失とに因りて、孔子爲に對症の藥を下たせしり、曾子亦子張を論して、堂堂乎張也難與並爲仁矣と云ひ、子游又、吾友張也爲難能也然而未仁(共に子張篇)と云ふて、其行の徒に過高を好みて誠實慈愛の心乏きを規戒せり、此等の言を綜合して考察すれば、孔門師友が敎訓切磋の深厚なるや、亦如何を追想すべく、而して後世儒學流派の分別、已に孔門諸子に於て胚胎せるを測知すべし、蓋三子の中にありては、子夏の傳最も盛にして且著はる、田子方段干木(共に魏の賢人)吳起禽滑釐(墨子の學を兼修す)の屬、皆業を子夏に受くるが如し、又詩(今の詩經)は子夏より傳はり、三四傳して荀卿を經て、毛亨毛萇に傳り、今の毛詩となり、春秋は子夏より弟子公羊高、穀梁赤に傳へて、公羊學の穀梁學となれり(史記儒林傳漢書藝文志經典釋文叙錄等に據る)而して孔氏の敎は、韓退之が惟孟軻師子思而子思之學出於曾子自孔子沒孟軻氏之傳得其宗故求觀聖人之道者必自孟子始と云へるが如く、孟子の闡發を得て、其旨益、世に彰はれ、遂に天下萬代の宗となれり、元の閻復が武宗帝の孔子を加號して大成至聖文宣王と爲せる詔を書して、先孔子而聖者非孔子無以明後孔子而聖者非孔子無以法所謂儀範百王師表萬世者也、於戲父子之親、君臣之義、永爲聖敎之尊、天地之大、日月之明、奚罄名言之妙と云へるは、古今の學者、均く以て善く孔子を稱賛せる文辭の第一となせり、而して論語は、乃ち此の絶大偉人の性格學行を窺ふへき隨一の書たれは、今遽かに僅々たる紙上に說き盡すことを得へきにあらす、然れとも上に抄說せし各章に就て、反覆熟覽すれは、其の概要を知ることを獲るに近けれは、本書の全講は、他日に讓り、請ふ試に此より聊か孟子を選釋せん

孟子

此の書、孟子の著はせるにより、取りて書名となせり、然れども作者自から名けしにはあらず、後人の追稱なり、是れ孟子に限らず、古代の諸子管子莊子孫子の如き、皆然るなり、子とは、男子の美稱、其義予已に論語に於て解せり孔子既に歿し、羣弟子各、其の學を以て門人に授け、流分れ派別れて、儒學の說亦一ならず、惟孟子、曾子の傳を子思の門に承け、稱して正宗となせるは、已に前述の如し、然れども後世學者の論は、蓋し是非取舍の言、亦甚衆し、姑く其の著しき者を擧ぐれば、荀卿に非十二子篇あり、東漢王充に刺孟あり、宋の司馬光に疑孟あり、李覯の常語、鄭厚叔の折衷、皆各非孟の說あり、以上は何れも孟子の言に歉然として快からざる者なり、漢の揚雄唐の韓愈、一は古者楊墨塞路孟子辭而闢之廓如也と云ひ、一は孟子之功不在禹下と云ふ、宋に至りて、歐陽修王安石等、孟子を推奬すること、益、盛にして、程氏の兄弟(明道伊川)は殊に孟子を尊崇し、躋して孔子に配し其の書を論語に媲し、學者當以論語孟子爲本論語孟子既治則六經可不治而明矣と云へり、朱子起るに及んで、爲めに衆說を折衷して、集註を作り、大學論語孟子中庸を以て、四書となす是より以來歷朝の功令、皆遵用して

改めず、以て現代に至れり、孟子の書、或は孟子の自著なりと云ひ、或は門人輯錄なり云ふ、韓退之は、孟軻之書非軻自著、軻既沒其徒萬章公孫丑相與記軻所言焉耳と云へり、宋の馬端臨は文獻通考に於て、更に斯の說を敷衍して、今攷其書孟子所見諸侯、皆稱謚如齊宣王梁惠王梁襄王滕定公魯平公、是也、夫死然後有謚、軻無恙時、所見諸侯、不應皆前死、且惠王元年至魯平公之卒凡七十七年、軻始見惠王目之曰叟必已老矣決不見平公之卒也、後人追爲之明矣と云へり、然れとも司馬遷が史記列傳(後方に見ゆ)を始め、趙岐朱子等の注家は、皆以て孟子の自著となせり、朱子は又文章上より觀察を下たして、熟讀七篇觀其筆勢如鎔鑄而成非綴輯所就也と云へり明の郝敬は蘇洵(蘇東坡の父世に老泉と稱す)の言に孟子之文不爲巉刻斬絕之言而其雄不可犯とあるを引き、又、論語、章法簡短、故是後人記錄、孟子、文章長展、非他人可代正是孟子、手筆と云ひ、斷して孟子の自著となせり、今二說を比して案するに、予は前說なる自著を取らんとす、且當時の王公皆謚を書せしを以て、馬氏は疑をなせども、古代の書籍には、後人の追訂によりて、生前に既に謚を呼ひし彼の左傳に衞の石碏の言を載せて陳、桓公方有寵於王と云へるが如きの奇觀あるは、決して尠となさず、何そ獨り孟子に於てのみ之を怪まんや、孟子年譜其他諸書に據るに、孟子の始めて梁惠王に見ゆるは、周の顯王三十二年即ち梁の惠王立て三十七年にして、孟子五十歲前後の時なり、其後四十九年即ち周の赧王二十六年、孟子九十六歲を以て卒すとあれば、其間に魯の平公に見るとあるも、亦疑ふへきにあらず、史記は孟子の事蹟を傳して曰く、孟軻者鄒人、(鄒は今の淸國山東省兗州府鄒縣受業子思之門人(孔叢子に孟子子思に見ゆる事を載せ、王邵は門人の人を以て衍とし、直ちに子思に學ぶとなせとも、子思とは年數合はざるを以て取らず)道既通游事齊宣王不能用適梁梁惠王不果所用則見以爲迂遠而濶於事情當是之時秦用商鞅(魏人刑名の學を主とす)富國彊兵楚魏用吳起(衞人兵法家)戰勝弱敵齊威王宣王用孫子(孫臏兵學に長す有名なる孫子にはあらず)田忌之徒而諸侯東面朝齊天下方務於合從連橫以攻伐爲賢而孟軻乃述唐虞三代之德是以所如者不合退而與萬章之徒序詩書述仲尼之意作孟子七篇と、史記の孟子を叙するや、僅に此に止まれるは、頗る過簡の嫌なきにあらざるも、此れ太史公司馬遷が司馬穰苴傳に世既多司馬兵法以故不論著穰苴之列傳と云ひ孫子吳起傳に孫子十三篇吳起兵法世多有故弗論論其行事所施設者と云へるが如く、世に既に多く傳はる者は、別に本傳に揭載せざるが、史記の定例なれば、孟子の如き、其の書儼存する者は、史傳の筆として、以上の言に止まるは、亦深く怪むに足らず、故に讀者にして

孟子の言行如何を詳覩せんと欲すれば、宜く親く其の書中に就て求むべし、孟子の註、東漢の程曾始めて章句を作る、然れども其の書後世亡佚して存せず、趙岐(字は邠卿京兆の人東漢の獻帝建安六年九十餘歳にして卒す)亦繼て註解を作る、今傳ふる所の趙註孟子、即ち是なり、其後註者あれども、概ね湮晦して著れず、宋に至りて、朱子の集註出て、爾來天下に流行す、學者稱して新註となし以て趙氏の古註と別つ、今、古註に據らんと欲すれば、清の焦循が著はせる孟子正義は考證頗る精確なれども、初學にありては、先つ安井衡の孟子集說を用ふる方、較簡便ならん新註は亦論語と同しく安部井褧の四書輯疏内の孟子を用ふべし、講義錄としては中村惕齋の孟子示蒙句解毛利貞齋の孟子俚諺鈔等あり、亦皆用ゐて參考とすべし、

齊宣王問曰齊桓晉文之事可得聞乎

(總旨) 此章、孟子の梁惠王上の篇にあり、保民の二字を以て提綱となし、心の字を線索とし察識擴充の二事を眼目とす、臣未之聞也の語先つ覇功を截斷撇去し無己則王乎より足以王矣に至るまでは進むるに王道を以てし、百姓皆以王爲愛より以下は導ひて不忍の心の我が固有性にして他より假り來るにあらざることを察識せしめ、有復于王より以下は固有性たる不忍の心

を順序を逐ふて近きより遠きに、擴張すべきを論し、抑王興甲兵より以下は齊王の恩足レ及レ於禽獸一而功不レ至レ於百姓一の病根たる大欲を拔き蓋亦反二其本一以下は告くるに施仁の實政を以てす尙、約して言へば其の根原は不忍にありて其工夫は善推にあり推して其機を塞かす善くして其の序を違はす是れ聖賢大作用の妙處となす古人云ふ本章上半は心術を論し下半は政策を言ふ王道の至精至大なる處寔に此に盡くと謂ふべしと

(解義) 齊宣王　齊は國の名其の都臨淄は今の清國山東省濟南府淄川縣にあり宣王名は辟疆、姓は田氏もと周の諸侯たり時に王室衰微し諸侯大國は小國を兼併し又各自ら僭して王と稱す宛も後世西洋に行はる聯邦の態にして互に覇權を掌握せんと圖りつゝあり宣王も亦其の一人なり　齊桓晉文之事　齊桓公名は小白姓は姜氏晉文公名は重耳姓は姬氏桓文皆其の謚なり二公共に周の諸侯を以て王室を輔け天下に覇たりし者　可得聞乎　不敏不材なる拙者でも伺はれますかと極めて謙遜なる語氣と同時に其の事を絶對なる光榮とせる意味を含む惘むべし宣王は唯僅に齊桓晉文あるを知るのみ

（通釋）孟子齊國の招聘に應して宣王に見へしに宣王問ふて云はく方今各國雄を競ひ覇を爭へる世界に處して誠に昔時五覇迭興の中にありて最も盛なる功業を傳へられし齊の桓公晉の文公は寡人の歆慕して已まざる英雄なるが彼の偉業を成就せられしは定めて其の謀臣齊にありては管仲鮑叔晉にありては趙衰狐偃等と、經營規畫の事ありしならんと思ふなり、今寡人に於ては夫子より其の秘計智謀を拜聽するの光榮得べきか抑も不敏なる寡人には到底其の光榮を有せざるが

孟子對曰仲尼之徒無道桓文之事者是以後世無傳焉臣未之聞也無以則王乎

（解義）仲尼之徒　仲尼は孔子の字、徒とは門徒なり　無道桓文　道は言なり物語すること朱註に漢の董仲舒の仲尼之門五尺童子（十二三歲の兒童）羞稱五覇爲其先詐力而後仁義也の言を引て亦此意也と云へり董子の言はもと荀子の仲尼篇に、仲尼之門人羞稱五伯（覇と同じ）の語より出つされども孔子及孟荀諸子皆絶對的に五覇の事を云はざるにはあらず趙岐本文を註して孔子之門徒（中略）雖及五覇心賤薄之是以儒家後世無欲傳道之者故曰臣聞也と云へるは用ふべしし　無以則王乎　以は已と通す無已は是非に言へよ聞き度しとあれば、餘の義にあらすとなり、王とは天下を統一して帝王たる道なり

（通釋）孟子對へて云く、折角の尊問を蒙れども、臣が宗師となせる孔子一門の輩は桓文の事は全く仁義を外面に粧へる詐僞的行爲なるを以て、初めより度外に置き論するに足らすとなして詳に述ぶる者なし、さるによりて後世の學者傳ふることなし傳ふることなければ臣に於ても未だ之を聞きしことなし故に尊問に奉答をなすこと能はざるなり然し大王殿下に於て折角の面會なる故に是非に臣が意見を聞き玉はんとなれば唯、仁義を表裏となく行へる誠實的の王道なるが王道なれば孔子一門の敎にして後世に傳へ臣も亦嘗て聞きし所なり

曰德何如則可以王矣曰保民而王莫之能禦也

（解義）德何如云々　德の字淺く看るべし即ち心得方なり何如と如何と、均く「イカン」と譯すれども、意義自から異れり如何は何狀の如きかと、形容上に就て云ふ何如は他の物と此の物と孰れか然るかと比較上に就て云ふ新語（漢の陸

賈の著に齊桓公尚レ德以霸とあり此れ霸術も亦德と稱するを得るなり但均く德と云へるも、王道に用ふると、霸術に用ふるとは、比較上同からず　保民而王　保民は人民を大切にもり立るなり張南軒曰く、宣王驟かに孟子の言を聞き、必らず甚高にして行ひがたき事あらんと意ふ、故に德何如則可以王矣と云へり、孟子之を蔽ふに一言を以てし保民而王と云へるなりと

（通釋）宣王云はく如何にも王とは至極尊き事業にして、桓文の霸業の如きは固より及ぶべきにあらず、然しながら此れは到底拙者輩の思ひ寄らざる高尚遠大なる仕事なれども、全體其の心得方は、霸業などと何程の差違があるや即ち心得方の程度は何位の事にて屹度相違なく王たることを得へきかと因りて孟子對へて云はく、何にも王となるとて、左程の難事難業にはあらず即ち多言を要せず、今や國中の人民を大切に守り立てて王となり玉へは、天下誰れ一人ありて相成らぬと禦き止ることは出來得ざるなり

曰如寡人者可以保民乎哉曰可曰何由知吾可也曰臣聞之胡齕曰王坐於堂上有牽牛而過堂下者王見之曰牛何之對曰將以釁鐘王曰舍之吾不忍其觳觫若無罪而就死地對曰然則廢釁鐘與曰何可廢也以羊易之不識有諸

（解義）寡人　曲禮に諸侯與民言自稱曰寡人とあり老子に王侯自稱孤寡不穀とあり朱子は諸侯自稱言寡德之人也と解すれども、謬れり、乃ち父なき孤子又は夫なき寡婦の如く立賴少き身と云へる義にて、人君の尊貴を誇らすして輔翼の道を衆人に望める意味より、して國主自謙の稱となすなり　可以保民乎哉　乎哉婉轉なる助詞乃ち「民を保するとが出來得ますかいなあ」と云へる意味にて裏面に自から必不能の口氣を含みて云へり　胡齕　胡は姓齕は名にして宣王の左右に侍從せる臣　將以釁鐘　釁は祭名釁は物の間隙にて新に鑄れる鐘に間隙あるを塞かんが爲めに犧牲を殺し其血を用ゐて塗り因て落成の祭をなすより祭の名となれり乃ち牛を殺し以て新鐘の釁に用ゐんとするを云ふ　吾不忍其觳觫云云　其は牛を指す觳觫は——朱註に恐懼貌とあり身振ひする氣味若は如と同義にて、若無罪而就死地とは、宛も其の狀は無罪の人が刑場に入るが如く、至極憫然に堪へざるを云ふ、不忍

は哀れ至極にて我慢が出來得ざるなり不忍の二字一章の骨子たり、長く胡齕の言を引くは、全く此の不忍の二字を云はんが爲めなり一牛の上に即ひて不忍を云へども却て是れ全體の仁心自然に發見して然るなり孟子の公孫丑下篇に惻隱之心仁之端也(公孫丑下篇)とありてむごいの氣の毒のと思へる心は仁の發現なるを云へり、本文の吾不忍其觳觫の十三字は善く惻隱の心を形容する者と云ふべし　不識有諸　先つ事實の有無を確め而て後無數の詰問を開出す、諸は之乎の約音を諸となす、故に初めに「コレ」と讀み重ねて「カ」と讀むべし漢字には此例頗る衆し試に二三を擧ぐれば何不を約して盍となし、奈何を約して叵となし、又不律を約して筆となすが如き即ち是なり

(通釋)　宣王更に問ふて云はく、保民即ち王たるを得べきは至極尤なる次第なれども、仲々其の保民と云へるが、容易の業にあらず、寡人ふせいでも、この不德を以て、保民をなすことを得べきか如何、多分なしがたき業ならんと思ふなり、孟子對へて云はく、臣は夙に大王を知れり、大王の如き高德あれば、保民をなし得べきなり宣王云はく先生は寡人を可以保民と仰せらるゝは、果して何の理由にて知り玉ふや、孟子云へるには、保民の本は即ち不忍と云へる仁愛なる心に在り、臣嘗て大王の近臣胡齕に聞きしことあり、胡齕の話には、或る一日大王堂上に坐し玉ひし時、牛を牽て堂下を過くる者ありしが王は御覽なされて憫然に思ひ召し問ふて仰せらるは其牛は將に何れへ往んとするが牽牛者申し上ぐるには將に殺して其血を以て釁祭に供へんとするなりと王の仰せには亟に釋せよ吾其牛の情態を見るに尾は搖き角は縮み觳觫と身振ひして恐れ宛も無罪の人が濫刑の下に死處に就かんが如くなるを見ることは如何にも忍ひ能さるなり牽牛者は王命を畏みながらも申し上ぐるにはされは此牛を釋し遣はすと同時に歷代の典禮たる釁儀式は廢止に致さんか王命は畏し典禮亦輕からず如何に取り計らひて然るべきかと此時大王の仰せには典禮何ぞ故なきに廢すべけんや亦竝に必しも廢せざれば予が命令を行ふべからざるにあらず彼の外に畜ひ養へる羊を以て此の牛に易へよ左すれば予が忍ひ能ざる心は先つ治まることを得るならんと以上は胡齕より傳聞の話にてあり臣は未だ實見せざる事なれば大王が此事ありしや否を識らず果して謬傳にあらざるか

曰有之矣曰是心足以王矣百姓皆以王爲愛也臣固知王之不忍也

（解義）是心足以王矣　是心とは、上文に不忍と云へる心なり朱子は王見牛之觳觫而不忍殺即所謂惻隱之心仁之端也擴而充之則可以保四海矣故孟子指而言之欲王察識於此而擴充之也と云へり、乃ち牛の殺されんとするを見て、憫然忍ひざる心を起せしはもと己れが本性たる仁の發動して外に見はるゝ惻隱の情にして人々固有性のものなるを察識し又能く是不忍の心を擴充して、偏く天下に及ぼし四海を保んじて王たるべきを云へるなり、察識とは注意して合點するなり擴充は段々に推し弘めて充實にするなり下文にある老吾老以及人之老云々、即ち此の擴充の事實なり　百姓皆以王爲愛也　百姓はもと尙書堯典に九族既睦平章百姓とあるを註者が釋して百官と云へるが如く、百官貴族を謂ふなれども、後には汎く國民を稱する義となれり、說文に姓民所由生也民不一姓故稱百姓とあり愛は朱註に猶吝也と釋せり、物惜みして、けちくさきなり此の句と下句臣固如王之不忍也と、亦共に甚緊要の句たり、此れ正に王に向かひ一難詰を發して、察識の機を興へ、又不忍の二字を指點して、其の己れが本心たるを確認せしむ

（通釋）宣王云はく先生の仰せの如く其事は固より有りて決して訛傳流言の類にあらず孟子云はく是不忍と云へる大御心が即ち只今臣の申上げし保民の事に付き、實功を擧けて天下に王となり玉ふに足れり是不忍の心は、天性にして決して外より燒き付けたる者にあらざれとも、但此に百姓と云へる識見粗疎なる輩は、皆王の羊を以て牛に易へ玉ひし事を以て、全く吝惜の私慾より出つるとなせり、然しながら臣は王の全く牛の死せんとするを憫然に思召すより爲し玉ひしことなるを知れり

王曰然誠有百姓者齊國雖褊小吾何愛一牛即不忍其觳觫若無罪而就死地故以羊易之也

（解義）誠有百姓者　小なる羊と大なる牛とを易へて用ゐしは、一寸吝嗇なるに似て、寔に百姓が譏れるが如き形迹あり、又誠に百姓と云へる愚なる者ありて、左樣なる妄議を爲せりと解釋するあり亦通す　褊小　褊は狹陋なることなり誠有百姓者の一句は、上文孟子の百姓以王爲愛と云へるに對して一句を塡め齊國雖褊小以下又孟子が上文に臣固知王不忍也と云へるを楯に取りて、自己の勝手なる辯解に供するに過ぎず、宣王察識の意なきや、亦以て見るべ

し

（通釋）孟子既に上文の如く述べて、宣王の本心に訴へ不忍の感は他より來るにあらずして、己れが固有性の發動なることを自覺せんことを求めしも、宣王は頑然として悟ること能はずして云へるには、實に先生の仰せの如く寡人は全く忍ひさるより羊を以て牛に易へしなり然れども或る方面より觀察すれば、小形なる羊を以て大形なる牛に易へしことなれば、誠に百姓達が寡人の吝嗇より起りしことなりと譏れるも一理なきにあらず去りながら如何に齊國が褊小なる國とは云へ吾何ぞ一匹の牛位を愛惜せんや何分にも、直に見し所にて、彼れが身振ひをなして宛も無罪人が寃枉を含み怨を呑んて死刑の場處に就くが如き憫然なる情態を見るに見兼ねし故に、羊を以て牛に易へしなり

曰王無異於百姓之以王爲愛也以小易大彼惡知之王若隱其無罪而就死地則牛羊何擇焉王笑曰是誠何心哉我非愛其財而易之以羊也宜乎百姓之以我爲愛也

（解義）無異　異は怪なり無異は怪く思ふなきなり　以小易大　隱は小にして牛は大なり羊を以て牛に易ふ故に以小易大と云ふ　王若隱其無罪　隱は痛なり氣の毒に思ふこと即ち不忍なり　牛羊何擇焉　擇は分なり牛羊共に皆無罪なるに何れに分別することありて、羊を殺して牛を助くるか、甚理由なき次第なり朱子曰く、孟子故設此難欲王反求其本心（即ち上の解釋中に述べし惻隱之心仁之端を本心と云ふ）王不能然故卒無以自解於百姓之言也

王笑曰云云宣王自分も以羊易牛の理由が分らざれば、笑ふて曰く是れ當時誠に如何なる心よりして然るかと、上節の語意を推すに、宣王は只愛と云へる一の惡名を解脫せんことを求む、孟子反て偏に愛の一字を以つて、王を難詰し、王無異於百姓之以王爲愛也の句を著け、已に宣王をして口を噤せしめ、又王若隱其無罪の句を着け語勢を一宕して忽ち急に牛羊何擇の句に接す、蓋孟子の意は宣王が不忍の心を發せんことゝ欲す、故に反て偏に難詰するに愛財の心を以てす、愛財の心は宣王の惡名として身に受るに堪へざる所なり、而して不忍の心は、宣王自から己れに固有性としてあるを知らざる所なり故に孟子說ひて牛羊何擇に至りて、王も亦自から前日以羊易牛の事は果して何心より出てたるを知らず、只呆然として之を一笑に付するを知る

のみ、我非愛其財　此の五字にて宜く一句となすべし然らざれは下の宜乎百姓云々の句に至りて解すべからず財は費用なり

（通釋）孟子もと宣王の本心に訴へ不忍の情の固有性たるを察識せられんことを希望すれども、宣王は只己れが愛財の上より爲せしにあらざるを辯護するのみにて、全く不忍の察識には無頓着なれば、乃ち一難を設けて曰く、百姓王を以て愛財の心より、羊を牛に易へしとなすを、大王には亦た深く奇怪なりと咎め玉ふことなかれ、形迹上より見れば、小なる羊を以て大なる牛と易へしことなれば、如何にも愛財の心より作せしに似たり、彼百姓輩惡んぞ此れが大王の不忍の心より然らしむることなるを知らんや、大王若し無罪の點よりして然りしならば、牛に罪なければ羊も亦罪なし、此の二者果して何れに分別ありて羊を以て牛に易へ玉ひしや、宣王孟子に難詰せられて、竟に其理由を發見すること能はす、乃ち自から倒惑の極呆然として笑ふて云へるには、是に誠に何の心を以て然るか我初めより決して牛は羊より大なればと思ひて、その財用を愛惜して殺さざるにあらず、而も羊を以て牛に易へしに就ては其の理由が、當人の私さへも分らざれは、成程百姓の我が致し方を以て財用を愛惜して然りとなすことは尤なる次第なり洵に先生の仰せの如く無罪にして死するに忍ひすとすれば牛羊共に均く同一にして何ぞ擇はんや

曰無傷也是乃仁術也見牛未見羊君子之於禽獸也見其生不忍見其死聞其聲不忍食其肉是以君子遠庖厨也

（解義）無傷　百姓の言あれども害とならず俗に云へる「ダイジナイ」の意なり　是乃仁術也　術は法の巧なるものとありて物事の都合よろしく婉轉曲折に行ふて我が目的を達し得る義にして、仁術とは不忍の心が委曲に發見し來るを云ふ、其の由は下句に云へり　見牛未見羊　不忍の心は、本來人にありて物事に觸れて發動することなれば、牛羊に對して共に分別あるべからず、但牛は王が已に見て不忍の心發動し羊は未だ見ざれば發動せす故に羊を以て牛に易へしむ已に古來典禮の釁祭を廢せざると共に、又不忍の本心を完全に發達せしむるを得、是れ乃ち仁術たる所以なり、張南軒は是乃仁術也猶言仁之道理也見牛未見羊愛心形於所見是乃仁術也と云へり趙岐は是乃

王爲仁之道也時未見牛羊之爲牲次於牛(牛羊豕三牲を太牢となし羊豕二牲を少牢となす)故用之耳と云へり姑く錄して參考に備ふ　是以君子遠庖厨也　是以の二字よりして推せは、君子遠庖厨は古語なるを知るべし、大戴禮保傅篇にも於禽獸見其生不食其死聞其聲不忍其肉故遠庖厨所以長恩且明有仁也の文あり清の翟灝は禮記玉藻篇に同一のある語を孟子述べりとなせり、佐藤一齋翁は遠庖厨を庖厨に遠さかると讀みて庖厨を遠くるにあらずして庖厨のそばへ近づかざるなりと云へり今此の說に從ふ本節是乃仁術也の句、上節是誠何心の句と相應す王自から何心なるを知らず故に孟子仁術を以て開發す見牛未見羊の句又上節の牛羊何擇と相應す牛羊本より擇ふなきも之を易へしは一は已に見ると一は未だ見ざるとに因る別に其間に意ありて爲すにあらざるを云ふ君子之於禽獸の句君子の二字を點明して隱に百姓と分別あるを示す然れども此の處の主意は宣王察識の機を啓くにあり故に見其生聞其聲の語は上の見牛と對し不忍見其死不忍食其肉は上の不忍其觳觫の語と對し君子遠庖厨の句亦未見羊の一面と隱然相對す蓋し犧牲の用たるや祭祀饗禮に廢すべきにあらず而して仁愛の心亦養ひ長せざるべからず、故に古來君子の心を用ふるや亦是此の如し此其の仁術たる所以なり

(通釋)

宣王自から解決を得ざれば一笑して前の如く云へるも其の實は隱然沮喪の意あり、孟子乃ち急に慰安の語をなして曰く、大王寔に愛財の故にあらず、百姓の言ありとも一向に傷むことなきなり是れぞ乃ちそこが仁を行ひ玉ふに巧者なる成され方なり、何となれは王の發せられし不忍の心はもと人の固有性たる仁が物事に觸れて作りし者にして王は牛を眼前に見玉ひしも未た羊を見玉されは、牛には不忍の心が發して、羊には發せず、故に道理よりせは、牛羊何擇と云へとも、一を殺して一を助く、是術や正に德あり智ある君子の術なり君子の禽獸に於けるや、嘗て其の生けるを見るとき其の死の哀れなる狀を見るに忍ひず、其の生前啼ける聲を聞くときは其の死後の肉を食ふに忍ひす是を以て君子は祭享の禮既に廢すへからず惻隱の心亦遏むへからざるよりして惟其の身の方から庖厨に遠さかりて、其の死を見す其の聲を聞かす以て不忍の心を長養して爲めに絕滅するに至らしめず、蓋常に殘酷なる殺生の事を見聞すれは、自然に習慣其性となり殺伐の氣風に

化し易けれはなり君子の仁を行ふに婉轉曲折して巧者なるや此の如し今や大王の羊を以て牛に易へ玉ひし成され方は洵に此の君子の所爲と同しきなりと但君子は常に意を此に存し失はざらんことを務む宣王は一時の偶發に止りて復意を留めて察識をなすを知らす是れ孟子の說遂に當時に用ひられざる所以なり

王說曰詩云他人有心予忖度之夫子之謂也夫我乃行之反而求之不得吾心夫子言之於我心有戚戚焉此心之所以合於王者何也

（解義）詩云　詩は詩經の小雅巧言の篇に他人有心予忖度之翟翟甕兎遇犬獲之とありて、もと大夫が讒言せられしを傷みて作りし詩なれとも、凡て詩は時と場合によりて、斷章取義として只文句のみを取りて他の意義に轉用すること あり、其の事は左傳等に甚多し今宣王の此句を引きしも亦其例なり　忖度　忖は思なり度なり、推量するを云ふ　夫我乃行之　之とは羊を以て牛に易ふるなり、以下三句、上文の是誠何心哉の三句に應す　夫子言之　夫子は孟子を謂ふもと夫子とは夫は人を指示する辭彼と同義なり子は男子の稱

にて論語の皇疏に禮身經爲大夫者得稱夫子とあり後、汎く用ゐて師長の敬稱となす　有戚々焉　朱註に戚々心動貌とあり胸騷きして、ハッと思ふ氣味即ち其頃の心持になるを云ふ當日堂上の燦爛光景宛然復覩緣是心乃固有物事所以索之而可尋と古人は云へり　此心所以合於王上の是心足以爲王の句に跟して來る足と云はすして合と云へるは宣王の謙辭

（通釋）孟子が上の如く見牛未見羊の義を指出するにより、宣王の苦悶せる胸懷は開け、成程と得心し悅ひて曰く詩の巧言篇に他人に心あり即ち思入あるを予より推量して承知すと云へることあり誠に夫子今日の成され方の如きを謂ふなり實に夫子は善く寡人の本懷を推量なし玉へり夫れ全體に以羊易牛の事は我乃ち自身に行ひながら先刻夫子の御尋によりて反りて我か心に其の理由を考へ求むるに及んで、竟に何等の故によるかを自得すること能はす、然るに夫子は局外の地に在りて見牛未見羊の言を以て剖析說明を賜ひてより我か心に能く的中し、戚々焉として前日作りし不忍の思が宛然復動きて始めて此の心は我か本身に在るを自覺せり但、此の不忍の心は甚微細にして王道は甚廣大なり夫子乃ち曰く是心足以爲王と、知らす此の

心が王に合ふ所以は果して何の點に存在するか

曰有復於王者曰吾力足以舉百鈞而不足以舉一羽明足以察秋毫之末而不見輿薪則王許之乎曰否今恩足以及禽獸而功不至於百姓者獨何與然則一羽之不舉爲不用力焉輿薪之不見爲不用明焉百姓之不見保爲不用恩焉故王之不王不爲也非不能也

（解義）有復（音服）復は白なり奏事曰復とありて陳述するなり　百鈞　說苑辨物篇に三十斤爲一鈞とあり百鈞は三千斤にして概略我が邦の千斤に當れり百鈞は至重にして擧け難き者なり　一羽　羽は鳥の羽一羽は至て輕く擧け易き者なり　秋毫之末　毫は毛なり禽獸の毛秋に至れは其末銳小にして目に見難きなり　輿薪　輿は車なり車に積める薪は大物にして見易きなり　王許之乎　許は聽許なり　今恩足以足及禽獸云々　此れ絶對的に恩が禽獸に及べるを非難せしにはあらず、禽獸も亦た本人と同く天地間に生れし者なれは、成り得べくんば恩澤を推し及ほすべきなれども、之を人民の吾と同類にして親愛すへきには比すべくもあらず況や物を感孚せしむることは比較的に異類を感孚せしむるは難くして同類を感孚せしむるは易きなり然るに今宣王は異類の禽獸さへも生命救助の恩澤を蒙りしに反りて同類の百姓は仁政の功未た至らすして窮餓の苦日に益ゝ甚きは獨り何そやと質問し既に異類にして感孚なしがたき禽獸すら尙ほ且つ我が恩澤を推し及ほすことを能くせり況や同類にして感孚なし易き百姓に向ふて仁政を施し之を保すること豈に能くせずとなさんや固より能くするに足れは即ち進んで天下に王たることは亦決して難きにあらさるを云ふなり姚元素云く孟子要王擴充何不就以老老幼幼說明與他只緣齊王認保民而王甚難故先分疏難易使之了然然後告以用力處

（通釋）宣王既に上文にあるが如く於吾心有戚戚焉と云はれ始めて不忍の心が我が固有性たるを察識すれとも、尙ほ未た之を擴充して百姓を保んすべきを知らす孟子乃ち一話を設け告けて曰く假に大王に白す者ありて吾か力の强きは百鈞の重量を擧るに足れとも一羽の輕量を擧るに足らす吾か目の明なるは秋毫の細物を察するに足れとも輿薪の大物を見るに足らすと陳すれは大王は是れ道理なりとて信用し玉ふや否や宣王曰く重きを擧くる

に足りて輕きを擧るに足らす細きを察して大なるを見るに足らすとは道理に無きことなれは勿論虛誕の言とし敢て信用せさるなりと孟子即時に其の言に乘して曰く大王能く斯の道理を辨明し玉へる以上は願くは更に熟圖を垂れ玉へよ今や大王の恩澤は異類なる禽獸に及ふに足れるはば是れ能く百鈞を擧けて秋毫を察すると同理なり而して大王仁政の功績反て百姓に至らさるは是れ一羽を擧けて輿薪を見さると同理なり大王の聰明なるに似もやらす他人の輕重大小の見を謬れるは能く判別なし玉ひて大王の行ひ玉へる事は矛盾せること此の如し是れ獨り何の故ぞや然らは則ち彼れ一羽の擧からさるは人に力なきにあらす擧くる力を用ゐさればなり輿薪の見へさるは人に明なきにあらす見る明を用ゐざればなり而して百姓の保んせられさるは大王に恩愛の情なきにあらす百姓を保んする恩愛の情を用ゐされはなり夫れ大王は既に恩愛を固有し玉ふに拘らす用ゐ行ふことを肯んせすして遂に天下に王たらす故に大王の民を保して天下に王たらさるは大王の力は能くすれとも自から棄てゝ爲さるなり爲んとすれども其の力能はさるにはあらさるなり

曰不爲者與不能者之形何以異曰挾泰山以超北海語人曰我不能是誠不能也爲長者折枝語人曰我不能是不爲也非不能也故王之不王非挾泰山以超北海之類也王之不王是折枝之類也

（解義）不爲與不能者之形　不爲は俗に云へる「できる事をせぬ」なり不能は仕やうと思ても出來ぬなり形は形狀なりすがたを云ふ　挾泰山以超北海　以下宣王の形を問ふに就て孟子亦形を以て答ふるなり挾は腋の下に抱持するなり超は飛び越ゆるなり泰山は山の名北海は即ち渤海共に齊國の疆內にあり故に以て喩となせり　爲長者折枝　長者は年長の人即ち父兄先輩なり折枝は朱註によれば草木の枝を折るなり趙註に按摩折手節解罷枝（疲れたる手足を揉む）となせり即ち禮記內則の篇に子婦事舅姑問疾痛疴癢而抑搔之とある抑搔の義なれは、此說用ふへしと先輩は云へり、又枝は肢（手足）と通す肢體を斂折して長者に敬禮をなすを云ふとの說もあり

（通釋）不爲と不能と要するに天下に王たらさるは一なり、因て宣王問ふて曰く、夫子寡人に王たらざるは是れ爲さざるにて、能はざるにあらすと宣玉へり、敢

て問ふ二者の形狀は果して何程か異なれる殆んど同きにあらざるか孟子曰く其の異なるとは甚大にして同からさる形狀は極めて明白なり今遠く他事を引きて申上くるを待たす近く王の御承知ある物に就て譬ふれは彼の南に當りて高く峙たてる泰山を腋下に抱へ持ちて北方に當りて茫洋涯りなき渤海を躍り越ゑんとす此乃ち古今必無の事なり人に語りて我は如何になすとも海山に勝つこと能はすと云へるは是れぞ誠實に能はざるなり又年長者の命によりて草木の枝を折らんとす格別の力を要せす洵に一擧手一投足の勞なるのみ然るに人に語りて曰く我は能はすと是れぞ聊かの勞を厭ひて爲さゞるなり力の能はざるにあらず以上の事にて乃ち二者の形を異にするを觀るべし今大王素より不忍の心を具有し玉へは自から以て民を保して王たるべきに拘らず王たるべき實政を行ひ玉はざるは是れぞ正く彼の力を盡して能はざる泰山を挾みて北海を超えんとする類にあらすして乃ち勞を厭ふて爲さゞる長者の爲めに枝を折る類なり

老吾老以及人之老幼吾幼以及人之幼天下可運於掌詩云刑于寡妻至于兄弟以御于家邦言舉斯心加諸彼而已故推恩足以保四海不推恩無以保妻子古之人所以大過人者無他焉善推其所爲而已矣今恩足以及禽獸而功不至於百姓者獨何與

（解義）老吾老　以下正に上に云へる是心足以王の實理を答へ、宣王に望むに不忍の心を擴充せんことを以てするなり、而して此の四句尤も人民に恩を推すは禽獸に及ぼすより容易なるべきを言ふ、上の老は動詞にして、老人として取扱ふことを云ふ即ち孝弟を盡すなり下の老は名詞にして老人父兄を云ふ吾老と云へるは人の老に對して云へるなり下の幼吾幼も亦た此の例を以て解すべし上の幼は慈惠を施すを云ひ下の幼は子弟を云ふ以及人之老　人之老は他人の父兄を云ふ以及の二字味ふべし自分より其場へ掛けることにて擴充の意味隱躍として見はる吾老と云ひ人之老と云ひ吾幼と云ひ人之幼と云ふ共に是れ同類の間なれば固より意思の疏通し易きこと異類なる禽獸に對するの比にあらず　天下可運於掌　恩澤の天下へ行き屆くこと何の造作もなく手のひらにて運はすと同樣なり極めて天下に王た

るの容易なるを云ふ　詩云刑于寡妻　此の詩は周代の詩人が文王の聖德を頌贊して作れる者にして詩經大雅思齊の篇にあり刑は法なり手本とすること寡妻は朱註には寡德之妻、謙辭也とあり乃ち詩人が文王に代りて云へる辭となしたるなり趙註には寡少也言文王正己適妻則八妾從とあり、鄭玄も寡妻適妻也と云へり、白虎通に、天子一娶九女、一爲適妻餘爲八妾とあり、天子は本妻一人に妾八人あり、文王の德能く本妻の模範となりて後庭の治まれるを云ふ、要するに二說孰れに從ふも可ならん、　御于家邦　御は治なり家邦は國家なり　言舉斯心加諸彼而已　此れ孟子詩の意を解して上の自說を證するなり斯心とは不忍の心を指す、斯は彼の對稱にて、上に云へる寡妻兄弟家邦を指さず文王自身より云へは皆外にあれば彼と云ふなり舉は俗に云へる持上なり加は其上に載せ置くを云ふ加の字の內、自から其の事に次第順序ある意を包含し彼の字の內原親疏の等差あるを概括して云へり乃ち許多の運爲施設全く斯の不忍の心を持上て寡妻兄弟家邦と自然の順序等差あるに從ふて、其の上に載せ置くに過ぎざるを云ふ故に下に而已の二字を着けて其他に何等の工夫を要することなきを示し上句の可運諸掌矣と相應す　故推恩云云　以下人君の身上に就て說く　古之人云々　汎く古來天下に王たる者を指す必らずしも文王と粘定せず、大過人とは保四海的功業あるを云ふ善推其所爲は即ち上句の舉斯心以加彼の意なり恩を推すに秩序ありて親より疏に及ふ故に善推と云ふ張南軒曰く孟子之意非使之以愛其物者及人蓋使之因其愛物以循其不忍之實而反其所謂一本者親親而仁民仁民而愛物此所謂王道也と此の言善く玩味すべし所爲は上文に云へる百姓之不見保爲不用恩也と云へる用恩の義なり其の行事に實現するよりして、所爲と云ふ上に無他焉と云ひ此に而已矣と云ふ都て其容易の事たるを云ふ蓋此節上の爲長者折枝之類也を承け來り、極めて易く極めて近く、方に王たるに合ふ所以を云ふ　今恩足以及云云　此の語已に上文にあり、今又此に再言するなり文章より云へば複筆生姿議論より云へば、反覆提撕して、主意を束縒して散漫の弊なからしむ、

（通釋）王の王たらさるは、前述の如く恩を用ゐさるにあれは、苟に能く恩を用ゐて施すに順序を以てせは、必らず天下に王たらん、其の道如何と云へば、人君能く先つ孝弟を盡して吾か老者たる父兄に事かへ、然る後他人の老者に推及

ぼし、其の子弟をして皆能く父兄に事ふることを得せしむ又先つ慈愛を施して吾が幼者たる子弟を撫育し然る後他人の幼者に推し及ぼし其の父兄をして皆能く子弟を撫育することを得せしむべし、是の如くなれば廣く天下の老幼に及ぶ所以の者は、もとより此の吾か老吾か幼に對する恩澤を越えす、其の恩天下に及ぶや、特に掌上に運すか如く、極めて容易の事にして何の難きことかあらん、昔時周國の詩人は文王の大德を歌ふて、文王の大德は先つ模範を寡妻に垂れ、閨門の内、肅雍として治り施て多くの兄弟に及び、友愛親睦、互に相輔翼し、以て家邦衆民を撫御すと云へり今此の次第を解釋すれば、即ち此の不忍の心を擧げて、寡妻に仕向て寡妻以て正く、兄弟に仕向て兄弟以て和き、家邦に仕向て家邦以て治まりしに外ならず、乃ち我が固有性たる不忍の心を善く注意して運用するにあらざるはなし、故に善く順序を誤らず、恩を推せば、四海の遠きをも保するに足れり、況や家邦の近きをや、順序を履ます恩を推さゞれは、妻子の親きをも保するに足らず、況や四海の遠きをや、古代聖人の大に人に過ぎ賢れる所以の者、他の理由あるにあらず、亦唯善く其の爲す所を推し及ほすに外ならず、此の以外には聖人なりとて別段に何等の秘訣もなきなり、而して善く其の爲す所を推し及ぼすときは先づ仁政の功吾と同類たる百姓に至りて、然る後愛憐の恩、異類たる禽獸に及ぶべきなり、然るに今や大王の恩澤は禽獸に及ふに足りて瀕死の牛は助命を獲しに拘らず反て大王仁政の功は百姓に及ばす、擧國の人民皆飢餓困窮を訴へて止ます、推恩の順序先後倒置せること是の如きは、獨り何の故ぞや、是れ必らず外に深き事由ありて然るならん。

權然後知輕重度然後知長短物皆然心爲甚王請度之

（解釋）權然後知輕重　權は朱註に稱錘也とあり、衡をはかる分銅にて、名詞なれども、今動詞として用ゐ、はかりてと譯す、即ち物の重量は自分極めの手心にては十分に分りかたし、權を以てはかりて、然て後に始めて確實なる輕重を知るを得べし、　度然後知長短　度は「ど」と讀めば、丈尺也とあり物指にて、名詞なれども、動詞として用ゐ「たく」と讀み、亦はかりてと譯す、即ち物の長短を分つは亦必らず度を以てはかりて正確なる事を得るを云ふ、　物皆然心爲甚　何物に限らす、輕重長短を知るは、皆權度を以て稱量すべきなれども、心の權度を必要とするは更に他の物より甚し、即ち心の事物に應接するに當り

ては、尤も注意して本然の道理を權度として輕重長短をはかり順序を紊すべからざるを云、以上は朱子の說によりて解せしが、佐藤一齋翁は本語を以て心の妙理を說きたる者となして、即ち權は能く物の輕重を量れども、自ら其の輕重を量ること能はず、度は能く物の長短を計れとも、自から其の長短を計ること能はず、唯心に至りては能く物を量り、又能く自から量る至妙至靈の物なりと、心の本性を言ふて、宣王の自から本心を知られんことを望むなりと云へり、此の說に據るときは、心爲甚とは、物事に感應する時の心が最も大切なるを云ふなり、二說共に通す、今姑く朱說に從はん、　王請度之　之とは仁民と愛物とを指す、乃ち愛物は宜く輕くすべく、仁民は宜く重くすべきを云ふ王或庵云く、到此王不能下一轉語文勢至此直是水盡山窮看他下文轉變之妙と。

（通釋）此れ大王特に自から度らさるの結果なるのみ、夫れ物には各輕重の量あり、我が手心のみを以ては、正確に分ちがたし、必らず權を以て權りて然して後知るべし、物には各長短の丈あり、我が目分量のみを以ては正確に定めがたし、必らず度を以て度りて然して後に知るべし、凡物の當に權度すべきや皆然り、而して心の權度せざるべからざるは、他物に比較して尤も甚となす、蓋し物を權度せすして、妄に手心目分量のみにて度り損ずるとも、一物を過つに外ならず、心の權度を得ずして思ひ違ひを生ずるときは、過失は一事に止まらず、今や民と物とは、果して孰か輕くして孰か重きか、又孰か長くして孰か短きか大王よ請ふ吾か本心を以て篤と權度せられよ、必らずや自然に辨へ知ることを得て、物事に應接して差はず恩情を施すに秩然として先後の順序あらん、

抑王興甲兵危士臣構怨於諸侯然後快於心與

（解義）抑は朱註に發語辭とあり乃ち上節の王請度之に連續して解し、「こゝに」と云ふ意なり然れども此れは矢張反語の辭として、上を抑へ下を起す義となすべし、それは叉手置てと語端を更らためて云へるなり、此より以前は牛を見し事を云ひ、此れより以下は實事を責むるなり、　士臣　戰士なり、　構怨　構は結なり　然後快於心與　本心に度りて見られよと云へる意なり、上句の興甲兵云云一串說下し尤も危士臣の一句を重とす此れ現實多數の人を殺す事にて、其の不忍の心の發すること必らず彼の一牛を殺すの比にあら

す、其の事の孰れか輕重小大なるや當さに本心に權度すべき者なり、蓋宣王推恩の功未だ百姓に至ること能はざる者は、正に此の一事に由れり故に孟子爲めに直ちに其の病源を摘出するなり朱子曰く孟子以王愛民之心所以輕且短者必其以是三者興甲兵危士臣構怨於諸侯爲快也然三事是非人心之所快有甚於殺觳觫之牛者故指以間王欲以此而度之也と

（通釋）仁民と愛物との輕重大小の度、其の顚倒の甚きは、何の故ぞや扨ても大王には必ず甲兵を興し動かして、士臣を危殆ならしめ怨仇を他國の諸侯に構ひて天下の惣相手となり然る後始めて御心に快樂と思召し玉へるか、一牛の觳觫には忍びずして、士臣の危殆は、反て快樂となす、何ぞ其本心の權度に訴へて、事の輕重大小を辨別し玉はざるや、

王曰否吾何快於是將以求吾所大欲也

（解義）吾何快於是　是は上節の興甲兵危士臣構怨諸侯の三事を指す、是の三事は、皆殘忍無道の業なり故に宣王も亦以て快樂とせざるなり是れ一段惻隱の良心尙未全滅せざるを見るべし、前日の觳觫たる牛に忍びざるも、畢竟此の良心の偶然發動せしに外ならず但し其の大欲ありて遂行せんとするより、折角存在せる良心も爲めに誘惑を蒙り蔽塞して明ならず、故に不忍の情一牛に向ふては偶然發動して、百姓に向つては平生實現せず其の極や不快樂となせる三事をも敢て行つて顧慮せざるに至るなり

（通釋）宣王も亦人なり豈に一點仁心の存するなからんや、乃ち答へて云はく、否甲兵を興し怨を諸侯に構ふるが如きは、吾何ぞ是を以て快樂となさんや、然るに玆に不本意ながらも之を爲さゞるを得ざる所以あり、蓋し吾か意中に固より別に大なる欲望の存在するありて將に以て之を求めんとすればなり、然らざれば寡人と雖も、豈亦百姓の愛すべく士臣の危殆ならしむべからざるを知らざらんや、唯此大欲望を成就なさんが爲めに、他の萬事を擧げて犧牲となすに至れるなり、

曰王之所大欲可得聞與王笑而不言曰爲肥甘不足於口與輕暖不足於體與抑爲采色不足視於目與聲音不足聽於耳與便嬖不足使令於前與王之諸臣皆足以供之而王豈爲是哉曰否吾不爲是也曰然則王之所大欲可知已欲辟土地朝秦楚莅中國而撫四夷也以若

所爲求若所欲猶緣木而求魚也

（解義）笑而不言　思ひを顔まで見らはせども、欲望の餘り大なれば以て孟子に告くるを難かるなり　爲肥云云　肥へ太りて甘き肉、爲の字下の輕暖の句の上にはなし本句を被りかくるなり、餘皆之に倣らへ、輕暖　輕くして暖かなる衣服　抑爲采色云云　抑とは上を抑へて下を發する辭、人情の欲、女色音樂尤も甚し、故に更に一抑字を着けて、云ふ采色は華采の色にて、美色即ち美女を云ふ　聲音　音樂なり　便嬖　近習嬖幸の人　皆足以供之　皆は肥甘以下の五件を指す　而王豈爲是哉　而も王豈に是が爲めならんかと讀むべし然らざれば下文の王曰否の句通せず豈は殆と同義に用ふること あり三國志に徐庶が先主に諸葛亮を薦むる言を載せて將軍豈欲見之哉と あり此れ哉の字を乎の字と同義に用ゐ疑辭となせり、孟子本句の豈と哉の字と同一の意味なり　然則王之所大欲可知已　それならば王の大欲と仰せらるゝ條件は分りました、孟子本より已に宣王の大欲望が如何なる條件なるかを度り知れども但其の事を確實認知せんが爲めに、故に肥甘以下の五件を設け豈爲是哉と云ひ以て宣王の意を試みしに、王曰否とありて、果し

て我が知れるが如くなるを見しが故に、本句の如く曰へり　辟土地　辟は闢と同し、領土を開き廣むるなり　朝秦楚　秦は咸陽（今の陝西省西安府咸陽縣）に都し陝西甘肅四川等各省の地を領す楚は郢（今の湖北省荆州府）に都し今の兩湖兩江安徽各省及浙江の一部を領す共に當時の最强國たり朝は來朝せしむるなり　莅中國而撫四夷　莅は臨なり　闢土地朝秦楚莅中國は共に支那疆域内に屬する事業なれども、撫四夷に至りては、又威權海外に行はるゝなり、故に一の而字を其間に加へしなり、四夷とは、四方の夷狄なり、小學紺珠に、東夷西戎南蠻北狄と、四方の別名あれども、總て四夷と名くるは、猶公侯伯子男を、皆諸侯と號するがごとしと云へり　以若所爲　若は如此なり上文を指す辭、所爲は興甲兵構怨諸侯の事を云ふ　緣木而求魚　緣は攀ちて升る、又因緣の義にて、俗に云へるスガリ登るなり、鳥の巢は木にあり、魚は潛んで水中にあり、木に緣りて魚を求むるは、是れ魚を鳥巢に求むる者にて、必らず得ざるに喩ふるなり、欲闢土地四句、排宕而出、極力鋪張如花如火、使王色飛、以若所爲三句、冰泉雪水、劈面一淋、使王骨戰忽熱忽冷、一上一下高者、飛於九天之上、下者墮於北九地之下

（通釋）孟子曰く、大王の所大欲と仰せらる條件は、臣をして聞くことを得せしむべきか、宣王も流石に自から過分なる欲望と思ひ殆んど口中まで出たしたれども、笑ふて言はず、孟子又問題を設け問ふて曰く、大王の所欲と仰せらるは、豈に肥甘の美味が御口に十分に入らざるが爲めに、其の滿足を求むるか豈に輕暖の美衣が御體に十分被らざるが爲めに、其の滿足を求むるか、抑も左樣なる小事は扨て置き或は采色の御目に留る美人が十分ならざるが爲めに、其の滿足を求むるか、聲音の面白く御耳を感する音樂が十分ならざるが爲めに、其の滿足を求むるか御近習御相手たる便嬖が御前に於て使令に供するに十分ならざるが爲めに其の滿足を求むるか、然れども臣を以て觀察するに、凡そ以上數件は、大王の諸臣皆已に各々御用を供給するに足れば今更別に御不自由を感せらるゝ筈なきなり、而も何の故に大王はそれに厭き足らずして、殆ど是か爲めに上の與甲兵三件の如き大冒險なる事業をなし玉へるか宣王曰く否、是等の事は、瑣細なる者にて、固より吾が大欲として申上くるまでの事にならず、吾是れか爲めに、冒險の所業をなすにあらず、孟子曰く、然らば則ち大王の大欲と仰せらるゝ條件は、明白に分りたり、蓋し大王は先つ第一に貴國附近の小邦を攻め取りて大に領域を闢き、次きに當時王と雄を爭へる列國は勿論、最强大國なる秦楚の君主を來朝せしめて臣屬となし、中國に押し出たし、臨んで政令を施し、尙も進で南蠻北狄西戎東夷に至るまでを綏撫して屬邦保護國の類となさんと欲するなり、是れ洵に雄大なる快擧に相違なきも之を求むるには亦相當の方法あり、然るに今や此の如く甲兵を興し怨を諸侯に結ふの事を以て此の如く雄なる快擧の成功を求むるは猶水中の魚を取らんとして木上の鳥巢に就て求むるが如し、實に方角違ひの事にて、到底成功を得ざる愚擧たるなり、嗚呼大王誤れる哉、

王曰若是其甚與曰殆有甚焉緣木求魚雖不得魚無後災以若所爲求若所欲盡心力而爲之後必有災曰可得聞與曰鄒人與楚人戰則王以爲孰勝曰楚人勝曰然則小固不可以敵大寡固不可以敵衆弱固不可以敵强海內之地方千里者九齊集有其一以一服八何以異於鄒敵楚哉蓋亦反其本矣

（解義）殆有甚焉　殆は近なり、有は又と通すとの說あり、一說なり宣王己の大欲は

力を以て求め得べしと思へるに、孟子の猶緣木求魚と云へるを聞き、其求め得がたきの甚きを驚訝せるを以て、孟子は更に一層を進めて云へるなり、甚焉とは、後の災の上に就て云ふ、　鄒與楚戰　鄒は當時の小國、楚は大國、皆已に上に見ゆ、楚與鄒戰と云はずして、鄒與楚戰と云へるは、鄒より兵端を開きし辭なり鄒の自ら力を量らざるを見して、暗に齊王に中て云ふなり、　曰楚人勝　勝負は常になく、時に或は鄒人勝つことあるも、到底楚の敵にあらず、故に其の結果に就て楚人勝と云へるなり、　然則小固云云　鄒楚の二國に因りて凡てを概論するなり、小大は土地を以て言ひ、衆寡は人員を以て言ひ強弱は勢を以て言ふ固とは勿論の道理なるを云ふ、　方千里者九方千里は四方千里の地なり、秦楚齊(三國已に上に見ゆ)燕(其の都薊は今の直隷省順天府大興縣)趙(邯鄲に都す、今の直隷廣平府邯鄲縣)魏(安邑に都す、今の山西解州夏縣)韓(陽翟に都す(今の河南禹州)宋(商邱に都す(今の河南歸德府)中山(本と白狄の別種今の直隷正定府に居れり)の九國を云ふ、　齊集有其一　齊の領地を集めて千里なれば是れ天下九分の一を有つ　何以異於鄒敵楚　是れ謂ゆる後災なり、蓋亦反其本矣　蓋は疑辭不敢決辭と字書にあり、釋大典の曰く蓋を「ケダシ」と讀むは、萬葉の歌に「イニシヘニ、コフラントリハ、ホトトギス、ケダシヤナキシ、ワガコフルコト」とあり、此れケダシの出處なり、蓋の字盡くケダシの意にあらざれども、假に通して「ケダシ」と譯すと焦循は蓋與蓋(何不の約音)同き也史記、孔子世家夫子蓋少貶焉檀弓子蓋愼諸並以盍爲蓋と云へり王引之の經傳釋詞によれば凡そ蓋亦と云ふときは、亦は唯助言にして、別に意義なし、左傳の僖公二十四年に、盍亦求之とあるは盍求之なり國語の吳語に王、其盍亦鑑於人とあるは、盍鑑於人なりと同しく、孟子の盍亦反其本矣は盍反其本也と說けり反に其本とは、朱註には說見下文とありて、乃ち次節の發政施仁を指すと爲せり、佐藤一齋翁は、下文に王欲行之則盍反其本矣と、皆同く不忍之本心を指して云ふとなせり、是亦一說となすべし、

(通釋)

宣王猶自から力を以て大欲を遂け得べしと信して疑はざれば、孟子の緣木、求魚の言を聞き驚き訝りて曰く、大欲を求むるは、容易ならざることは勿論ならんも此の如く至極に難きか、孟子答へて曰く、否、實際を申さは殆んど緣木求魚より更に難きことあり、何ぞや、緣木求魚、成程苦勞をなすも、單に魚を得さる徒勞に止りて後來更に其れが爲めに災禍はなきなり、此の如く甲兵

を興し、怨を諸侯に構ふ成され方を以て、此の如く天下を一統せんとの大欲を成し遂げんと求め玉ふの時は、後來に於て惟何等の功績なきのみならず、又將に此れが爲めに禍災を招かんとするなり、宣王曰く、其の後來禍災あらんとの尊說は、聞くを得べきか、孟子曰く、其の道理甚だ分明にして疑ふべからざるも、王獨り察せざるのみ、今試に一例を譬へて云はんか、彼の鄒は小國にして、楚は大國なるは、大王の夙に知り玉ふ所なり、然るに今鄒國が己れの力量を計らずして、敢て楚國と戰爭をなさんか、大王は鄒楚の二國孰れか勝つとなし玉ふか、宣王曰く、鄒の楚に抗するに足らざることは是れ何ぞ別に辯論を待たんや、楚人必らず勝たん、孟子曰く如何にも大王の尊說の如くならん、然らは則ち此の鄒楚の勝敗は推して考ふれば、國の小なる者は、固より大なる者に敵すべからず、兵の寡き者は、固より多き者に敵すべからず力の弱きものは、固より强き者に敵すべからず、彼の鄒國は、豈に其の明鑑にあらずや、今や海內の地、方千里の大國九個あり、齊國の全土を集合して、僅に其の九分の一なる千里を有つに過ぎず、此の一個千里の國を以て、甲兵を興し怨を諸侯に構ひ、他の八個千里の衆國を服從せしめんと欲す、其の大小衆寡强弱の比例に於て何ぞ眇たる一小國の鄒を以て海內强大國の楚に抗敵すると異ならんや、王必らず大欲を成就せんと欲し玉へは、固より天下に王たるの本あり即ち其の力を恃まずして、其の德を修むべきなり、何ぞ其の本に反りて求め玉はざるや、

今王發政施仁使天下仕者皆欲立於王之朝耕者皆欲耕於王之野商賈皆欲藏於王之市行旅皆欲出於王之塗天下之欲疾其君者皆欲赴愬於王其若是孰能禦之

（解義）此節は上文の反本の意を承けて云ふ、重きは發政施仁の上にあり、下の五句は即ち此の一句より出づ、故に使天下云々の使字、緊接して、直に赴愬於王までを管到す、商賈皆欲藏於王之市　商賈は、朱註に行貨曰商居貨曰賈とあり賈は家に居りて物を賣る者、商は他處へ行きて貿易する者なり、藏は貨物を置き貯ふるなり、即ち市中に住居して營業するを云ふ、欲疾其君者云々　欲疾其君者とは、自國の君主が餘り暴虐なるを以て、手をつかせ困らせて腹慰をなさんと思へる人々を云ふ、赴愬於王とは、齊國に趣き宣王に其君の

罪を訴へ、懲戒せんことを願ふなり、

（通釋）謂ゆる反本とは何ぞや、亦唯仁政を行ふにあるのみ、今や大王誠に能く不忍の心を推して、先づ第一に國民に向ひ、善政を發し仁德を施し、其の自然の結果賢者を尊ひ俊才を用ふるを見て、天下の仕官を志す者をして、皆な均く仕官をなす以上は何んと大王の朝廷に立たんとを欲せしめ、稅歛を薄くし田宅に定制あるを見ては、天下の耕作をなす者をして、皆均く耕作をなす以上は、何卒大王の郊野に耕さんと欲せしめ、市稅に苛酷の誅求なくして、保護の厚きを見ては天下の商賈をして皆均く賣買をなす以上は何卒大王の市中に賣買をなさんと欲しめ、道路橋梁驛舍等の完備整頓せるを見ては、天下の旅人をして皆均く旅行をなす以上は、大王國中の道塗に出てんと欲せしめ、民を憫み暴を懲らし刑獄の公明なるを見ては、天下の民自國の君の殘虐にして、下を苦めるを惡みて腹慰の爲めに、手を突かせ困らせ遣らんと思ふ者は、皆均く外國へ持出たす以上は、大王に赴き愬へて公明正大の判決を仰かせんと欲せしむ、是れ大王の仁德は、別に何等の威力何等の術策を用ひずして、自然の結果、天下の各階級各種類を通して來り服するなり、苟に四海歸服

の盛なること此の如き時は、世間果して何者の力か、能く其の來歸を禁止防禦するを得んや、故に臣が前言の如く、其の本に反りて政を發し仁を施し玉へは、大王の謂ゆる大に欲する所の者は、別に思慮を費し、勞力を用ひて求めさるも、自然に彼れよりして來るなり、何そ必しも甲兵を興し怨を諸侯に搆ふが如き、至險至危の業をなし玉ふを要せんや、

王曰、吾惛不能進於是矣願夫子輔吾志明以教我我雖不敏請嘗試之。

（解義）吾惛不能云云　惛は昏と同し昏愚不明なるを云ふ是とは上節の發政施仁云々を指す、我雖不敏　不敏は不調法なる者宣王の謙辭

（通釋）宣王孟子の言を聽き、遂に感服して云へるには、拙者もと天性昏愚にして遠に先生の仰せらるゝ發政施仁の地に進むこと能はさるなりき、願くは自今以後夫子には、吾か一奮發して爲さんと欲する志を輔導し、其の及はさる所を啓發して、凡そ政は如何にして發すへき、仁は如何にして施すへきかを、明に以て我に敎へ玉へ、我は惛くして不敏なる者とは云へとも、兎にも角にも果して出來得るや否やを嘗試んと、

曰無恒産而有恒心者惟士爲能若民則無恒産因無恒心苟無恒心放辟邪侈無不爲已及陷於罪然後從而刑之是罔民也焉有仁人在位罔民而可爲也

（解義）無恒産而有恒心　恒産は平生一定せる産業なり、恒心は平生存在せる善心なり、惟士爲能　惟とは、僅に能くする意にて、能は耐へ得るなり、乃ち士なる者は、學問あり、名望あり、人に欽仰せられ、名教廉耻の重んずべきを知り、敢て不品行破廉耻の行をなさゞれども、もと恒産なき時は、日日の困窮に壓迫せられて、其苦節を守り百難を排除して、恒心を保持することは、亦決して容易の業にあらず、此れ僅に士にして然る後始めて耐へ得るなり、汎く何人に向ふては之を望むべきにあらず、　無恒産因無恒心　因の字深く玩味すべし、民の如きは恒産なきに因り而して後に惡をなすなり、乃ち民と雖も恒産あれは亦恒心あるの意を言外に含有す、蓋し恒産の恒心と極めて緊接なる關係あるを見るべし、　放辟邪侈　放は放蕩なり、辟は淫辟にて、「ひがみ」なり、邪は邪惡にて「よこしま」なり、侈は奢侈「をごり」なり、　是罔民也　朱註に罔猶羅網欺其不見而取之也とあり、乃ち網を用ひて鳥を取るが如く、だまし打ちにすること

（通釋）是に於て孟子乃ち曰く、仁政は先つ民を保するを急務となし、而して民を保するは、民の産業を制定するを以て第一着となせり、如何となれは、人は先つ第一に衣食の源を獲るに汲汲たる者なり、今や世に恒産なくして恒心ある者絶無と云ふにあらず、されとも此れ惟民中の秀てたる士君子にして始めて僅に苦節を守り恒心を保つに耐へ得へるなり、汎く一概に何人に向ふても望み得へきにはあらず、普通尋常の人民などに至りては、恒心と恒産とは、緊く互に關聯して離れす、固より恒産なけれは、因りて亦恒心もなきなり、苟に人として恒心なきときは、私情私欲を恣にし、凡そ放辟邪侈なる惡行は、惡行として爲さゞるなく、其の結果、皆法律に觸れ罪を犯すに至る、夫れ一國に人君として保民の責に任しながら、平日人民を放棄し教養することなく、其の法を犯し罪に陷るに及んで、然る後に始めて如何に世話をなすかと云へは、之を刑罰に處し各、其の罪を正たすに過きす、是れ全く人民の無智蒙昧なに付け入りて、彼の羅者が鳥の不意に乗して取るか如く、だまし打ちになすと同き仕向なり、仁德ある賢明の君主は、人民を保する能はさるを憂となす

へきに、焉そ我が國民をだまし打ちになすへき道理あらんや

是故明君制民之産必使仰足以事父母俯足以畜妻子樂歳終身飽凶年免於死亡然後驅而之善故民之從之也輕

（解釋）是故明君云云　是故の二字は、上節の恒産恒心互に關繫の重大なるを緊く承接して云へるなり、明君とは即ち上の仁人なり、均く人主を指すなれとも、其の人民を愛憐するよりして、仁人と云ひ、其の政法を行ふに、萬事に周到なるよりして、明君と云ふ、一齋翁曰く明君の明の字、宣王の吾惛の惛の字と隱然機鋒相對すと、　制民之産　制は區畫分授して、周密精詳なるを云ふ、乃ち下句の仰事俯畜と樂歳凶年の事と皆各〻其の宜きを得せしむるは、實に此の制の一字にあり、故に直ちに必使の二字を下たし下の四句を一貫せしむ、樂歳終身飽　樂歳は年穀豐樂の歳なり、終身飽は、樂歳の内、其の身飽食して以て終はるを云ふ、一説に終は周と通す、周身は頂より踵に至るまての全身を云ふ　然後驅而之善云云　驅とは、馬を追ひ立つるか如く、教育を以て民を囃し立て追ひ立て、善道に赴かしむ、即ち其恒心を自覺自認せしむるなり

從之也輕　輕とは力を費さず造作なきなり、俗に云へる尻輕に行くこと

（通釋）恒産の民生に無るべからざるや此の如く重大なることは、賢明なる人君は之を知れり、故に其の人民の産を制定するに當りて、必らす各自相當の田宅生産の富を授け、其の力にて能く仰いて上に對しては己が父母に奉事するに十分にして、俯して下に向ふては妻子を畜育するに、不自由なく、年穀豐樂なる歳の内は飽食して身を終はるべく、若し不幸にして饑饉凶歳に逢ふとも、亦平日の積貯あり、以て死亡の患を免るゝを得せしむるなり、然る後に教育學問の方法を以て鼓舞し奬勵して善に向はしむ、故に人民は一方に善に進むへき手引案内の便宜ありて、一方には係累衣食の心配なければ、其の善に從ふや亦甚た手輕くして造作もなきなり、即ち恒産あると同時に恒心ありて、忠君愛國の道は自然に行はるゝなり、

今也制民之産仰不足以事父母俯不足以畜妻子樂歳終身苦凶年不免於死亡此惟救死而恐不贍奚暇治禮義哉

（解義）今也制民之産　今也は上の明君に對して云ふ古の明君民の産を制する如く今の人主も亦民の産を制せさるにあらす但古の制産は人民の保護を主とす今は制産を名として其實は誅求厚歛を主とす　此惟救死云云　此と

は上の仰不足以事父母より以下を指して云ふ道理より云へば禮義固より生命より重んすべきも情勢より云へば生命ありて後に萬事爲すを得べし故に其生命の死を救ふこと禮義より急務となるなり、恐不贍とは間に合ひがたきを氣遣ふなり

（通釋）今の時と雖も人君亦民の爲めに產を制せざるにあらず但制產の主意は專ら上の利を圖るにありて下の不利を顧みず苛稅厚歛誅求の深刻なるより人民は仰きて尊長たる父母に事ふるに足らず俯して卑屬たる妻子を畜ふに足らず即ち豐樂の歲に遇とも、亦其の患を免れずして、終身苦しむのみ苟も凶年の不幸に遇へば、竟に飢餓困窮の末、死亡の事を逃れ得べきにあらず、此の如き情態なれば、禮義の重んすべきを知らざるにあらざるも、自から眼前の急を救ふに多忙にして、只如何にせは生活を得るかと氣遣ふ許なり是の時に當りて、人民をして禮義を治めしめんと欲するも、又奚そ其の餘暇あらんや

王欲行之則盡反其本矣

（解義）王欲行之　上文の請嘗試之の句に應じて云ふ、之とは即ち發政施仁云々を指す　盡反其本矣　其本とは朱注に據れは民に常產あらしむるは又、發政施仁の本にして、即ち下文の五畝之宅云々を云へるなり、此れ反本の意を再說して又一束を加へて下に制產の法を詳かにす、乃ち上を結び下を起すの文法たり、

（通釋）以上の如く發政施仁は、王天下の本にして民の恒產を制するは又發政施仁の本たり故に大王誠に仁政を行はんと欲すれば何ぞ更に其本に反りて先づ民の產を制し玉さるや即ち其の方法如何にして可なるかと云へば臣請ふ之を下に陳說せん

五畝之宅、樹之以桑、五十者可以衣帛矣、雞豚狗彘之畜無失其時、七十者可以食肉矣、百畝之田、勿奪其時、八口之家可以無飢矣、謹庠序之敎、申之以孝悌之義、頒白者不負戴於道路矣、老者衣帛食肉、黎民不飢不寒、然而不王者未之有也

（解義）五畝之宅　五畝は伊藤東涯は漢書に古者六尺爲步、步百爲畝、畝百爲夫（井田制度に一夫受くる田）とあるを引きて、步は方六尺にして、我が今の一坪なれ

ば、一畝は百坪にして、五畝は今の五百坪に相當せりと云へり、物徂徠の度量衡考には五畝は當今四百五十九歩有奇乃ち一段五畝九歩有奇とあり未だ孰か是なるを知らず五畝の宅は朱注に一夫所受二畝半在田二畝半在邑とあり此れ趙岐の舊註に基づき趙注は班固の食貨志に據りて解せし說なれども今は專ら邑中に在る宅地と解すべし此の說先儒多く之を辯す文長ければ略す　樹之以桑　其の牆下の隙地に桑を樹へて蠶事に供す　五十者可以衣帛　朱子は五十始衰非帛不煖未五十者不得衣也と云へり東漢の桓寬が鹽鐵論に古者庶人耄老而後衣絲其餘則麻枲而已故命曰布衣とあり絲は即ち帛にし麻枲は「アサ」と「ヲアサ」なり　雞豚狗彘　豚彘共に「ブタ」なれども小豕を豚と云ひ牡豕を彘と云ふ狗は犬なり但守狗獵狗豢狗の三種あり本文の狗は食料に供する豢狗を指す　無失其時　時は養育の時を云ふ朱子は孕字の時を失はす即ち禮記の月令にある孟春犧牲毋用牝の類を云ふとなせり　七十者可以食肉朱子は七十非肉不飽未七十者不得食也と云へども、少壯の人一概に肉を食ふを得ずとにはあらず、其の食するや時ありて、老者の如く常食とせざるを云ふなり　百畝之田　井田の法凡そ田を井字形に區劃し凡そ九區となす每區の面積百畝にして中央の一百畝を公田とし餘を私田となす而して八家各〻一區百畝を受け耕作して自から供給す又各〻力を協はせて公田を耕し其の收穫を以て公租となす故に百畝之田と云ふ度量考に據れば百畝は我か三町六畝四歩有奇とあり八口之家可以無飢矣　八口之家とは人口八人の家にて、大概通常農家の意となして解すべし、孟子萬章下篇に上農夫食九人上次食八人中食七人中次食六人下食五人とありて、乃ち均く一夫一婦にて百畝の田を受くれども、糞種培漑の殊異あるより、各亦た收穫の利に多寡の同からざるあれば斯の如く人口を養ふにも大小あり、謹庠序之敎　庠序は學校なり殷代には序と云ひ周代には序と云ふ孟子滕文公上篇に其義を解釋して庠者養也庠者射也と云へり乃ち學校の敎育にて老人を養ふ禮を重んずるより庠と名づけ射藝を敎ふる意よりして序と名つけしが如し　申之以孝弟之義　申とは丁寧反覆して一度二度のみならざる義なり善く父母に事ふるを孝と云ひ善く兄長に事ふるを弟と云ふ亦悌に作る敎はもと五倫を兼ぬれども而して孝弟は尤も重し故に特に孝弟之義と云ふ義とは都合宜き行ひ方を謂ふ陸稼書曰く謹字尤當

玩索蓋教術一誤而使俗失世敗則貽禍在人材士習一墮而使生心害政則貽害在家國と　頒白者不負戴　頒は斑と同じ頒白は黒髪に白髪相斑れる老人を云ふ負戴は荷物を或は頭に戴き或は背に負ふなり人民禮儀を知り風俗善良にして親を愛し長を敬して少者は老者を慰め敬ひ代りて道路に負戴の勞を執るを云ふ　黎民不飢　黎民は朱子解して黎黒也黎民黒髪之人猶秦言黔首也とあり又黎は庶也黎民庶民也との説もあり、不飢不寒とは少壯の人常に帛を被り肉を食ふことを得さるも、亦各相當の衣食を得て、飢寒に至らさるなり、

（通釋）

制産の法如何にして可なるか要するに田里畜牧の制を立て吾が人民を保んするに外ならず先づ一夫に五畝の宅を授け其居住を保んし又其の墻下に桑樹を植へしめは養蠶の資生して人民の年五十に至りて血氣始めて衰へる者は爲めに輕煖の帛を衣るを得て保んせらるへし一家に雞豚狗彘の畜を敎へ且其養育の時を失ひ誤ることなくば肉食の料具はりて更に老ひて七十に至り食慾減退を感ずる者は爲めに軟美の食を食ふを得て保んせらるべし一家の主人たる一夫一婦に百畝の田を授けて、耕作收獲の時節に妄に工役其他の爲めに徵發招集して農事の妨害をなさゞれば穀粟の缺乏を告ぐるなくして人民八口の家は相當の食を得て飢餓の患なかるべくして保んぜらるべし衣食の源既に開け生活後顧の憂なければ乃ち驅りて善道に之かしめ庠序の小學を設けて之を敎育し又孝弟の大義を以て本となして反覆丁寧に曉諭して人道の眞相を知らしめば人民の善に從ふや手輕くして禮義徧く國中に行はれ風俗敦厚にして少者は老者の勞に代りて斑白の者は道路に負戴せずして保んせらるべし夫れ老者は帛を衣て肉を食ひ黎民は飢へず寒へざれば是れ民の爲めに產を制して老壯幼弱咸く各に其所を得るなり乃ち天下を治むることの易きは得て宛も物を掌上に運らすが如く何の譯もなき次第なり然り而して天下に王たらざる者は、從來未だ之あらざるなり彼の大王が盛に歆羨崇拜し玉へる齊桓晉文の覇業の如きは區々たる事にて何ぞ言ふに足らんや

餘論

孟子の文、多く長篇にして、論語の短章居多なるが如くならす、且、本書は予既に前年其の性善説の解釋を試みことあれは、彼の孟子の特色として後人の推稱する養浩

然之氣章外數章を含くは、遺憾なしとせざれとも、今回の選釋は此の齊王問答の一章に止め、更に別書に向ふて解釋をなさん而して今聊か孟子の本領主義に就きて一言を述へんに、孟子は嘗て乃吾所願則學孔子矣(公孫丑下篇)と、自から告白するが如く、其宗旨の淵源や、孔子に資すること明々白々復疑點を置くの餘地なきなり、蓋孔子の根本主義は、一の仁にして、仁は人我對待して相愛し相扶け、以て人羣を經紀する者なり、但其の單純に仁のみを說くときは、或は世人の誤解を來たし、彼の論語に宰我の問を載せて仁者雖告之曰井有仁焉其從之也とあるが如く、世の人或は仁人は如何なる愚擧も、苟も人を救濟するに於ては辭退せさる者となし、爲めに種々の弊害滋生する恐あれは、論語中孔子は多くは智を以て仁と對稱して說けり、故に其の宰我に答ふるや亦曰く、何謂其然也、君子可逝也不可陷也可欺也不可罔也と、君子をして逝ひて井中の人を救はしむることは得へきも、之を井中に陷るゝこと能はす、欺くに道を以てすへきも、不當の理を以て昧ますへからす、是れ君子は仁あると同時に、智あればなり、若し然らすして、徒に仁のみを志さして更に事體の輕重大小を辨せされは、乃ち謂ゆる宋襄の仁にして唯天下の笑となるのみ、君子は取らす、是れ孟子が孔子の後を承け、更に義を以て仁と對稱して、仁義の說ある所以なり、宋子仁義を解釋して曰く、仁者心之德愛之理、義者心之制事之宜と、心之德愛之理は予既に論語に於て之を說けり、心之制事之宜とは、心に裁制して事を行ふに宜きを得るを云へるにて、孟子も羞惡之心義之端也(公孫丑上篇)と云へり、蓋智の以て是非を辨別するに止らず尙ほ之を實現する行爲上の良否に就て義と云へるなり、今且本章に依據して述べんに、齊王の不忍觳觫の一念は、乃ち天賦固有の仁が、外物に感じて發動せる惻隱の良心なり、若し此の念をして保民の上に發動せしめば即ち孟子の述ぶる所の如く儼然たる王政となるなり、唯彼れは其の私欲に蔽錮せられて然ること能はす、遂に謂ゆる今恩及於禽獸而功不至於百姓の大顚倒を致して自から覺らざるなり、誠に其の初に於て天良の本心を察識して、不忍の政を親近より疏遠に及ぼすと、文王の刑于寡妻及于兄弟以御家邦と云へるが如くせしめば、乃ち是れ義なり孟子の意齊王の是の如くならんことを欲して止まず、是を以て其の齊王に對するや、開口一番に以羊易牛の談を借り或は問ひ或は答へ反覆說き來り說き去り一難一解檎縱互に用ゐて、王に不忍の心あるを確然自覺せしめ然る後又其の善く發動實行の序あることを知らしめんが爲めに、又先づ其の行爲顚倒の大病根たる私欲を探求抉出して、其の事の徒に勞して功なきに止らす、必らす後日の大災あ

ることを述べて、迷夢を警覺し、悚然として懼るゝことあらしめると共に、一方には善く不忍の心を政事上に擴充すれば天下の人民皆來りて王の朝に立ち王の野に耕し王の塗に出て王に赴き愬へんとする事を以て躍々たる歆羨の心を誘發して、專ら王道に志を傾けんことを勸告せり、是に於て齊王欣然として其心動き、孟子の敎を受けんことを請へり、乃ち復其の仁義立說の本旨に回りて先づ仁を說き仁人位に在らば民を罔みするに忍びざるの事を以て、其の天賦の良心を發し、後に義を論じて、明君の民產を制すると今時の人民を虐するとを比較し、其の制產敎養の王政大要たるべきを以て結纔となせるなり、孟子他日又曰く、人皆有不忍人之心先王有不忍人之心斯有不忍人之政矣、以不忍人之心行不忍人之政治天下可運之掌上(公孫丑下篇)と、亦此章と互に相發明すべし、而して孟子の性善說、約して云へば、蓋亦此の意に外ならざるなり、孟子の平生把持せる主義、以上の如くなれば、其の孔子を學びて孔子の正統を得たるは論なきが如くなれども、其の人物言論の孔子に比するに至りては、程子の孟子有些英氣才有英氣便有圭角と云ひ、但又以孔子之言比之且如冰與水精非不光比之玉自是有溫潤含蓄氣象無許多光耀也と評せしは、洵に一聖一賢の定案たり、されば世の孟子を非議する者現に周室衰へたりと雖も未だ全く亡びざるに拘らず、孟子の齊梁の君に王道を行ふべきを勸告したるは、王室を無視せる罪惡にして寔に君臣の大義を敗壞し、孔子の春秋尊王の旨と、背馳啻ならざるを咎むれども、是れ其の說や元來未だ深く支那立君の本旨に達せず、且孔子の時勢逈然として大に同からざるを察せざる者にして、初めより與に言ふに足らざるなり、但孟子の言、往々時弊を救ふに急にして、謂ゆる圭角あり光耀ありて、孔子の溫潤含蓄の深きに如かざるは、天性の分に由ると雖も、亦賢者の爲めに其過を諱むこと能はざる所なり、尙ほ孟子全書の解釋と、共に他日を俟ちて詳論せん、

大學

大學は中庸と共に、もと西漢の戴聖(世に小戴と稱す)が戴德(大戴と稱す)の所記を刪錄せるを東漢の馬融が又補輯したる禮記と云へる書中の一篇にして其の名義は、古代大學に於て人を敎へ學を修むる大道を說述せしを以て大學と名けたりと云ひ、或は鄭玄が大學者以其記博學可以爲政也とあるに基き、其の述ぶる所大人君子が己を修め人を治むる敎なるを以て尊尙して大學と云へるなりとの說あり、其他衆說あれども、今は之を略して朱子に從ひ前說を取らん、本文の作者は未だ何人の手に成りしかを確知すること能はず、唐の孔穎達が禮記注疏に、鄭康成の目錄陸德明の釋文を引きて、但孔子の孫子思中庸を作りしを云へとも、大學に至りては何人の作なるを明言せず、史記及び孔叢子の書も亦同く然り、東漢の賈逵は孔伋(子思)窮居於宋懼家學不明作大學以經之中庸以緯之と云へども、他書に其事の證憑とすべきなし大學中庸二篇共に久く禮記書中にありて、唐代以前未だ別に表章する者あらず、(中庸は梁の武帝其他の著釋あり)宋の仁宗天聖八年、始めて、大學を以て新進士王拱辰等に賜ひし事、史上に見ゆれは、蓋此の前後より稍く世に尊重せられしならん、程顥(明道先生)程頤(伊川先生)の兄弟に至りて、大學孔子之遺書而初學入德之門也、於今可見古人爲學次第者、獨賴此篇之存而論孟次之學者必由是而學焉則庶乎其不差矣と云ひ以て世に推奬して學者必讀の書となせり、朱子出るに及んで、論語孟子中庸に配し、定めて四書とし、又自から諸說を融會し、之が註釋を作り、大學章句と名づけ、且其序を作りて(上略)若曲禮少儀內則(三篇共に禮記にあり)弟子職(管子にあり)諸篇固小學之支流而此篇(大學)者則因小學之成功以著大學之明法外有以極其規模之大而內有以盡其節目之詳者也三千之徒、蓋莫不聞其說而曾氏之傳獨得其宗於是作爲傳義以發其意と云ひ、盛に大學の要書たるを皷吹し、自から斷じて孔門の曾子が孔子の訓言を敷衍述說して作れるとなせり、又全篇を經一章傳十章に分ち、經を孔子の言とし傳を曾子の言となし、舊本大學には亡佚錯簡ありとし、補傳を作り、文次を先後變更せしことあり、此より以後世に、古本大學と新注大學の別あり、鄭玄が注解の禮記中にある大學を單行本とせるを古本大學と稱し、朱子が章句の大學を新注大學と號す、朱子學派以外は、多く全く古本を用ゐ、又自から別に解釋をなし文章を更定する者もあり、注釋の書頗る衆し、甲是乙非、互に所見を執りて今に決する所あらず、蓋し之を要するに大學の著者、果して誰たるかは、今別に深く穿鑿をなさいるも可なり、其の言にして竟に取るべきあらば、何人の著なるを問はず、用ゐて以

て經典となし、心身修養の資とし、何の不可か之あらん、朱子曰く大學是學ぶ綱目、先讀大學立定綱領他書皆雜說在裏許通得大學了去看他經方見得此是格物致知、事此是誠意正心、事此是脩身、事此是齊家治國平天下、事と今姑く朱子の定めたる章句本に遵ひ解釋をなさん但時に他本異說を取捨して講述し又參考として別義を掲ぐる者あり讀者之を諒せよ

大學之道、在明明德、在親民、在止於至善

（總旨）經文通章先つ明德新民止於至善の三大綱領を掲げ、次に格物致知誠意正心修身齊家治國平天下の八條目を述べ、以て學問經世の一致すべきを明にせり、乃ち前に論語に於て講述せし孔子の根本主義なる立己立人達己達人の仁其物の全體大用、蓋亦此に外ならざるなり、而して通章又二大段七小節に分ち、前段三節は、總て綱領を叙し、至善に止るの由を推言し、其の先後を知るべきを以て結ぶ、後段四節は、詳に條目を論し、復其次序の紊るべからざるを由說し、修身の凡ての本たるを以て結び、人の學問の要を知るべきを示せり、要するに大學の敎は人道の根本義を敎ふる學なるを云へるなり、

（解義）大學之道　大學の敎へ方なり、道の字宜く、輕く看るべき方法を云ふ　在明

明道　在とは其の所在を確示する辭、乃ち此處にありて他處にあらざるの意なり明明德とは上の明は動詞にて明になすなり、下の明は形容詞にて人性の善にして、昏暗ならざるを意味して明德と云へり、德とは凡そ人自から己れが身に具有して、寸毫も外に假らざるを德と云ふ、故に韓退之が原道に固有し居れば、當に自から之を確認して擴充し接續するが、大學の第一綱領たるを云ふ、在親民親の字朱子は程子の說に從ひ、當に新に作るべしとなせり、王陽明は必らしも改めず、且親民と云へば、本書大學に民之所好好之民之所惡惡之此之謂民之父母と云へるが如く、又孟子に百姓不親舜使契爲司徒敬敷五敎とあるが如く、敎養の二意を兼ぬれども、新民と云へば、單に敎の一義に偏了すと、傳習錄に論せり、然れども大學は、もと敎學を說くの書にて、新民に作れば乃ち上句の明明德は自新を云ひ、本句の新民は、天下の人をして其の明德を明にせしむる義となり、又後文にも朱子の言の如く、苟日新とあり、作新民などの語あれば、今朱說に從ふて新民となし說かん、新とは其舊を革むる義にして、人民舊來の染汚を去りて、向上進步せしむるなり是れ大學第

二の綱領たるを云ふ、乃ち明德はもと凡そ人皆同く具有する者にして、我一人の得て私しすべきにあらず、故に廣く推して以て人に及ぼすなり、謂ゆる仁者、己欲立而立人、己欲達而達人の敎なり、在止於至善　止とは必らず其の目的地に至りて遷動せざるの謂なり、至善とは善の至極にして、此より以上の善なきを云ふ、朱子は解して事理當然之理と云へり、乃ち明德も新民も皆當に必らず至善の地に達せざれば已まず、既に達すれば、必らず確守して復、他に遷動せざるを敎ふ、是れ大學第三の綱領なり、蓋單に明明德のみなるときは、其の弊老莊の獨善に陷り易く、新民のみなるときは管晏の功利に流れ易くして、均く立己立人の學にあらず又明德新民の二者具備するも、其心術公明正大にあらざれば、又俱に止於至善と謂ふべからず、仕翼聖曰く、三項蟬聯而下何以板板用三個在字起手止見得明德不見新民便狹止見得明新不見止至善便卑と、亦以て文法を見るべし、

（通釋）

大學は、古昔三代殊に周代の盛なる時、大人君子に己を修め人を治る道を敎へ習はする國中唯一の學校なるが、其の敎へ方は、大要三綱領に歸するを得べし、而し其の第一は明德を明にするに在り乃ち人を治むるに先ち己を修むる敎なり蓋し人の人として生るゝと共に、天賦の良性あり、純善純美にして光明正大なる者なり、乃ち之を形容して明德と名づく、此の明德肉體上の私欲に蔽はれて固有の光輝を見はすことを得ざるあり、爲めに萬事萬物に應じて十分なる活動を奏する能はず故に先づ第一に工夫を凝らし機會を失はす光明正大に復し益〻擴充し又繼續し又已まず以て時として明ならざることなからしむるを敎ふ其第二は民を新にするにあり、乃ち己を修むると共に人を治むる敎なり、蓋明德はもと己れ一人の私有にあらずして苟も人たる者は皆均く天より賦予せられたる通有性なり、但君たり師たる者ありて政敎を設けて治めざれば人人天賦の明德も種々なる外間の誘惑迷溺により惡弊陋習に染汚せられ亦爲めに光明正大の用を失ひて竟に救ふべからざるに至る、故に大人君子は己れの明德を推して衆民に及ぼし舊來の汚染を一新革除し之か向上進歩の徑路を開示し共に明德の民たるを務むへきを敎ふ其の第三は至善にして弊なきを期するを敎ふ、天下の事物何事何物として、豈に弊なき者あらんや但務めて其の弊なきを期すれは、弊亦或は賴りて免るゝを得べし、蓋明德新民は己を立て人を立て己を達し人を達す

る至道要敎なれとも、或は明德のみに偏して、新民を思はされは、其の弊徒に自愛自利の私に陷り易し、或は新民のみに僻して、明德を顧みされは、其の弊妄に功名に熱中し、權謀術數の姦に流れ易し、又明德新民の二者共に兼ね爲すも、其の心術之を假りて私利を營むに汲汲たれは、是れ正心誠意表裏一致の學にあらす、故に大人君子は當に此の諸弊を打破除却し以て事物當然の道理に達せされは已ます、既に達すれは謹み守りて失墜し若くは遷動せさるを務むへきを敎ふ、以上三物、實に大學人を敎ふる綱領たり、

知止而后有定定而后能靜、靜而后能安安而后能慮慮而后能得

（解義）此の節は、上文の在止於至善の句を直ちに承けて、明德新民の至善に止まるに順序あることを示せり、知止而后有定　止とは朱子は所當止之地即至善之所在也と云へり、乃ち至極に落ち附くべき場處を云ふ、有定とは志すこと確と極りて動搖せざることがあるなり、天下の事物に於て、皆至極なる善き落ち附くべき場處を知れは、我が志嚮自然に確と極りて、疑ひ惑さるこあり、有とは、もと無に對して云へる辭にて、從來無りし者が、今正に有る義なり、乃ち定まること始めに出來得るなり、而后は后は後と同し、其の功效の次第あるを示すなり、下の四句皆同し、定而后能靜　靜とは謂心不妄動と朱子の章句にあれども、朱子文集の答汪長孺書に據れは、朱子は後自から之を改めて謂心不外馳となせり、詰り意義に於て差したる大相異なけれとも、不外馳と云へは、心が常に腔子裏にあり、即ち俗に云へは氣が外に散らぬことにて、靜の字の義には切實なるを覺ふ、志嚮が定まりて後に氣が散らずして靜かなることが出來得るなり、能とは耐ふる義にて凡そ其の力にて出來得るを能と云ふ、靜而后能安　安とは安樂の意にて、靜なる時は身の居り場處の如何に拘らす、何つにても心が樂なるを云ふ、陶淵明の詩に結廬在人境而無車馬喧問君何能爾心遠地自偏とあり、亦善く此間の消息を傳ふる者と謂ふへし、安而后能慮　慮とは物事を處置すること精緻詳當にして粗雜錯亂せさるなり、心身常に靜安なる時は、從容閑暇にして、物事に當りても、急遽狼狽せすして、心配り取り計らひ行き屆きて聊も扳かりなきを云ふ、慮而后能得得とは、朱子は謂得其所止と云へり初めの知止は、落ち附くへき場處を道理上にて承知するを云へとも、能得に至りては其間に定靜安慮の節目工夫を經て、日用事物を處置するに方りて、確と其の至極に善き落ち附き場處を、我

か所得とするを云ふ即ち萬事何に事も皆至善に叶ふに至るなり、

（通釋）明德新民至善に止まるは、何の方法によりて得るか、先つ其の止るべき地、即ち至善の所在を確と知りて突き留むれば、志嚮自から定まることあり、志嚮定り而て後其の心外物に移されすして、靜かなることを能くす、靜かにして而て後身の境遇如何なる變化に逢ふも、其心は身に隨ひて安らかなるを能くす、安らかにして而て後多くの物事に當りて、思慮の精詳允當なるを能くす、慮りて而て後至善の地確に我か手に入りて所得とするを能くす、右の如く功效の次第相因りて生ずる者なれは、大學に學ふ者苟に明德新民至極に止まるを欲すれは、必らす先つ其の如何なる場處か是れ至善所在の地にして、其の落ち附くへき處なるかを確と突き留めて知ることを務むべし、左すれは志嚮定るありて、能く靜能く安く能く慮る能く得と、功效次第に見はれて遂に其の目的を達するを得べし、

物有本末事有終始知所先後則近道矣

（解釋）本節は道の順序あるを結ひ言ふて人の當に事に從ふへきを見す、而して知所先後の句尤も重し、物有本末　形體ありて見認むへき者を物と謂ふ明德

新民一は己にして一は人に關し皆各一物たり、本末は樹木の本と末とあるか如く明德新民の兩物にして內外相對するより云ふ、事有終始　有は固有の有にして物事の中自然順序ありて混亂すへからさるを示す、已に下の先後の意を含む、事は工夫力を用ゐて働くより事と謂ふ、知止より能得に至るまて、通して一事たり、終始は始めと終とにて、知止と能得と其の事先後次第の序あるを云ふ知所先後云云　本と始は先となし、末と終とは後となすへきを知り、先とすべきを先つ行ひ、後とすべきを後に行へは、本よりして末に及ひ、始めより終に至りて、大學の道に相近きなり、乃ち知所先後は、未た直に以て道となすべからざるも、其の進爲に序あり、工夫切實にして道に至ることと遠からされは、故に近と云へり、首句の物有本末は大學之道云云の首節を結ひ、次句の事有終始は知止云々の次節を結ひ、知所先後云々の句は兩句を合せ結ふ、

（通釋）明德新民は一は己に關し一は人に關して兩物なり、而して明德は已に在れは即ち本たり、新民は人に在れは即ち末たり、是れ天然の理ありて人爲の力にあらす、乃ち物に自から此の本末あるなり、知止能得は何れも至善の道に

就てなれば、一事なり、即ち知るとは行ふの始めにして行ふとは知るの終なり是れ又人爲の力にあらす、乃ち一の事に自から此の終始あるなり、而して本と始は先にすへく末と終とは後にすへきは當然の理にして明白なれども、但學問の際或は誤りて混亂逆倒し易くして勞は益〻勞して道は益〻相遠さかるなり故に學者は其の先んすへきを知りて先きに爲し、後にすへきを知りて後に爲さば、則ち本より末に及ひ始より終に至り、其の大學の道に於けるや、未た直ちに至れりとは云ひ難きも、此に由りて次第に進歩すれは道と相距ること近くして、遂には至ることを得へきなり、

古之欲明明德於天下者先治其國欲治其國者先齊其家欲齊其家者先修其身欲修其身者先正其心欲正其心者先誠其意欲誠其意者先致其知致知在格物

（解義）此より以下を第二段となす、本節は綱領中の條目を遞詳にして、其の先んする所を審にすへきを示す、古之欲明明德於天下　古代の己か明德を天下に明にせんと欲する者を云ふ、下文の例を以て推せは、もと古之欲平天下者と云へきを、今右の如く云へるは、平天下、は乃ち新民のことにして、新民は又もと己の明德を人に推し及ほせし結果なれは、其の原因に溯りて欲明明德於天下と云ひ以て明德新民の一源一致なるを示せるなり、朱子は此の句を解して使天下之人皆有以明其明德也と云へり、是れ其の結果に就きて意解したる者にて、以て直ちに本句の文義を釋して云ふにあらす、乃ち文義に據りて云へは明明德於天下とは、己か明德を天下に向ふて明かにするなり、先治其國　其國は汎く指して云ふ某國と確定して云ふにあらす、治國とは國に君臣民衆あり、互に群居して自然に事物亂れ易けれは必らす條敎を立て法令を施し以て之を治むるなり、先齊其家　齊とは一家内に親疎長幼の眷屬ありて、日に同居して、其情諧ひがたきを、必らす倫理を正たし、恩義を篤ふして、以て之を齊ふるなり、齊は比等の義にて、其の尊卑大小の順序に從ひ各自相當の禮を定め、秩然として混淆の弊なからしむるなり、先脩其身　脩は修の借字なり、もと修は拭治文飾の義にて、脩は脩脯にて乾肉なり、二者各意義同からされども古代經典には互に假借して同義となせり人の性はもと善なれども初めは玉の磨かざると同く未た直ちに純美となすべからす禮記

に直情徑行者、野蠻之道也とありて全く吾が心の思ふに隨ひ露骨圭角に物事を行ふは如何に正直を尙ふとは云へど野蠻の道として君子は取らす故に其の身を謹みて禮義を守り事物に應接し處置するに於て吾が好惡愛憎に任して依怙偏頗の行あるべからす乃ち從來の垢染みたる質を拭治して更に文飾を加ふるが如きよりして脩身と云へるなり、先正其心　正とは不正を正たすの義にて、心が事物に感應するに方りて、喜怒憂懼の熱情に驅らるゝことなく正當なる考慮を爲すを云ふ、先誠其意　意とは朱註に心之所發也とあり「コヽロバセ」と譯す、心の起り出つる處、凡そ念慮の類皆是なり誠とは充實して寸毫の闕け目なきなり、人の性はもと善良なるも、形氣の私欲間りて、善性の量充實ならす、闕け目あるより理性欲情と、互に鬪ふて竟に邪路に迷ひ陷りて救ふこと能はさるに至るなり、故に其の物事に當りて發する念慮を充實にして、邪欲をして間に乘して入り攪亂することなからしむ、此れを誠其意と云ふなり、心は意の本體にして、意は心の作用なれは、心は譬へは湛へる水の如く、意は水面に活動せる波の如し、水を澄清せんと欲すれは、先つ波を靜穩にするに如かす、是れ誠意が正心より先つ所以なり、乃ち其の工夫上に於て先後を別つものと知るべし、先致其知　致とは朱子は推極也、知猶識也、推極吾之知識欲其所知無不盡也と註せり即ち明德の靈覺たる心の知識は、もと事物を知らさる理はなきも、天生の儘にして明にせざれは、其の知識開けず故に工夫を凝らして、其の既に知る所より未た知らさる所へ力の有ん限り推し致して、知識全體の量を極はめ、天下事物の理に對して知り盡さゞすと云ふこと無らしむるなり、致知在格物　朱註格至也物猶事也窮至事物之理欲其極處無不至也とあり物と事とは前に辯せしが如く、物は意識すへき氣象形體等に就て云ひ、事は活動せる仕事を指して云へども、仕事は物ありて後に出來得る者にして、物を云へは事は已に其の中に含み有ることなれは、事と云はすして物と云へるなり、格物とは物事の道理精粗表裏の差あれとも、皆各一定の極まれる所あり、物事に就て道理を究はむる者、毎事毎物其の道理の極まれる處に極はめ至たることを云へり、要するに事物の道理は、徹頭徹尾一致せる者にして、物にある道理と心に知る道理もと一致なり、故に心の知識物の道理を極むるにより開くると共に、物の道理も、亦心の知識の開くるに隨ふて見はるなり、故に吾が知を致すことは、物の道

理を窮はめて極處に至るにありと云ふ、但格知とは、知識の全體を端より端まで極はめ盡すことにて、格物とは一事一物に就ゐて、窮はめ積むことなり、乃ち窮理の多きを累るに從ひ、知識の光明を放つこと益〻大なり、

（通釋）大學の道明德新民止於至善の三綱領は、上に掲がけし如く、又止於至善に進み入るに順序あること前節の如くなるが、今更に明德新民に就ゐて詳言せんに、明德新民は、もと名目上は二者なれども、事實は緊接に關聯して離るべきにあらず乃ち新民とは、吾が明にせる明德を推して天下に及ぼすに過ぎず、立己立人達己達人の仁其物が本體となりて、其動作を事物上に見はせるなり、故に今や明德新民を混一して明明德於天下と云はん扨て其の明德を明にするは、又八の條目ありて、以て逐節工夫を凝し近より遠に及ぼし親より疏に及ぼし進むなり、先づ其の條目を根本に溯りて云へば、乃ち古の明德を天下に明にして新民の效果を收めんとする者は、天下の本は、一國あれば、必らず先づ其の國を治む、國の本は一家にあれば、必らず先づ其の家を齊ふ、一家の本は一身にあれば必らず先づ其の身を脩む、身の動作進退は一心に由れば、身を脩むるには必ず先づ其の心を正くす、心は無形にして遽に求むべからず、意は心の發動する處なれば、意を誠實にして純善ならしめば、心亦隨ふて純善となる、故に其の心を正くせんと欲すれば、必らず先づ其の意を誠實にす、されども善を善とし惡を惡とする識別の明なければ、其の意の誠實なるも眞正の效能なきなり、故に其意を誠にせんと欲すれば、必らず先づ其の知識を致し極はむ、知を致し極むるは如何なる方法によるかと云へば乃ち天地の本に溯り見れば人と物との道理は一致しあれば事々物々にある道理に即きて、其の然る所以の者を窮め盡くすときは、心にある知識も因て益〻開けて、遂には全體の知識を推し極むることを得るなり、

物格而後知至知至而后意誠意誠而后心正心正而后身修身修而后家齊家齊而后國治國治而后天下平

（解義）本節は前節を覆解して其の後にする所を明にせり、句句而後の字を注意し漫過すること勿れ、以て前節の如く古人が必らず所先あるを領得するを要す、物格而後知至　朱子は物格者物理之極處無不到也知至者吾心之知無不盡也と云へり、乃ち前節の致知左格物とは、吾が全體の知識を盡さんとすれ

ば、事々物々にある至極の道理を窮め到るに在りと云へる義なるが、本章は物格而后知至は其工夫を積みし結果、事々物々の道理窮め到りて、而て後に吾が全體の知識、亦推して盡さゞるなきを云ふ、知至而后至心正　朱子は知既盡則意可得而實矣意既實則心可得而正矣と云へり、乃ち吾が心の知識既に推し盡して全く明かなれば、善惡是非の判斷、毫も謬ることなくして、善を主とし是に遵ふの念慮一致充實して瑣少の闕點なし、而て後に其の心、乃ち邪惡に傾くなく正きことを得べし、心正而后身脩　以下上文の例を逐ふて解し去るべし、別に絮說を要せざれば、今之を略す、朱子は修身以上明明德之事也、齊家以下新民之事也物格知至則知所止矣意誠以下則皆得所止之序也と云へり、乃ち修身より溯りて、正心誠意致知に至るまでは、皆何れも己が自修して、益〻其の精密なる工夫を推し極むるものなれば、首節の綱領中にある明明德の範圍に屬す、齊家より下りて治國平天下に至るまでは、皆何れも他人を治めて親より疏に推し及ぼし其の普及を極むる工夫なれば、新民の範圍に屬す、而して能く此の明德新民に屬せる工夫を得るは物格り知至りて止まる所を知りし結果なり、若し吾が心の知識明かならざれば、何を以て能く此に至らんや、されども意誠より以下、能く次第を逐ふて秩序的に進行せざれば、假令物格り知至るとも、亦同く止まる所を得ざるなり、

（通釋）前節に欲明明德於天下者先治其國欲治其國者先齊其家と述ぶる如く、天下の事に先たちて其の國を治むべしとし而後に家身心意と次第に溯りて、致知格物を以て第一着となすは何ぞや乃ち知識は萬事萬行の基礎にして、知識を明にするは、事物の至極せる道理を研き明かにせざれば、事物の善惡是非何ぞ能く辨別するを得んや而して格物は事物の理を窮到して致知は知識を推し極めて明かにするを謂ふなれば、故に物格り而して後に知至ると云ふ、右の如く知識既に極めて明かなれば、意念は純然誠實堅固にして、些少の寸隙瞬間の間斷なければ、心の据り方正くして偏傾僻側の患なし、而て後に外に見はるゝ行動一切各其の宜きに叶ひ、身脩りて一家の模範となり、一家の秩序宜く相齊ひ而て後に親しきより疏に及びて一國の人々之に感化し、而して後に近きより遠きに及びて、天下の億兆皆各平かなるを得べきなり

（參考）格物致知の說は、古來學者の議論甚だ衆く、後世學術の分岐點とも稱すべき處なれば、精密に解說するは到底數葉紙面の能く載する所にあらず、且其說多端に

渉りて、反て讀者の惑を滋すこと多ければ、今は少く最も著しき二三說を揭げて參考に備へん、

(一) 漢の鄭玄は格、來也物、猶事也、其知於善深則來善物、其知於惡深則來惡物、言事緣人所好來也、此致或爲至と云へり、此れ格を來と解して、其の學習して曉り知ること、善に於て深ければ、因りて善物を來たす、惡に於て深ければ因りて惡物を來たす、善物惡物皆各人の好む所に緣りて來る者なるを言ふ、乃ち格物とは誠意正心脩身齊家治國平天下の效驗として、太平祥端の物(麟鳳龜龍の類見れ出づるを云へるなれば、故に他句は正心先誠其意とあるが如く皆先の字を用ふれども、獨り致知在格物となして、先の字に代ふるに在の字を以てせしなりと、淸の宋翔鳳が大學古義に云へり、是れ致知格物を解釋せる最古の說なり、

(二) 朱子は致、推極也知、猶識也、推極吾之知識、欲其所知無不盡也格、至也物、猶事也窮、至事物之理、欲其極處無不到也と云へり是れ既に前に解釋したれば、今別に細說せず、但朱子は又、格物とは窮理の謂なるに關せず、大學は窮理と言はずして格物と云へるは徒に漠たる空理に騁せずして能く事物上に就き實驗理會すれば、方に道の實體を認め得べしと云へり、而して格物是物物上窮其理致知是吾心無所不知格物是零細說、致知是全體說と云へるを觀れば、格物は演繹的知識を廣めて致知は綜合的知識を高むることとなるを知るべし、

(三) 王陽明は致者、至也致知云者、非若後儒(朱子を云ふ)所謂充廣其知識之謂也致吾心之良知耳、然欲致其良知亦豈影響恍惚而懸空無實之謂乎是必實有其事矣故致知必在於格物、物者事也凡意之所發必有其事意所在之事謂之物格者正也正其不正以歸於正之謂也正其不正者去惡之謂也歸於正者爲善之謂也夫是之謂格書(書經堯典)言格于上下格于文祖格其非心格物之格實兼其義(至ると正たすと)也と云へり、是れ致を至ると解し、格を正すと解し、又、至るの義を兼該すと解し、知を、良知(天性に具はれる善良なる知慧孟子に見ふ)と解し物を事と解せし者なり、乃ち自身の良知を活働せんには先づ實際的事物に對する觀念を正くして、其の邪念を去りて善念に歸せば、吾が良知の働きや虧缺障蔽あることなくして、其の至極の妙用を盡くすこと得て、自から其の心に快くして、復た餘憾なし、然る後意念の發するや始めて自ら欺くなくし

て、表裏内外皆一にして誠となるべしと云へるなり、陽明又曰く無心外之理、無心外之物、中庸言不誠無物、大學明德之功、只是箇誠意、誠意之功、只是箇格物と、即ち物とは彼れが傳習錄に意之所在便是物と云へるが如く、意念の嚮へる事を指して物と云ふなれば、朱子が天下の事々物々に就きて其の至理を窮むるを格物となせしは徒に心志を外間に馳せ支離煩雜にして爲學の要を得さる者となせり

右の外、宋司馬溫公は格扞也と云ひ張横渠は格去也と云ひ清の劉阮は物物欲也と云ひ、俱に格物を私欲を去る義となせり、我が邦物徂徠は、物とは聖人が制作せる道(徂徠の宿論は道は天然に存するにあらず聖人の制作物となせり)の一節にして、其の履行すべき方法は、組織構造して人の習熟に便ならしむること猶物を執りて己が所有となすを得るに似たるより假りて物と名づけたり即ち周禮にある鄉三物射五物の如き類皆是れなり、格は來なり至なり、吾より彼を感動して來らしむることにて、假りに射五物の和容主皮和頌興舞の如き者は吾が力むること久く習ふこと熟せる結果、和容主皮和頌興舞の五物、皆各、吾が所有の如く而して後吾が所見自然に從前と同からず、是を德慧術知と云ふ凡そ禮樂射御書數の六藝亦皆以上の如くにして吾が身に會得を爲すなり、故に致知在格物と曰ふと云へり、又、宋の黎立武は格物とは即ち大學にある物有本末の物を格し、致知とは大學に知所先後の知を致すなりと云へり、清の李光地は仍此の説に因りて大學に自天子以至庶人壹是皆以脩身爲本とあれば、修身は本にして家國天下は末たることは勿論なり、且、家は尤も人倫切近の地なれば、大學に其所厚者薄而其所薄者厚とありて、厚薄を以て其の終始の序あるべきを云へり、此れ皆謂ゆる物なりと云へり、乃ち李光地の説は格物致知とは、物に即きて知を致すことなれども、朱子の如く汎く天下の每事每物に就きて精密に道理を究はむべしと云ふにはあらずして、即ち大學の書中にある物の字と、知所先後と云へる知の字に據りて解をなして、天下國家は身を以て本となし、身心の放縱苟且にして自から私すべからざるを知り、本亂る時未得て治まらざれば、天下國家の智力權數を以て相馭すべからざるを知るを謂へるなりとせり、以上の如く諸家皆各其の見地に從ふて其の説同からず、今予は仍朱子の説に據りて、本文を解釋せしこと前述の如し、是非得失未だ遽かに決しがたきも、予は朱説を

取らん、此れ尙、他日を待ちて其の論を公にする機あるべし、

自天子以至於庶人壹是皆以修身爲本

此の節八條目の中に於て特に一個の總要なる語を揭出して云ふ

（通解）自天子以至庶人　庶人とは庶は衆なり平民を云ふ、天子は至て尊く、庶民は至て卑し、此れ尊卑の兩極端を擧げ中間に以至の二字を用ひ以て諸侯卿大夫士の各階級を包括して云ふ、一說に大學は治民の責ある者の學問をなす處なれば、本文の庶人は汎く農工商の民を云ふにあらずして、周禮にある俊士造士（學問ありて推篤に中たりし人）の大學校にある者を指すと云へり、されども予は仍前說を取らん、　壹是皆以脩身爲本　壹是は一切なり一概も同じ蓋し詳言すれば均く脩身なれども其の身分に隨ひて、天下國家の責任各、殊なれば天子は天子の脩身の道あり、諸侯は諸侯の道あり、其他卿大夫士庶人、亦各其の脩身の道あれども要するに脩身を以て本となすは皆同く一なり、故に壹是皆以脩身爲本と云ふ朱子は解して正心以上皆所以脩身也齊家以下則擧此而措之耳と云へり乃ち正心と云ひ誠意と云ひ致知格物と云へるは、皆己が身內の事に屬して、其の身を脩むる所以なり、是れ即ち皆其の

明德を明にする所以なり、脩身を以て本とすれば、此等の事を觀て、其の本を端ふすること甚た精と云ふへし、齊家と云ひ治國と云ひ平天下と云へるは、身外の事なれとも、皆脩身よりして推し及ほせるなり、即ち皆明德よりして推し及ほせるなり脩身を以て本とすれは、此等の事を觀て、其の本を立つること甚た大なるを知るべし、

（通釋）條目は以上の如く詳なれども要領に至りて約やかなり、上は至尊の天子より下は至衆の庶人に至るまて、各天下國家に對する責任ありて大人治人の學に從事せさるはなけれとも一切に概して云へは何れも皆脩身を以て本となす、苟も天下國家の別なく人の主となり長となる者にして、其の身脩らずんば、其の下何を以て模範とし仰きて從はんや乃ち大人の一身の脩と否とは、天下の平かに國の治まり家の齊ふる基本たり、故に天子より庶人に至るまで豈に先つ脩身を務めすして可ならんや而して脩身を能くすれは天下を平かにし一國を治め家を齊ふることは、皆推して爲すことを得べし、大學の道至大至詳と雖も、其の要領は豈に亦至簡至約ならすや

其本亂而末治者否矣其所厚者薄而其所薄者厚未之有也

（解義）此の節は反言して脩身の本たる意を見めす、其本亂而末治　本は身を謂ふ末は天下國家を謂ふ、其所厚者薄　所厚とは家を謂ふ聖人は天下を以て家となして博く愛すれば、國と天下とを薄くすと云ふにはあらざれとも、我か一家より視れは、亦自然に愛に差等なきこと能はす、唐の韓退之が原人に聖人一視而同仁、篤近而舉遠とあり此の篤近而舉遠は聖人の家國天下に對する愛の等差なり、然るに今其の所厚を薄くして所薄を厚くするは、全く聖人の爲方と反對なり、朱子は上節の自天子至庶人の節と、本節を以て、上文の古之欲明明德の節と物格而知至の節と此の兩節を結ふとなせり、

（通釋）脩身既に家國天下の本たれば、其の本を務めさるべからす、苟に已が身にして脩らす、即ち其の本たる者が亂れて、而も、家國天下なる末たる者が治まることは、道理上決してあるべからす、即ち凡そ下たる者は皆上に倣ふ者なり、又己が、身脩まらざれば、孝弟慈愛の道一家に行はれすして己に其の厚き所の者に對して尙且薄けれは、安んぞ其薄き所の者に向ふて、博愛の恩廣く物に及んで、仁德の厚きことを望むべけんや、即ち己れが父母を父母として、大切にせざるに、他人の老人を善く愛敬し、己が子弟を子弟として撫育せざるに、他人の幼者を恤み憐れむが如き者は、古より未た有らあざるなり、夫れ末の治まらさる、こと此の如くなれは、本の亂るべからさるや已に甚た明かなり、則ち家國天下に大人として之を治むる責任ある者、豈に其の大本たる脩身を勉めすして可ならんや、而して脩身は即ち三綱領中にある明德の條項なり、明德は則ち格物致知より始めて、誠意正心を積みて成る者なり、此の敎へを敎へ、又學ふ者、之を大學の道と云ふ、

餘論

朱子の所定に據れは、以上を大學の經となし、以て孔子の言となせり、今其の說に從ひて全章を通觀するに先つ首節に明明德新民止於至善の三大綱領を揭かけ、而して止於至善の一事、最後に在るを以て、次節は直に承接し其の方法を論し先後する所を知らざるべからざるを言ふて、大學の道は秩叔的に進むる者なるを概言し以て之を結ひ、次に明明德の事と新民のことを交互錯綜し古欲明明德於天下の一句を以て提起し其の相離るべからさるを云ひ又其の方法として治國齊家脩身正心誠意致知を逆溯推原して最後に着手の工夫を明にして致知在格物と云へり故に其の實際秩叔的に進修する次序を以てするとき格物致知誠意正心脩身齊家治

國平天下と云ふ此を名けて大學の八條目と云ひ、上の首節にある三綱領と共に、古來學者の研究して意を致す所となす、而して八條目は本文に自天子至庶人皆以修身爲本と云へるが如く、其の要領を概言すれは實に一の修身に外ならす、蓋孔子の根本主義は固より仁にありて、仁は己を成し人を成するを以て宗旨となせとも、人を治めんと欲すれは先つ己を修むるを以て、教の要義となすは、天下何れ教としてか獨り然らさらん、而して孔子が大學の教尤も修身を推せり、是れ其の故何ぞや、凡そ家と云ひ國と云ひ天下と云ひ親疏大小の差あれとも皆我が身外の者にして、乃ち人に屬する者なり、知と云ひ意と云ひ心と云ふは、皆我が身内の者にして、乃ち己に屬する者なれとも、何れも無象的にして實體の認むへきなし致知誠意正心亦無形的行動にして單に此のみを以て目的とすれは後世一派の學者が明心頓悟の說を喜ひ、高簡疎略の行をなし超然として自か喜べる徒と擇ふ所なきなり唯其れ修身に至りては、身と云へは、實體實質ありて、修身と云へは法象事實の我に顯然として具はる者ありて、推して他人に及ほす功夫效驗共に確然として認むることを得べし、例せば容貌を正ふし、威儀を愼み、行必らす檢束あり言必らす範防あるが如き皆各法象あり以て執り行ふべく、事實あり以て驗(コヽロ)み定むべし、此れ修身の事にして、謂ゆる格物致知なる者、亦此の物に(修身)に即き精察して其の理を明にするなり、謂ゆる誠意正心なる者、亦此の物に即き反求して其の私に勝てるなり推して家國天下に及ほせは、億兆人民の觀興して感化する者も、亦此の物に由らずんはあらす乃ち予が前に論語に於て講述せる孔子の顏淵が仁を問へるに答へて非禮勿視勿聽勿言勿動を以て克己復禮の目として、一日克己復禮天下歸仁矣と云はれしも、亦實に此の奧義を語られしに過きす、即ち修身の一事が、聖賢實學宗旨の標榜となりて、天子より庶人に至るまて、壹是皆以修身爲本の意、亦豈に得て窺ひ知るべきにあらすや、

是の說や我が邦先儒錦里木下氏が修身の解に據り、附するに予が一二管見を以てしたる者なり、讀者善く熟讀玩索して、其の義の存する處を知らは、亦以て其の大學の要旨を解し、從來諸儒が格物致知に於ける紛々たる論爭も、又自から其の是非得失を審かにして、大疑大惑を其の間に挾む者なからんとす、大學の書、朱子の說に從へは、本章の外は、皆其の傳にして、三綱領八條目の義を逐章講說するに過きす、故に今は此にて本書の講を止め、次くに中庸を以てせん、

中庸

偏ならざるを之れ中と謂ふ、易らざるを、之れ庸と謂ふ、中とは天下の正道、庸とは天下の定理なり、此の篇は乃ち孔門傳授の心法なるを、子思其の久くして差はんことを恐れ、故に之れを書に筆し、以て孟子に授くとは、宋の程子が中庸の名義と作者の何たるを論釋せし言にして、朱子採りて中庸章句の小序に置けり、乃ち中庸とは大中至正の道、日用平常の理にして、古今を窮め天地に亘りて移易すへからざる義を云へるなり、子思の以て其の作に名けしを觀れは、其の書の內容如何は亦推して知るに難からす、程子は又曰く、其の書始めは一理を言ひ、中は散して萬事となり、末は復、合して一理となる、之を放ては六合に彌り、之を卷けは退きて密に藏る、其の味窮りなし、皆實學なり善く讀む者玩索して得ることあらは、終身之を用ふるも盡くすこと能はさる者あらんと、蓋其の言多少溢美過奬に涉らさるにあらさるかの疑を生することあるも、全篇を通讀し善く玩味思索して、其の眞理眞趣を發見するに及んては、亦自から古人の我を欺かさる言なることを覺るに至るべし、左れば本書は聖人極致の道を說きし者なれは、其の奧旨深義に至りては、もと僅々たる紙上の講述能く載する所あらす、故に今は姑く朱子が讀中庸法を語りて讀書先須看大綱又

看幾多間架如中庸所說天命之謂性率性之謂道脩道之謂教此是大綱と云へるに據り、其の第一章を抄講して、全豹の一班を示す事となさん、但中庸の作者に至りては、古來時に子思の作なるを疑ふ者あり、近時好奇の士又斷して子思の作にあらさる說を主張する者ありと聞きしかは、少く煩說に涉たれとも、聊か其の書の傳來と子思の作なることを述べて、讀者研究の一助に供せん、

史記の孔子世家に孫伋字子思嘗困於宋作中庸とあり、是れ西漢の史家司馬遷が筆にして、中庸の作者を明言せる始めなれとも、孔叢子に子思年十六にして宋に游ひ、大夫樂朔の怒に逢ひ、其の徒に圍まれしに宋君の救によりて禍を免れしかは、乃ち文王の羑里に困みて周易を作り仲尼の宋に困みて春秋に作りしに倣ひ、中庸四十九篇を撰せしことを載せり、此れ子思の中庸を作りしを云へとも、篇數の多きこと現行の中庸と合はす、漢書の藝文志に子思子二十篇とありて、著者班固の自注には孔伋の作となす梁書の沈約が傳には、今の中庸は、子思子の一篇なるを云へり、若し此の說を信なりとせば、現行の中庸の文章は、亦頗る多きに過く、且、中庸を孔子の孫子思の作とすれば、篇中の文章餘りに己が祖父の聖德を褒頌尊崇に過くるは、小人誇張自伐の氣勝ちて、君子謙遜自抑の德に似すと云へるが、是れ古來論者の疑を子思

の作に挾む所以の要點たり、又通篇の文章より觀れは、哀公問政の章以下は、其文體大に上文と同からすして、問政章の如きは、孔子家語に見ふれば、愈益子思中庸の原文にあらざるべしと云へり、此說本、宋の王柏明の王褘等より唱へ、我か邦の先儒も亦頗る議論あれども、家語の王肅が僞增本にして、據りて斷案を下たすに足らさるは、今日となりては復、別に論辯の要なきなり、孔子を褒尊すること餘りに大なるを疑ふに至りては、是亦未た深く當時の人情禮俗を考へさるに由れるのみ、禮記の儒行に君子の人を取る道を述べて、內擧不避親外擧不避怨と云るあり、乃ち苟も人の美を美とし賢を賢として、世に推薦紹介するは、親戚なるが爲めに嫌疑を避けす、怨讐なるが爲めに掩匿を爲さす、公平無私の心を以て相對するは、古人の以て雅量美德となす所なり、故に周公は子なり弟なれども、詩經書經の中に、文王武王の聖德ありしことを稱贊して憚からさるは、殆と枚擧に勝へす、蓋彼の區々の嫌疑を畏れ小節に拘りて、故らに忌諱不實の辭をなし、情を矯め世に阿るが如きは、中人以下の爲にして、天下の大道を以て自から任し所信を萬世に詔る聖賢君子の顧慮する所にあらす、孔叢子の書は、漢の孔鮒の撰と傳ふれとも、其の六朝時人の僞作たることは、前人既に論定せり、彼の年十六にして中庸を作くると云へるが如きは如何に聖人の親孫なればとて亦甚た疑ふへきにあらすや、此を以て之を觀れは、中庸を四十九篇となせるは、亦何等かの誤謬ならさるを得んや、藝文志に禮家十三書を擧け、其の中に中庸說二篇とあり、唐の顏師古の注に、今の禮記中にある中庸一篇は、蓋し此の流なりと云へり、隋書の經籍志に禮記中庸傳二卷宋(劉宋)散騎常侍戴顒撰中庸講疏一卷梁武帝撰私記制旨中庸五卷とあり、又宋の王應麟は中庸說を白虎通に據れは禮中庸記と謂へりとあり東漢の鄭玄が目錄には中庸は孔子之孫子思伋作之以昭明聖祖之意此於別錄屬通論とあるに據れは、中庸を子思が作となすは、司馬遷班固鄭玄等歷代の諸儒皆多く同し而して其の書は、漢代に於て已に禮記の外に別に單行の書として行はれしことをも亦知るべし、されば其の後唐の李翺に中庸說あり、宋の胡瑗に中庸義あり、司馬光に中庸廣義の著述あるが如き、注解の書、程朱以前にありて已に頗る多し、但其の專ら此の書を推崇して孔門傳授の心法にして、六合に彌り退きて密に藏る聖經神典の隨一となし、流傳の盛なることを致せしは、實に程朱二子の功に歸せさるを得す、而して藝文志經籍志共に中庸を二篇となせとも、一は中庸傳とあれは、原文は果して現行の文と異なるか否か今其の書亡ひて傳はらされば得て知るべからす、梁武帝の撰せし中庸講疏は一卷とあれは、大抵今文と同

からん、太田錦城は哀公問政以下を分て、上下二篇となせしにあらさるかとも云へり、同一の書にして上下篇の別により、文體の同からさるは古の經傳諸子其の例尠からす、今の論語の上論と稱する鄉黨篇以上と下論と稱する先進篇以下の文章頗る其體格を同ふせざるを以て之を推せは、蓋錦城の說或は然るなり、尙此等の類を考據論覈すれは頗る長く、且本講義制限ある紙上に於て能く載する所にあらざれば、今は之を略す、要するに中庸は子思の作と斷して可なり、

中庸既に子思の作とすれは、子思は果して何を以てか之を作りたるや、孔叢子の傳取るに足らす、史記は單に困於宋作中庸と云へるのみ、朱子は中庸に序して、子思子憂道學之失其傳而作也（中略）去聖遠而異端起矣子思懼夫愈久而愈失其眞也於是推本堯舜以來相傳之意質以平日所聞父師之言更互演繹作爲此書以詔後之學者蓋其憂之也深故其言之也切其慮之也遠故其說之也詳と云へり、蓋是の時、周室既に衰へ、孔子又沒し、正道明かならす、老聃の虛無、揚朱の爲、我、墨翟の兼愛等、其の道を論し敎を述ぶるや、或は自然を主張し、或は利己を尊重し、或は平等を皷吹し、諸說紛然羣起して、聖人の敎爲めに愈益晦冥にして殆と識るへからさるに至らんとす、子思此を憂ふるありて異端を觝排し、邪說を閉息せしむるに先たち、乃ち此の篇を述べ以て先聖の敎を明かにせんことを務めしなり、孟子は子思の學統を承けし者なり、嘗て曰く君子反經而已矣經正則庶民興庶民興斯無邪慝矣蓋、世衰へ道微にして、異端邪說並ひ起りて、一一匡正するに遑あらさる時は、君子たる者先つ我が萬世不易の常道に復歸して、之を世上に闡明せは、衆人善を爲すに奮興し、是非の理皎然明白となり、邪慝の者ありと雖も、復、天下を惑はすことを得さるを云へり、嗚呼此れ實に子思子中庸を作れる本旨なるかな、

天命之謂性、率性之謂道、修道之謂敎

（總旨）此れ子思子聖學の明ならざるを憂へて、道の源流功效を擧け、以て世に詔るなり、通章道の字を提けて主となす、三段に分ち、首段本然の義理を云ひ、中段當然の工夫を云ひ、末段自然の效驗を云ふ、而して喜怒哀樂云云の一節は、復、本原を推尋し、中和の理本、吾人に同く具はれることを見し、而して中和を致すは、君子の務に在るを云ひ、以て上下の串接となす、更に全旨を要約して云へは、天人の一致を說明して、聖敎の忽にすべからさるを云ふ、是れ本章の主旨にして、抑又本書の大綱なり、首節天命之謂性云々の語は道の原頭より說き來りて、天地萬物の理、總て吾か身に具はれるを見し、末節天地位焉云云の

語は、吾人一身上より説き去りて、吾が一身寔に天地の爲めに心を立て萬物の爲めに命を立つるを見す、古語に人は天地にあらざれは生せす、天地は人にあらされは靈ならすと云へることあり、人の眇たる一身を以て、天地に參して三才と云へるは、實に是の故を以てなり、

（解義）天命之謂性　之謂と謂之とは、自から別義なり、前者は直ちに其物を其物と云へる義にて、其の固有名詞たることを説明して云へるなり、例へは韓退之が原道に博愛之謂仁行而宜之之謂義の如きは、博愛が即仁にして他に仁あらず、行而宜之が即ち義にして他に義あらざるを云へるなり、孟子の滕文公篇に、分人以財謂之惠教人以善謂之忠の如きは分人以財のみが惠にあらす、教人以善のみが忠にあらさるも、亦是れ惠の部分たり忠の部分たるを説明して云へる義なり、此の區別にて本文の天命之謂性とあるを推せは其の意義自から判明せん、天とは形を以て云へることあり、理を以て云へることあり、理を以て天を解せしは、高誘が淮南子の注に、天即理也とあるに基きて、朱子經書を解するに多く此の説を用ふ、朱子は又、天者自然也と云へり、今其の説に據り、又章句の意を融會して本句を解釋せんに、自然の動くや名けて氣と云ふ、氣に伸長するあり、陽と名く收縮するあり、陰と名く、陰陽の二氣妙合絪縕して、茲に形質を凝結して、萬物化生すると同時に理隨ふて乘り移りて小天を成す、之を性と名く、譬へは蜘蛛の自から網を結ひて其身亦網の成るに隨ふて之に住するが如し、但蜘蛛は網上に全く住すれとも、天と人との關係は盡く然るにはあらす、譬へは君主が自から百官を命し、己が權能を分賦して、其の事を行はしむがる如し、故に假りに之を形容し天命之謂性と云へるなり、命はもと命令にて君主より臣下に吩ひ付くることなり、乃文章の修辭上にて、有象的君臣の關係を假りて無象的天人の關係を形容したるなり、性とは謂ゆる心の持ち前なり、孟子は嘗て之を論して君子所性仁義禮智根於心と云へり故に世に之を四性と稱す、其の後漢の董仲舒更に信の字を加へてより、世又仁義禮智信を五常と稱す、此れ性の内容品目なり、率性之謂道率は循なり、道は孟子に夫道若大路然とあるが如く、もと往來するに道路の、必らす由らざるべからざる如く、仁義禮智の道は人として世に生する以上は、必らす履行せざるべからざるよりして、假りて道と名つけしなり、本文の意は人は天命の性を固有し、即ち仁義禮智の性自から具備しありて、萬事萬

物に接觸するに循ひ發動して、日用事物の間、皆悉く一定當行の徑路あらさるはなし、乃ち仁性に循へは親を親み民を惠み物を愛するは、是れ道なり、義性に循へは、君に事かへ長を敬し賢を尊ふは、是れ道なり、禮性に循へは、恭敬辭讓の程善處(ホドヨキトコロ)に叶ふことは是れ道なり、智の性に循へは、是非邪正の分別確然として迷はさるは是れ道なり、此の親を親み民を惠むより是非邪正の分別に至るまで、皆仁義禮智の性が事物に接觸するに循ひ發動して各自に一定の徑路をなす者なれは、故に率性之謂道と云へるなり、乃ち道の名目は後より立ちしも、道の實質は道の名ありて後に生するにあらす初めより存するなり、道の功用は事物に依りて呈出するも、道の本體は、事物に依りて立つにあらす初めより在るなり、子の父に遇へは愛すへきを知り兄に遇へは敬すべきを知るが如きは、必らす其の中心に是の父を愛し兄を愛する性ありて而して後に之に率ひ由りて、愛を致し敬を致す是れ即ち道なり、脩道之謂教、

脩は修の假借字にて、修は既に大學に於て辯せしが如く、修飾の義なれは人爲的加工を意味す、朱子は脩を品節と解釋せり、品は等級節は限制にて、凡そ道を行ふに其の事物に對し輕重厚薄の宜に從ひ、一定の制ありて、之を限定するを云ふ、乃ち人の本性もと天賦の靈を稟くることは、皆同く一樣なれとも、既に人と生れ形體ある上は目は、美色を見るを欲し、耳には美聲を聽くを欲し、口には美味を食ふを欲するが如く、亦各形體上の嗜慾あり、而して其の利害得失等の關係よりして、感情行爲又隨ふて盡く同一なること能はす、過くる者あり、及はさる者あり、聖人乃ち人の人として當に行ふへき道に對し、其の自然に輕重厚薄の情あるによりて、之が等級、限制を立て、過くる者は抑へ、及はさる者は企て至らしめて中庸にして行ふへき法を天下に示す、是れ即ち教なり、故に脩道之謂教と云へり、朱子は又教を解して曰く禮樂刑政之屬と、即ち教學政事を兼該して云へるなり、金秋潭云ふ本章、首として性道教の三項に分ち說けり、當時異學の眞理を亂り此の三項の名義を錯(アヤマ)り認むるを以て、故に子思其の義を推本して之を發明せりと、

(通釋)

子思世衰へ道微にして天下の人異論に眩惑せられて歸着するを所を知らさるを慨嘆し、正道を明にせんことを期し、先つ道の本原流委を說示して曰く、道は歷代聖人の相傳へ、吾人人類の標的となす者なるが、抑も道は從ふて出つる所ありて無意味に興るにあらす、又由りて成る所ありて無成功に畢

はるにあらす、道の本原は天より出つるなり、凡そ人物の斯世に生るゝや、自然の天理、其の形體中に寓して仁義體智の四性となる、其の情狀宛も君主が臣下に命令して、己が權能のことを代り行はしむるが如し、故に文章上假りて之を形容し天命之謂性となす、既に性となりて、人身に備はれる仁義禮智は、外界の事物に接觸するに隨ひ、發動して一定の徑路を示さゞることなし、例へは親に對しては愛を知り、兄に對しては敬を感するが如き、皆各自然の靈能にして、率ふて愛を致さば孝となり敬を致さば悌となるが如きは、是れ一定の徑路に由りて進むなり故に之を道路に譬喩し形容して率性之謂道となす、されども、人は均く仁義禮智の性を具有せしに拘らす、稟氣の異同原簿よりして才不才の差ありて、必しも皆悉く賢知のみならす、又必らしも皆悉く愚不肖のみならす、聖人此に因りて過たる者を制し、及はさる者を進め、自然の道に基つき、人工的品節を加へ以て敎となせり、故に之を脩道之謂敎となす、乃ち道とは天理の自然に根ざし原つきて、聖人の脩めて整ふるに於て成立をなせり、故に性は道の原にして敎は道の因なりといふが本節の眼目なり。

道也者不可須臾離也可離非道也是故君子戒愼乎其所不睹恐懼乎其所不聞

（解義）道也者　上節は性道敎の三件を分揭して、本節は只獨り道のみを言へるは、分言すれは、性道敎の三件となるも、合言すれは道の一件に歸すれはなり、陳新安は曰く道字上包性字下包敎字と　不可須臾離也　須臾は意所偶欲曰須瞬所末合曰臾極めて少時間なり、朱子は解して道者日用事物當行之理皆性之德而具於心無物不有無時不然所以不可須臾離也と云へり乃ち吾人が日々に事事物物に就きて、踐行すへき道は、皆己が心に固有せる性能にして、事事物物に具有し、時々刻々即ち日用の間必然ならさるはなし、故に須臾の間と雖も、離るべからさるなり、須臾も離るべからされは其久き間離るゝ不可なることは云はすして知るべし、可離非道也又一句を下たし反繳して、道の離るべからさるを云ふ陸稼書は不可須臾離の二句、人を提醒すること最も緊切なり、一事道を離るれは、一事便ち事を成さす、一物道を離るれは、一物便ち物を成さす、例へは禮に於て手の容は恭かるへく、足の容は重かるへきは人の道なり、若し手足にして恭と重とを離るゝ時は是れ手足の形あるも

徒に運動するのみにして、禽獸と何そ擇はんや、未た眞正なる人の手足とは云ふべからず、父は慈なるへく、子は孝なるへきは道なり、若し父子にして慈と孝とを離るゝ時は、便ち父子の名あるも、亦何そ禽獸と異ならんや未た人の父子と云ふべからず、彼の世儒の訓詁詞章管(仲)商(鞅)の權謀功利老佛の淸淨寂滅の如きは皆人力私智の所爲にして吾人に於て離るへきも、而して道は吾人暫くも離るべからず、道既に是の如く離るべからず、此れ君子存養の功、如何なる處としても、疏末になし得へきこと無き所以なりと云へり　戒愼乎至所不聞　戒愼は、「イマシメ」「ツヽシム」なり氣を附け粗末にせざること、恐懼は共に、「オソル」と譯すれども、恐はをそるゝ內に物を疑ひ氣遣いあやぶみ思案する意あり、故に字書に恐者懼也又疑也慮也億度也とあり、懼は差し當りて、をそるゝこと、今の人、びくつくと云ひ、物をこはがるといふ意に近し、故に字書に恐也懼也とあり、恐懼の字分ちて云へは、上の如くなるも、連用すれば何れも唯をそれと訓すべし、兩の其の字、君子自己を云ふ、但人の睹す聞かざるのみにあらず、自己も亦睹ず聞かざることを云ふ、朱子は釋して是以君子之心雖不見聞亦不敢忽所以存天理之本然而不使離於須臾之頃也と云へり乃ち所不睹所不聞とは、常に敬畏を存する極點なる場處を擧けて云へる者にして、此の處にても尙且戒愼恐懼することなれは、況や其の他は何時何處を問はす、皆然らさることなきを見るべし、故に朱子の雖不見聞と云ひ亦不敢忽と云へる此の雖の字と亦の字と、の語脈を尋ぬれは、彼の後世一派の朱學者が、不睹不聞を以て眞體となして、專ら力を此處のみに用ゐて、思案工夫を凝らすこと、禪家の爲の如きは、朱子の本旨にあらざることも、亦推知することを得へし、

（通釋）

上述の如く、性は道の根原にして、敎は道より成立すれは、道とは性と敎とを合はせて言ふを得べし、是の道と云へる者は吾人の身に取りて、何に物にも有り何時にも有りて、一寸の念瞬く間も決して相離るべからざるなり、若し萬一にも離るべく、即ち離れて差支なきものなれば、則ち是人の身外の物にして、既に道と云ふへき者にあらず、故に敎に由り道に入る君子は、一寸の念瞬く間も道と相離れず常時不斷に畏敬の心を存持して失はざるやうに勉むべし、乃ち吾れ自身の目の睹さる時と雖も、而も早く已に戒愼すれは、睹る時に戒愼することは知るべし、吾が耳の聞かざる時と雖も而も早く已に恐

懼すれば聞く時に恐懼することは知るべし、以上の如く常に敬畏の心を存するは何の故なるかなれば、天命の性より出てたる道を完全に存持して寸念瞬時なる須臾の頃だも、已と離れしめざるが爲めなり

莫見乎隱莫顯乎微故君子愼其獨也

（解義）莫見乎隱　莫は無と共に「なし」と譯すれども、無は直に有の字に反對否認して云へるのみ、莫は一たひ心中に有か無かを比較考量して、有ることなしと、取り定めて云へるなり、見と顯は、共に「アラハル」と譯すれとも、見は字書に露也とありて、隱れてある者が表面へあらはるゝなり、故に本文は隱に對して云へり、隱は朱注に暗處也とあり、かくれ暗き場處にて、人の心曲の中を云ふ、

莫顯乎微　顯は光也明也著也とありて、光りかゝやきて疑なく著はるなり、故に本文は微に對して云へり、微は細小の甚しきなり、但細は絲の筋の如く物の形あれとも、微は更に小にして有るか無きかのやうなるを云ふ、朱注に微は細事也とあり、乃ち有るか無きかと思はるゝ事にて、一念の萌せるを云ふ、乃ち上句の莫見乎隱は、有無の上に就て云ひ、本句の莫顯乎微は虛實の上に就て云へるなり、蓋し人の念慮、甫めて萌し、其の幾已に動けとも、特人は知らされば、故に之を隱れ暗き場處に見立て隱と云ふ、其の動ける念慮を、既に現れたる事柄に見立て、又未た人目立たされは、之を形容して微といふ、然し他人は之を知り心附かざるも、己自身は既に最も確かに認め得て昭灼顯著なることなれば、故に莫見莫顯と云へるなり、金秋潭は曰く、二莫字、須寫得危悚方逼得下句起と　愼其獨也　愼は「つつしむ」用心して粗末にせざるなり、其とは君子自分の身を指す、獨とは朱注に人所不知而己所獨知之地也とあり他人の心附かすして己獨り承知せる場處を云ふ上句の隱微とあるは即ち獨なり、莫見莫顯とあるは、正に其の愼むへきを云へるなり、愼の字の意、明なると健かなるとの二義を包含す、君子の天理人欲を明察するは尤も早く理欲分途の始に明察すへし、善事惡行を嚴別するは、尤も速に善惡擧念の初に嚴察すべし、上節の戒愼恐懼は、是れ本節の根原にして、本節の愼獨は、其の中に就きて特に緊切なる處を抽出して、學者著力の手段を示せるなり、存疑に云く君子雖云無所不用其愼、於此隱微の際若不更加詳愼則前雖有存養之功未免盡棄後雖欲用存養之功亦無及故子思上文既言戒愼於此復言愼獨又就其中特揭功要工夫以示人要不出乎上文戒愼恐懼之外也と

（通釋）然れとも上文に述へし離るべからさる、道を體認踐行するに於ては、尤も切要にして愼むへき者あり、何ぞや今我に或る念慮の萌しつゝあるも僅かに心曲幽隱の中に在りて未た外に見はれざれば他人は之を知ることなし、されども其の念慮が或は善念なるか或は惡念なるかは我れ自身の心に限りて最も確實に認知して枉け欺くべからず、されば寔に隱れたる場處より見はるの大なる者は他にあらす、或る念慮の動くや其の初め極めて細微にして有るか無きか殆と見分の付き難き程なれども、或は善事なるか或は惡事なるかは我れ自身に於ては最も確實に認知して强ひて沒却することを得ずされば寔に微きなる事柄より顯はるゝことは他にあらす、さて其の隱と云ひ微と云ふは、皆他人の知らざる所にして、自己獨り知る所の場合にして、即ち相手なく獨居の際なり、而も其れより見るゝは莫く、顯はるゝは莫きこと、此の如し、故に單獨にして相手なき場合は、尤も愼を致すへきことならすや、されば君子は前節の如く既に常に不睹不聞の際に、戒愼恐懼をなすも、此の念慮の發生せる初に當り、隱微なる獨知の地に於て特に一段愼まざれば、折角前時の戒愼恐懼して存養せる功も、空く水泡に歸し、尙、其の後に於て、存養の工夫を盡さんと欲するも、時機既に失して復及ぶことなきなり、愼獨の事、豈に亦須臾も忽にすへんや

喜怒哀樂之未發謂之中、發而中節謂之和、中也者天下之大本也、和也者天下之達道也

（解義）上文道に就きて義理を論し、工夫を述ふること已に備はれ、は本節は徑に其の效驗を言ふへきに、復初に溯り原を推して云へるは、中和の二字を透出して下文を起さんが爲めなり喜怒哀樂、之未發凡そ人の心物事順なるときは喜ひ、逆なるときは怒る悅あれは樂み憂あれは哀むは何人と雖も皆同し是れを人情と云ふ、禮記の禮運篇に何謂人情喜怒哀懼愛惡欲七者弗學而能とあり、荀子の正名篇にも、性之好惡喜怒哀樂謂之情とあり、故に朱子は本文を解して喜怒哀樂情也其未發則性也と云へり、喜怒哀樂は性が外界の事物に感觸して各々其の類に隨ふて動ける思念なり未發とは不發と意義同からず不發は初中終發せざるなり未發は將來に在ては全く發動せすと限るにはあらず、但現在に於ては尙ほ靜かにして未た發動せざるなり即ち發動の

機は已に靜中に含蓄せるなり、但未だ外に見はれざるのみ、此の二字宜く深く玩味すべし　謂之中　謂之と之謂の別は、已に本書の上節に於て辯せり、中とは偏倚することなくし、中正なるを云ふ、乃ち喜怒哀樂の心渾然として中に在りて、何れの部分にも偏倚せず、亦何に事にも過くることなく及はざることなければ、故に特に名けて中と云へり、朱子曰く喜怒哀樂未發如處室中東西南北未有定向不偏於一方只在中間所謂中也と　發而皆中節謂之和

發は上句の喜怒哀樂が發動するなり、中は去聲に讀みて、當也と訓し「アタル」と譯す、上文の謂之中の中と字は同くして義は異なれり、節は恰好なる處を云ふ、和はもと食物の調和のことにて、一轉して物事の落ち合て治まることを和と云ふ、孔疏に皆中節限猶如鹽梅相得性行和諧故謂之和と云へるは、善く和の字義を說けり、朱子曰く發皆中節情之正也無所乖戾故謂之和と、此の節の字は、乃ち上の未發謂之中の中の字に跟きて來る、上の未發謂之中の內に、天然の節の義は已に具はれり、發而中節は只其の未發の本體を失はざるのみ、存疑に中節要看得細如當喜而怒固不中節即當喜十分喜只到九分便是不及喜十一分便是十一分亦皆不中節とあり　中也者天下之大本也　中は即ち上の未發謂之中の中なり喜怒哀樂は情にして、其の未發は性なることは、上に已に之を說けり、性は仁義禮智之が綱領にして、萬善の德之が條目たり、故に朱子は本文を釋して、大本者天命之性天下之理皆由此出道之體本體也と云へり、天下之大本とは、中の本たるは一事一物の本にあらず、實に天地の萬物の本なり而も僅かに其本たるを得るが如き比にあらずして、天下の大本たるなり天下と云ひ大本と云ふは極めて尊崇して形容せし辭なり

和也者天下之達道也　達は通達の達にて何の時何の處を問はず、洞開貫通して些少の障礙なき坦々たる大道なるを云ふ、乃ち上の發皆中節謂之和の和は、天下何代を論せず、何處を言はず、苟も人たる者は、皆固有の性に具はれば、何人と雖も循ひ由るべからざるはなし、故に朱子は本文を釋して達道者循性之謂天下古今之所共由道之用也と云へり、是れ即ち本書首節の天命之謂性率性之謂道の二句を以て中和の二字を解釋して道の須臾も離るべからざることを明にせられしなり、故に朱子は又本節を論じて此言性情之德以明道不可離之意と云へり

（通釋）道の離るべからざるは、人の性情に相關すれはなり、性は無形にして見るべ

からず、試に性の發動たる情に驗せんに、喜怒哀樂の情其の靜かにして、未だ發せざるに當りては、喜怒哀樂すべき理(種子)は、心中にあれとも初めより喜怒哀樂すべき事なくして、喜にも怒にも又何れにも偏倚せずして、恰も中間にあり、之を名け中と謂ふ、此の喜怒哀樂の過ぐることなく、亦及ばざることなきは乃ち節なり、其の已に發動するに及んでは、既に喜怒哀樂の事あり、其の理に適合して乖戻することなくして、皆恰好なる節度に中る、之を名けて和と謂ふ、此の中と云へる者は、人性固有の本體を形容せる者にして、宇宙間の事物の理細大の別なく皆其の内に蘊蓄してあれば、天下萬物の大本なり又和と云へる者は、人情通有の作用を名狀せる者にして、古今來の上下賢愚の人となく、皆其の間に率由せざることなくして、天下萬事の達道なり、されば道の體用は即ち人性情に具備すれども、未發の時に於て存養の功を知らざれば、其の中を失して大本立たず、既發の時に於て、省察の方を知らざれば、其の和を失して、達道行はれず

致中和天地位焉萬物育焉

(解義) 性情の德は、人皆同く具有せり、但其の能く之を活用すると否とに由りて、聖凡の差別生ずれば、此特に君子の中和を致すの功を云ふて、遂に其の效驗は及ぶなり、致中和　致は推し極はめて、究竟の處に達するを云ふ、致に直致と橫致あり直致は今日推し極はめ、明日推し極はめ、又明日より明後日と、頃刻の中油斷なく、推し極はむるなり、橫致とは、一物推し極はめ、二物推し極はめ、又或る物より或る物と、四圍の内遺漏なく推し極むるなり、致中和とは、中を致し和を致すなり、中を致すは己が天命の性を推し極むるを云ふ、朱子は釋して自戒懼而約之以至於至靜之中無少偏倚而其守不失則極其中而天地位矣と云へり、乃ち其の不睹に戒慎し不聞に恐懼するより尙内に向ふて工夫を凝らし心意を收斂して至誠の中に至り、善く橫致して何に事何に物にも少の偏倚もなく善く直致して何れの日何れ時時も其の守を失はざれば、性の固有たる中を推し極はめて其の效驗として天地の位するを見るなり、和を致すは己が率性の道を推し極はむるを云ふ、朱子は釋して自慎獨而精之以至於應物之處無少差謬而無適不然則極其和而萬物育矣と云へり、乃ち隱處微事と雖も其の獨を慎しむより段段と外に向ふて進み工夫を積み累ねて事物に應接する場合に至りて善く橫致して何に事何に物を處置するも

少の差謬なく善く直致して何れの日何れの時となく適として然らざることなければ、則ち情の通有たる和を推し極はめて其の效驗として萬物の育するを見るなり　天地位焉萬物育焉　此れ中和を致せる效驗を云ふ、朱子は釋して位安其所也育遂其生也蓋天地萬物本一體、吾之心正則天地之心亦正矣吾之氣順則天地之氣亦順矣故其效驗至於如此と云へり、乃ち道の大原頭より觀れば、天地萬物各々相殊なれども、本原は一體にして自他の別あるべきにあらず、されば天下の大本たる中を致し推し極むれば、吾の心正くして天地の心も亦之に感應して自然に正きに至るべし、是れ天地の其の位に安ずる所以なり天下の達道たる和を致し推し極むれば、吾の氣順ふて天地の氣も亦自然に順ふに至るべし、是れ萬物の其の生育を遂ぐる所以なり

（通釋）君子大本の立たざるべからざるを知るなり、故に靜なる時戒懼の功を盡くし、愈嚴敬にして、其の推し極むることを爲す達道の行はざるべからざるを知るなり、故に動く時、愼獨の功を盡くし、愈精密にして其の和を推し極むることを爲す、されば吾が性情として具有する中和は、即ち天地萬物、亦皆具有せる者なるを以て、吾の中既に推し極むれば、中を以て中を感じて、天高く地は卑く、各、其位に止りて安らかなり、吾が和既に推し極むれは和を以て和を召して、飛潛動植の物各々其の生育を遂げて盛んなり、是に至りて天命の性我によりて全く、率性の道我によりて行はれ、而して脩道の敎我によりて立つるなり、抑も其の始や天は此の理を以て、吾人に賦與して、性となし、其の終や、吾人は此の理を以て天地を贊成して、敎を成す、天に負ふや大にして且遠し、嗚呼是れ此れ吾が聖人中庸の大道にして、異端百家の得て淆亂すべきにあらざるなり

餘論

中庸の書、義理深奥にして頗る解し難し、今姑く朱子の本書を論釋せる義に據りて云へば、以上の本文を第一章となし、子思子が其の父師より傳へられし意を述べて、立言せる者にして、首節は天命之謂性云云の三句を以て、道の本原は天より出て易ふべからず、道は萬事萬物に應じて虛活的なれども、其實體は儼然として己が心に具備して離るべからざるを明示し、次節は道の離るべからざるより說き越して、戒愼恐懼の何時何地を問はず務むべくして靜時存養の要を言ひ、隱より見はるとなく顯より微なることはくして、君子の其の獨を愼むを說きて、動時省察の忽にすべ

からざるを言へり、三節は中和の天下の大本達道にして唯聖人能く之を推し致して天地位し、萬物育するの功化の極致の至れるを言へり、されども是れ聖人功化の極にして諸人の得て企及すべきにあらざれば、中和の美たるは尊ふべくも、勉強の力を以て至るべきにあらずと云ふにあらず、清の陸稼書嘗て之を論じて言へるあり、曰く天地位只是天下大綱都好了故致中便能如此萬物育是天下事事都好了須致和方能如此(中略)學者讀這章書須想天地位萬物育是何等氣象却在吾戒懼愼獨可以致之性道中和是吾所得於天之理吾之所以爲人者也非戒懼愼獨不可全之可見敬之字是中庸之綱領とされば戒懼愼獨より段を逐ひ序に循ひ思案工夫を積み累ねて中和を推し極むれは其の功效天下の大綱都て好く天下の事事都て好くなるに至るを得是れ乃ち天地位し萬物育すと云ふべきなり、而して此の偉大なる能力は、固より吾人の具有性として均く天より賦與せられし者なれども、世人多くは私欲に蔽はれ外物に誘はれて、活用運動の妙を盡くす能はざるなり、吾が聖人の敎は其の天性に率ひ由りて品節して修むることを加へ一定の標準を立て高きに過ぐる者は抑へ低くして及ばざる者は揚げ以て不偏不易の正道に就かしむるを以て主旨要義となす、是れ子思本章立言の本意にして、抑も又中庸一書の大綱なり、故に朱子は又語を繼ぎて曰く、蓋欲學者於此反求諸身而自得之以去夫外誘之私而充其本然之善揚氏(名は時龜山先生と稱す宋の程子伊川の門人)所謂一篇之體要是也、以上の言を綜觀して玩索すれば、中庸一書の大體は亦推して知るを得へし、而して此詳說細義に至りては、請ふ之を全書に就きて觀るべし、本紙上區々の筆墨能く悉す所にあらず、但本章朱子の解頗る過密の傾きあるを以て、王陽明等は、其の說の支離煩碎にして反りて子思の本義を晦ますこと多きを、譏れり、其の是非得失に至りては、予將に他日機を得ば古注鄭氏の說と共に更に比較覈論して世に問はんと欲す

四書の選は、程朱二子の論次によりて定められしが、其の講讀の順序は、大學論語孟子中庸と進むを以て正當となせり、朱子嘗て之を論じて曰く某要人先讀大學以定其規模次讀論語以定其根本次讀孟子以觀其發越次讀中庸以求古人之微妙處と我が朝佐藤一齋は亦嘗て子弟の爲めに譬を武藝に取り說きて曰く、大學は法型なり論孟は仕合なり、中庸は目錄免許なり、法型を知らざれば眞の武藝に達すべからず、而して腕業の鍛へ方は仕合を觀て合點すべし、又目錄免狀を獲て其の奧義極意を悟るべし、大學の書を讀めば、學問の順序大綱を知るべく、論孟は聖賢が如何に實地の失伎倆を有せしかを窺ふべく、中庸は天人合一の理を示して、如何に斯道の高大

深遠にして而も亦平正にして易ふべからざるを悟るべしと、今や予の此の講は、便宜上論語より始めしも、眞に四書を研究せんと欲する者宜く前述の如く大學より始め而して論語孟子を讀み最後に中庸を讀むべし

小學

學庸に繼きて小學を講するは、其の難易の程度は頗る峻阪を下りて坦途に就くが如くなると共に其の趣味も亦隨ふて自然に相遜ることあるを覺ふゆれども小學近思錄の二書は、宋學一派に於ては、四書に亞きて力を用ふへきものと爲せし者にして、我が邦山崎闇齋の如きは四書小學近思錄を以て、學問の道盡きたれば、他書を讀む者は反りて心を外に散して道を害するの恐ありとなすに至れり、此れ亦頗る極端に傾きて、未た中庸の道を得たりとは爲すべからざるも、亦以て小學近思錄の二書が、如何に其の學者に尊信せられ又流行せしかを知るへきにあらすや、蓋し朱子小學の敎を說きしより以來宋元明の三代を歷て、現淸朝の世に至るまて、歷朝の功令掲けて必修の書となし、我か邦德川氏三百年間、亦同く朱學を採りて官學に用ひしかば、其間彼にありては陸象山王陽明竝に淸朝諸儒の考證或は理義を論し訓詁を窮はむるに於て、其の論朱子と相殊なる者あり、我か邦にありては山鹿素行を始め伊藤仁齋荻生徂徠等より近世折衷學派の諸氏に至るまて、又朱子と其の取見を同ふせさる者尠からすと雖も、要するに此等の說多くは一家言に止りて未た遽かに以て普く天下に行はるゝ通說となすには至らざるなり、故に其の是非得失の

如何は今姑く之を置き、今且學庸に繼きて其の大體を講述せん

小學とは既に大學の書に於に述べしが如く、古昔周代の學校は、大小の二學に分ちて、大學は大人の學として國都に設けられて天子の太子より諸侯卿大夫上士の嫡子に至るまで、他日治國治人の責ある者と、及ひ庶人の俊秀にして國家の重用に當るへき者とが、小學を卒業せし後に於て、更に深博高尚なる學問を修むる處となす、彼の大學の書は其の敎を錄せし者なれは、因りて大學と名けしなり小學は小人の學として設けらる、小人とは王公貴族を大人と稱するに對して、卑下なる士民を總へて稱するなり大人の道は己を修め人を治むるに在りて、小人の職は己を修め人に事ふることを主とす、而して小學は閭(二十五家の團體)に塾あり黨(五百家)に庠あり、州(二千五百家)に序あり、庠序は鄉學にして其の小學を敎ふる所なるよりして之を小學と名く、然るに大學の敎が王政の衰ふるに隨ひ頽敗して擧からさると共に、小學の設亦湮滅して認むべからさるに至れり、但大學は幸に大學篇の禮記中に存在せしを以て程子の於今可見古人爲學次第獨賴此篇之存焉と云へるが如く、其の書中に示せる規模順序を見て、有志の士は、百世の下より古昔聖人立敎の主旨を窺ひ知ることを得へきも、小學の敎に至りては、後代一の成書の存するなけれは、殆と尋繹するに由なきを以て、宋代に及ひ、朱子は深く以て憾となし、親く其の要旨大體を定め、門人劉子澄(名は清之子澄は字なり字を以て世に行はる)陳淳黃義剛等に命し、歷代の經傳史書に就き、小學の敎に關する者を選輯して、一書となし、因りて命して小學書と云へり、(後世小學と呼へるは略稱なり朱子文集には皆小學書と稱す)而して其內容は內篇外篇の二篇に分ち、內篇は立敎明倫敬身稽古の四篇より成り、經傳及ひ周代の事實を擧け、以て小學人を敎ふる旨を明かにし、外篇は嘉言善行の二篇より成り、兩漢以後宋代(即ち朱子の現代)に至る間の賢哲君子の模範とすへき言行を蒐錄して、小學敎義の羽翼となせり、或は曰く小學は、十五歲以下の學問にして、大學は十五歲以上の學問なり、故に朱子も嘗て其の作れる大學章句の序に、人生八歲則自王公以下至庶人子弟皆入小學而敎之以灑掃應對進退之節、禮樂射御書數之文、及其十有五年則自天子之元子衆子以至公卿大夫元士之適子與凡民之俊秀皆入大學而敎之以窮理正心修己治人之道と云はれきと、蓋此の說や漢の班固が藝文志に始り、朱子は因襲せしに過きされとも、其の實は、小學大學の別は、單に其入學者の年齡によりて云ふにあらす、されども此の說朱子之を採りしかは今仍一說として此に揭く小學の書前述の如く盛に海の內外に行はれし者なれば、解釋の本、亦隨

ふて甚た衆し、而して明の陳選が句讀清の高愈が纂註尤も世に著はる、我か邦貝原益軒竹田定直同輯の小學集疏、昌谷碩の小學合纂あり、又中井竹山履軒の雕題佐藤一齋の欄外書等あり、又講義錄體に解釋せしは、中村惕齋の小學示蒙句解あり皆以て參考に資するに足れり

内則曰凡生子擇於諸母與可者必求其寛裕慈惠溫良恭敬慎而寡言者使爲子師子能食食教以右手能言男唯女俞男嬪革女嬪絲

（總旨）此れ人の生時より老年に至る一生の徑路を敎育的に叙述し、此に由りて進むへきを言ふ、小學は卑者幼者に向つて尊者長者に敬事する道を敎ふるを主とすれは先つ生時の初より幼穉時代の事を說けり

（解義）内則　漢の戴德が輯めし禮記の篇名なり閨門（奥向）の内にて則り行ふべき禮儀を述へるを以て内則と名く　凡生子　禮記の原文には此の三字なし朱子の本篇を採り小學に入るゝ時に、新に加へし語なり、凡とは一樣に總括して云へる詞なり、内則はもと一國の君たる諸侯の禮を述へしを今汎く卿大夫士を兼ねて云はんが爲に、凡生子の一句を加へしなり　諸母與可者　諸母は父の衆妾なり、可は列女傳（漢の劉向が著せる書）に阿に作る即ち阿保にて保母なり　寛裕慈至慎而寡言　寛は「ゆるやか」と訓して、物の廣くしてくつろぎのあると、裕は、もと衣服のみひろなることより、物のゆつたりとして迫らぬことに用ふ、故に劉彝は寛則德量有容裕則臨事不迫と注せり、慈惠は慈悲深くして惠み厚きこと、溫は態度の穩かなると良は心掛け易らかなり恭は「うやゝしく」と訓す行儀良きこと敬は「をそれつゝしむ」なり劉彝は恭則容止必莊敬則誠明不散と云へり　子能食食　上の食の字は「しよく」と讀み、動詞にて、物を食ふこと下の食の字は「し」と讀みて名詞にて食物のこと男唯女俞　唯俞共に人が呼ふ時、吾より應する聲なれとも、唯は早く應し俞は緩かに應すること、此れ男女兩性の本義に從ひ、一は剛性の言を用ゐ一は柔を用ゐしむるなり　男嬪革女嬪革　嬪は大帶なり革は毛を去りし皮なり革は剛く絲は柔かなれは、亦男女の本性に隨ふて其の用を異にし以て自然に其の德性を養成し又兩者の別あること知らしむるなり

（通釋）幼穉の習慣は、自から天性となれは小學の敎は人生の初めよりして慎まざるべからす禮記の内則篇に此義を述べて曰く凡そ何に人を限らず乃ち國君は勿論苟も大夫士にして國の模範となり中堅となる者にして兒子を誕